



江戸名所圖會
十八



丘氏之記

名所圖會卷之七

搖光之部目錄

富賀岡八幡宮
 海福寺
 本誓寺
 六間堀神明宮
 日向院
 猿江泉養寺蓮
 三井堂
 藤田社
 八月初十日
 永代祀世尊

日先社
 淨土寺
 淨心寺
 法禪寺
 靈雲院
 源八幡宮
 六百羅漢寺
 飛戸天満宮
 外新梅

砂村元八幡宮
 採茶庵舊蹟
 一蝶寺
 淨心寺
 法禪寺
 靈雲院
 源八幡宮
 六百羅漢寺
 飛戸天満宮
 入林的文

武藏國八幡郡摩子
 成内王

名所圖會

武藏國八幡郡摩子成内王

東覚寺 新編

香取太神宮

寶蓮寺

常光寺 六師院 六番司

陸奥太子堂

慈光院

若孀権現社

押上最教寺

蒙古退治日丸旌曼荼羅起首

秋寺庵中の島

柳崎妙見堂

大法寺 番社

靈山寺 空法親王 寺廟

中郷八幡宮

法恩寺 番社

中の郷尾西の島

業平天神社

遠州秋葉山若寺

第六天洞

多田薬師堂

妙源寺

最勝寺

本之寺

さくらしけ井

大川橋の圖

三圍稻荷社

牛湯神の文

太子堂

長命寺 牛湯無光天 長命の権 自在庵田址 柳樹

清地秋葉権現子代世稻荷社

牛湯若王子権現社

寺清蓮華寺 太子

白鷺の神社

隅田河

須田の河原

隅田河堤 堤春

隅田の宿

都多

本母寺 柳若山王 権現社

梅若池塚 回縁起

特の橋 水神社

庵邊

牛田薬師堂

法江若光寺

本下川薬師堂

平井聖天宮 不動堂 中井の渡

普賢寺

一の江妙音寺 盧舎

今井渡

新宿渡

半田稻荷社

小弓曹子墓

乃徳八幡宮

神明宮

松戸の津

乃徳船場

謙田妙福寺

夕顔観音堂

猿ノ腹

相摸巻

全別院廢址

辨財天祠

若照寺 什寶古鈴

法願寺 圓庵寺

内川

関屋の里

若瀬川

北頂う清

若宮八幡宮

清重稻荷社

関屋天満宮 元天保

鐘う潭

葛西六郎墳墓

浄無寺

善通寺

葛西花島村

二の江妙音寺

善研若徳之旧跡

中川 同約魚の糸

熊野権現祠

謙田妙福寺

小糸成康小僧の墓

宋又村帝釈天社

和洞寺廢址

夕顔観音堂

松戸の津

相摸巻

若照寺 什寶古鈴

乃徳八幡宮

神明宮

全別院廢址

法願寺 圓庵寺

半田稻荷社

小弓曹子墓

乃徳船場

法願寺 圓庵寺

乃徳八幡宮

神明宮

全別院廢址

法願寺 圓庵寺

長崎湊

市河城址

國府臺

玉府城址

鏡石

真弓浦

真弓經橋

葛飾八幡宮

安房湊神社

妙正池

勝呂田池

同陰竈圖

新利根川

根本橋

金光明寺

持玉坂

真間溪

真弓子鬼名田

八幡不知森

正中山法華經寺

妙正大明神

洗川

甲宮

迦羅崎起瀨

總寧寺

同古戰場

真間入江

真間法寺

真弓の井

曾谷妙見寺

葛飾神社

阿波波神社

圓光大師

市川渡

鐘ヶ淵

内宿山

真弓法寺

梨園

高石神社

若宮八幡宮

石茅

意富目神社初詣座地

天道念佛

九月廿日祭禮圖

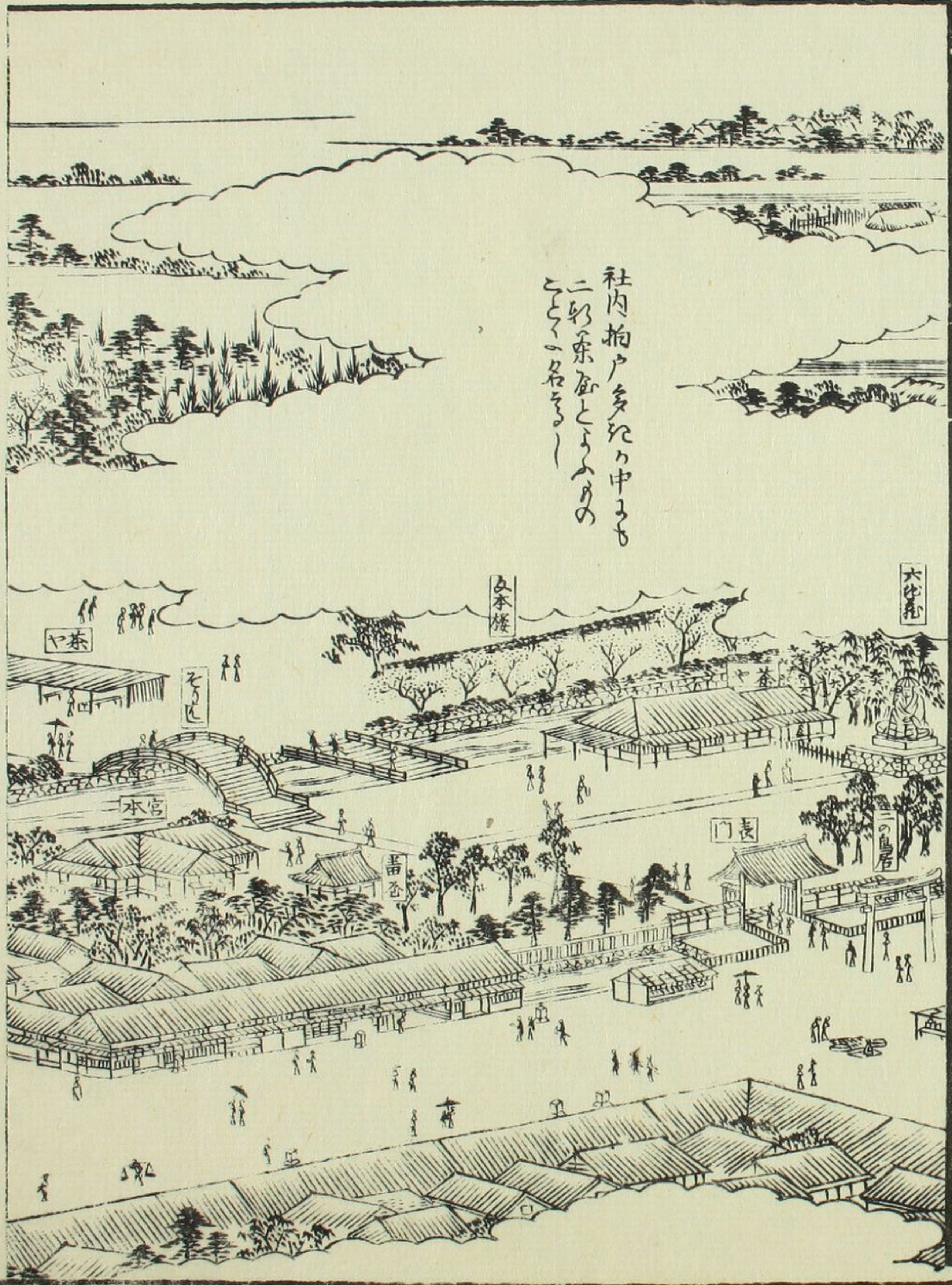
夏見劇

慈雲寺

茂沼神社

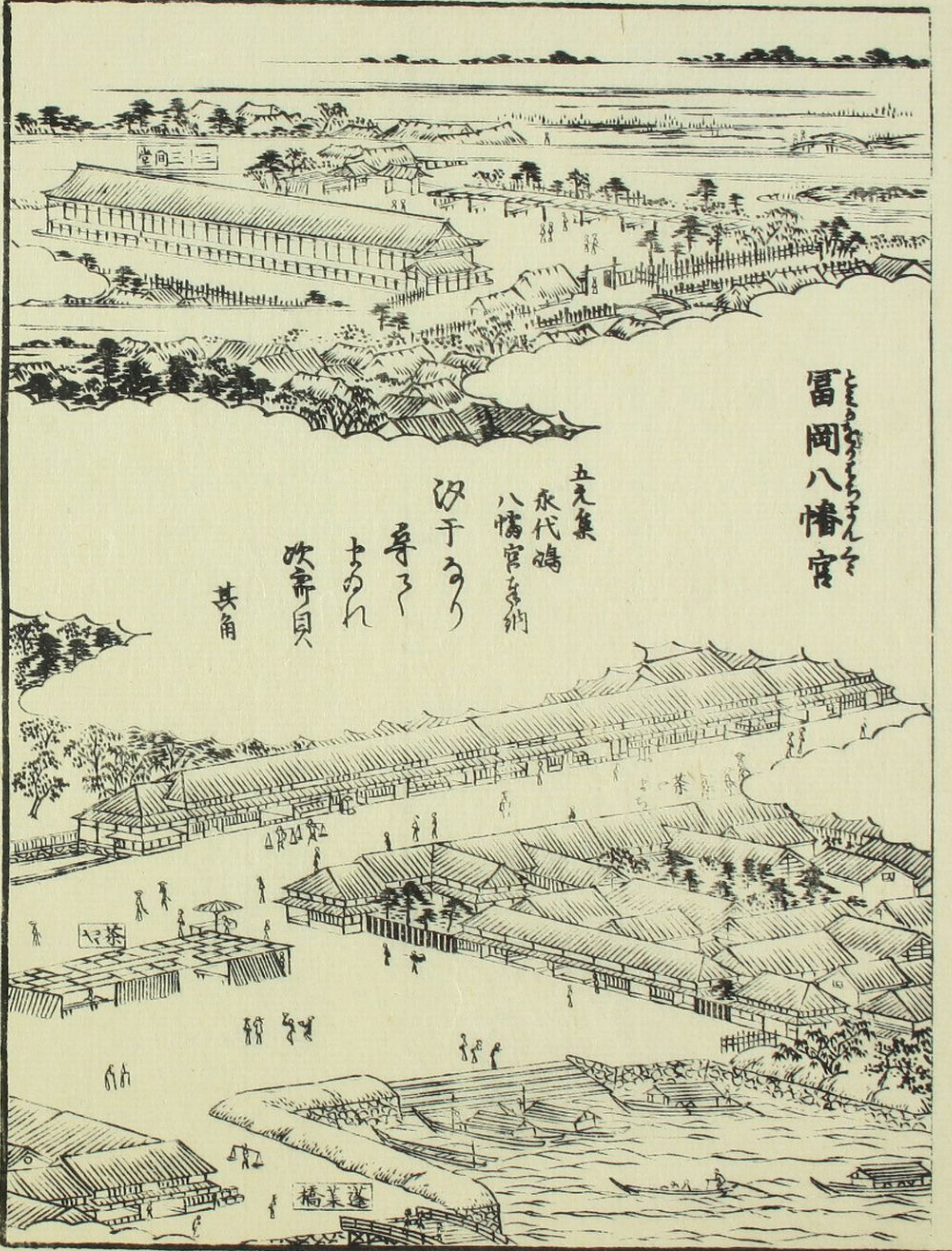
新橋

意富目神社

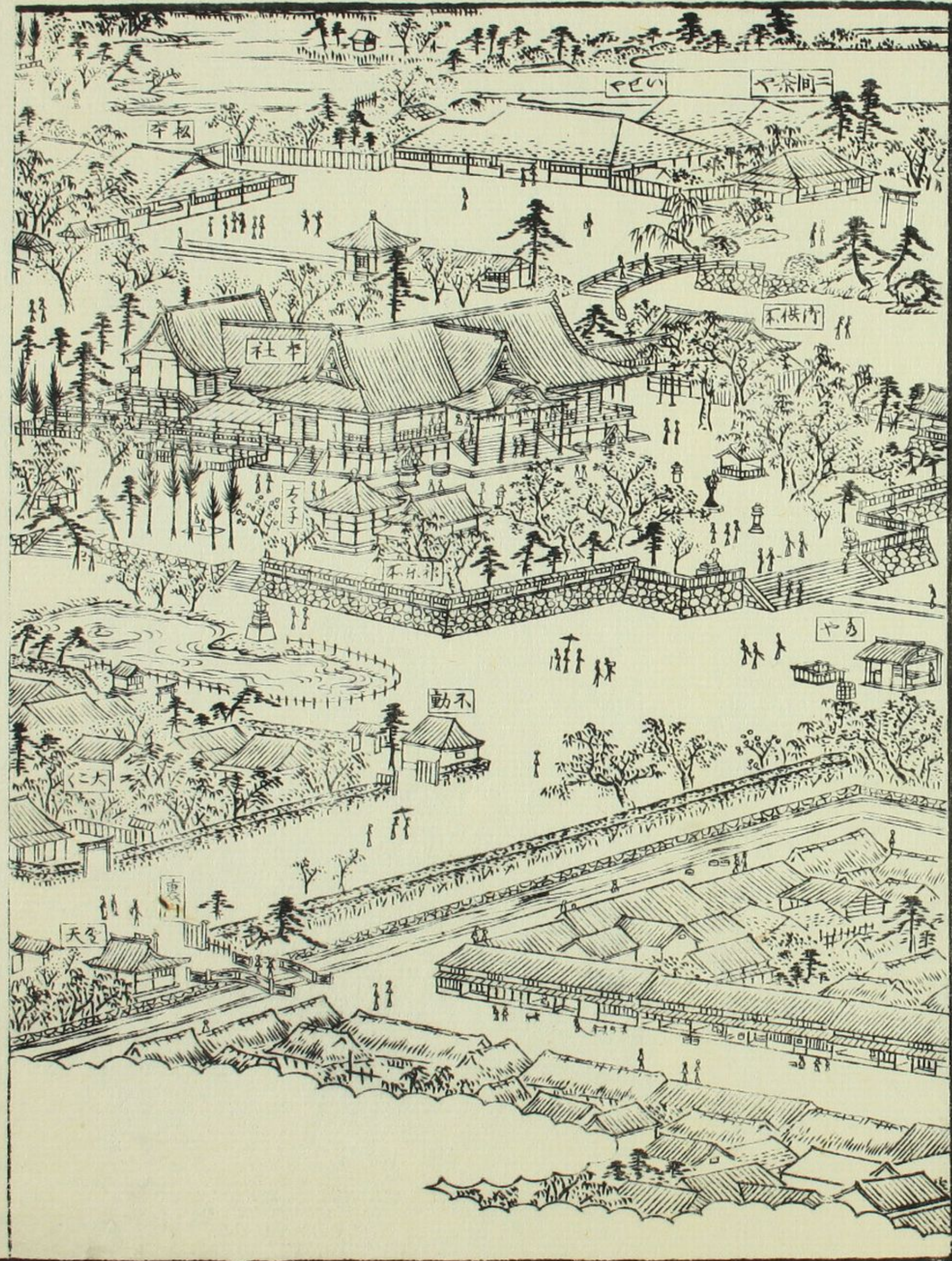


社内拍戸多死り中も
二軒茶屋とよふりの
とく一名さし

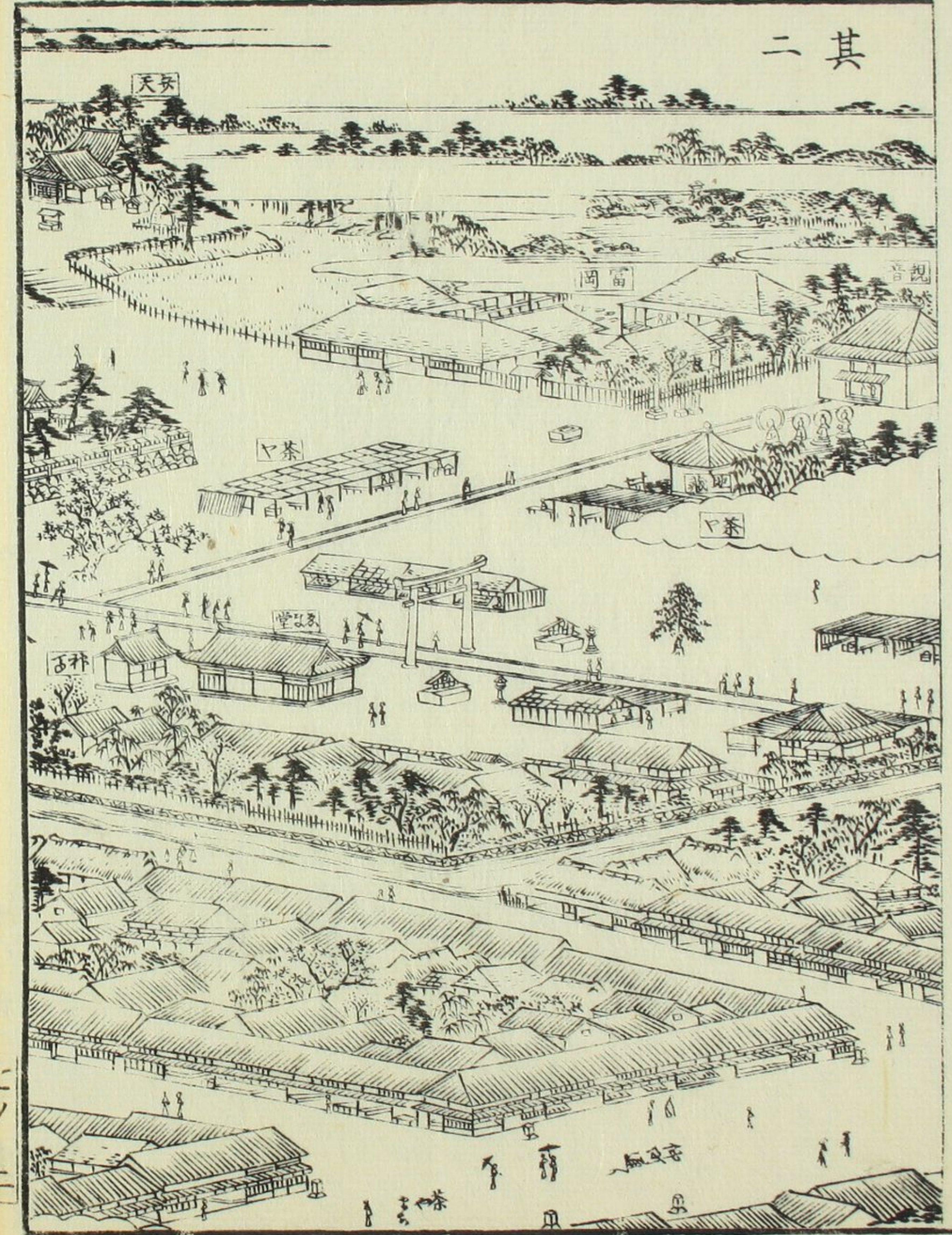
富岡八幡宮



五元集
永代橋
八幡宮を納
以于るり
舟り
舟り
舟り
其角



其二



三其



五
 とれこの
 まらち
 いろそんせ
 空さる所代ハ
 ありき代の
 仁和寺宮



富岡八幡宮

深川永代嶋

別當の真言宗

大栄山金剛

神院永代寺と號す

江戸名不記寛永五年の夏弘法大師の靈亦あり

本社 祭神 應神天皇

神影の相殿 右天照大神宮 三座

相傳往古源三位頼政當社八幡宮の神像を尊信を其後千葉家

及ひ足利將軍尊氏公鎌倉の公方基氏又官領上杉等の家より傳へ

太田道灌崇教殊に厚ありり道灌没すふの後ハ神像の所在も定

あらば至一小寛永年間長盛法印靈亦よりり感得と

四年の頃靈夢を感し宮社を経営と目ありと

真蹟あり社内末社多し依悉く是を畧と

當社四隅鎮守 艮隅 蛭子宮 巽隅 荒神宮

坤隅 摩利支天宮 乾隅 大勝金剛宮

園女楼 永代寺林泉のちあり

二華表 惣門の傍あり

富賀岡八幡神祠石華表銘並序 維著雍敦祥之歲都下人某等拾漆名裁力率錢 建富岡八幡祠前石華表九厥高壹丈伍尺九右中 馬蓋此以代木備不朽也厥石取諸相之土肥山 鳳卿文舉也欽所聞之國家旁及自禱云適具狀來諷 由中而况於不神周之歆可歸也因叙厥載於神忠信 人載也上心矣其所需也知也叙厥載於神忠信 銘以繫尤柱亦其所需也知也叙厥載於神忠信 銘昔應神帝真協天 威露顯赫奕世且千 惟石之柱磐之祠前 敦忠祇肅神監昭然幽宮陞隲福釐永年

元文戊午夏五月

東都中秘書監源鳳卿子陽甫撰
得水赤井啟拜書

山岡 毎年三月廿一日弘法大師の御影供を遊行せしむるに同日中興社別當永代寺の林泉
祭禮 開年八月十五日又執行せしむるに同日神輿三基本所一の橋の南藏舟浦の前より行祠へ神幸同日
尚社に流筒馬をとりて花ちを假屋敷敷をとりて見物と貴族市をとりては同書より
あらん飲

當社門前一華表より内三四所り向ハ西側茶肆酒肉店軒を並へ常小
絃哥のあり絶と殊と社頭より二軒茶屋と称する貨食屋杯ありて
遊客絶と牡蠣蜆花蛤鰻鱺魚の類ひを此比の名産とせり

二十三間堂 同所より東の方よりあり相傳寛永年間 或人云九年 大江戸
の弓師備後といふ者射術誓古の爲京師蓮華土院を撰し二十三
間堂を創立せん事を乞依後草のわいて地を賜ひ諸家より勧進し
て建立の功を募るるに於て同十九年壬午十月普請落成と
清水寺



永代寺山荘

毎年三月廿一日より
同廿八日迄のうちに
林泉をひいてて
諸人よえしむ





の辺り今夫嶺と云ふ所の三三回堂の回地ありその地
 今の町ありと云ふ所俗回堂前と唱ふるも三三回堂の地と云ふ所
 回縁の邊に罹る灰燼なり其後今の地より移されたりと云ふ
 江戸三三回堂夫敷帳と懸服大師の發起ありとあり又一説云む
 流の武士これを建たし江戸社樹の連入樹と云ふかをそりて
 然るに元禄十一年戌寅九月

別崎辨財天社 同所東の方別崎あり列當を吉祥院と号す本尊

辨財天女の像弘法大師の作との相傳元禄年間深津氏正隆
 台命を奉へ八幡宮と云ふ東の方の海濱を築立り陸地と云依同

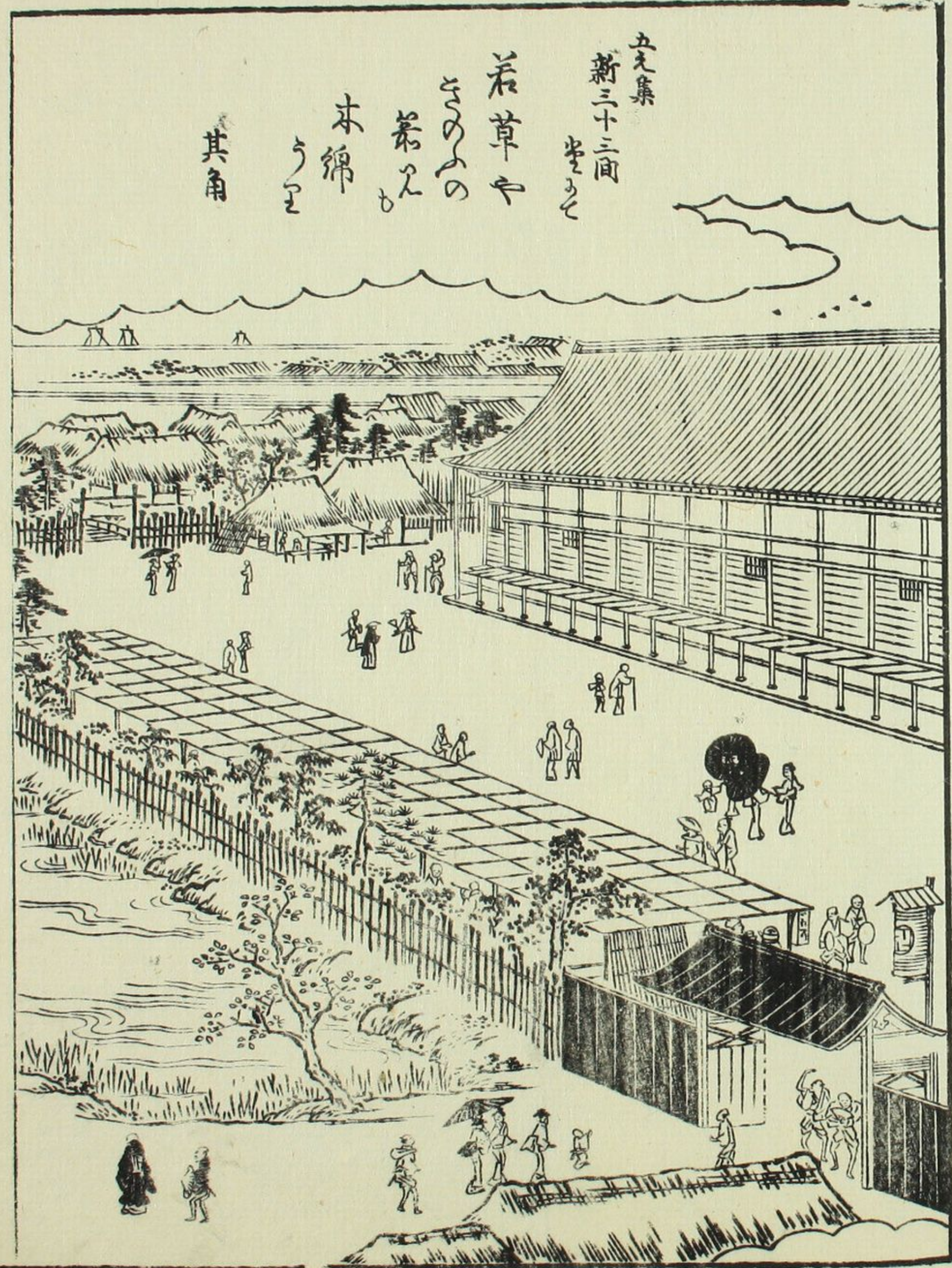
十二年庚辰護持院の大僧正隆光 此地は天女の宮居を建立と云
 方あり

此地の海岸あり佳景あり殊更弥生の潮盡まり都下の貴袵袖を連
 る真砂の文蛤を捜り又の接舩を浮り妓婦の袷衣と奥の儀催
 ともあり春色を添ふの一奇觀たり又冬月千鳥も名をゆり
 長光山陽嶽寺 深川富岡橋の北結横小路あり妙心寺沘の禪宗と
 一々本尊觀音大士の像の恵公僧都の作ありと云向井氏忠務所

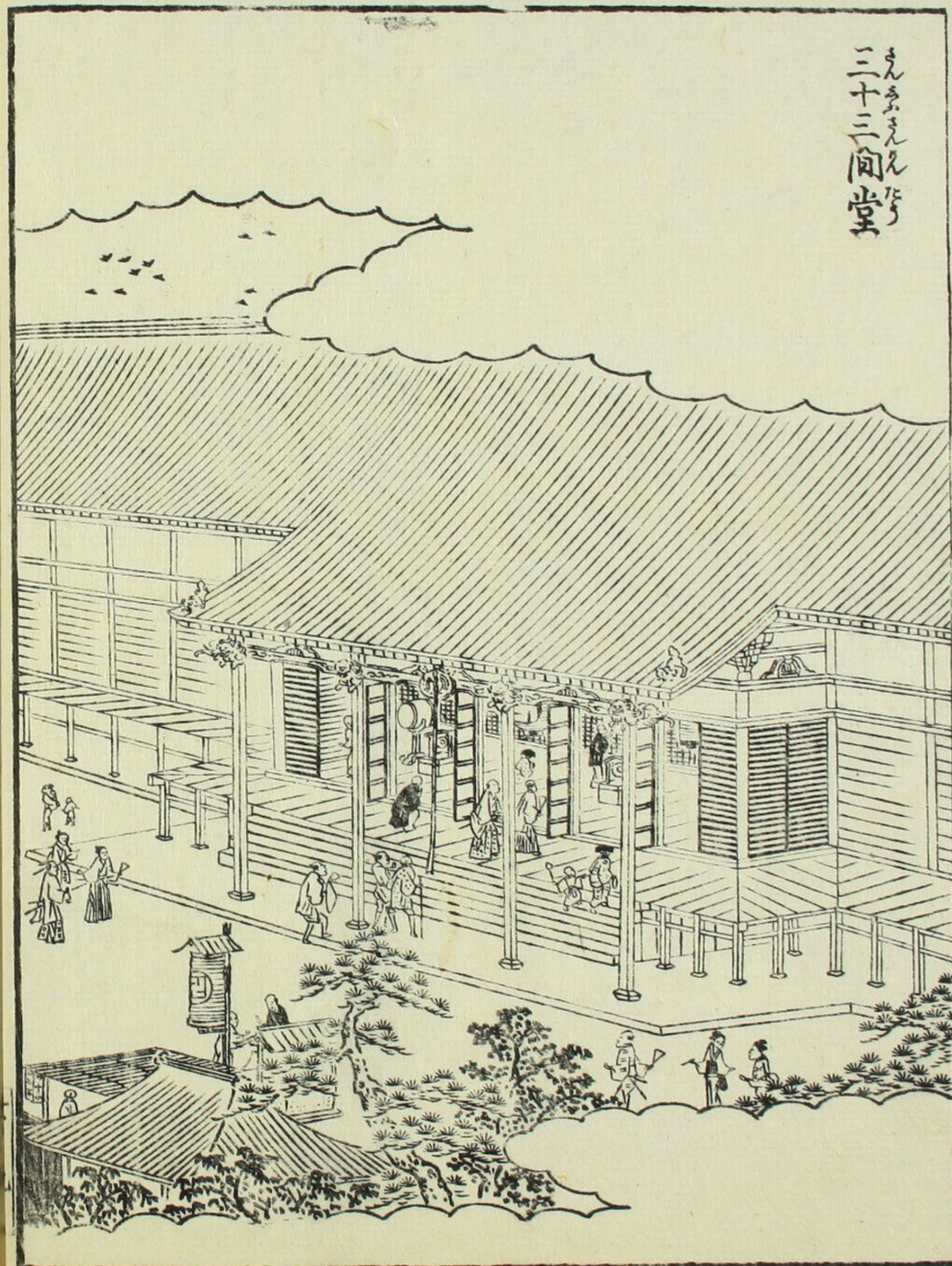
大池を以て名づる
 庭園にして月夜
 四時の勝飯を
 中へ召させ知堂
 の儀を以ては秋の
 禪人やおつと
 来りて市中の勝を
 賞し一様を
 下を御覧の
 冬の花の木の
 秋は色も
 一色の茶屋
 二軒茶屋
 聖中遊宴之景

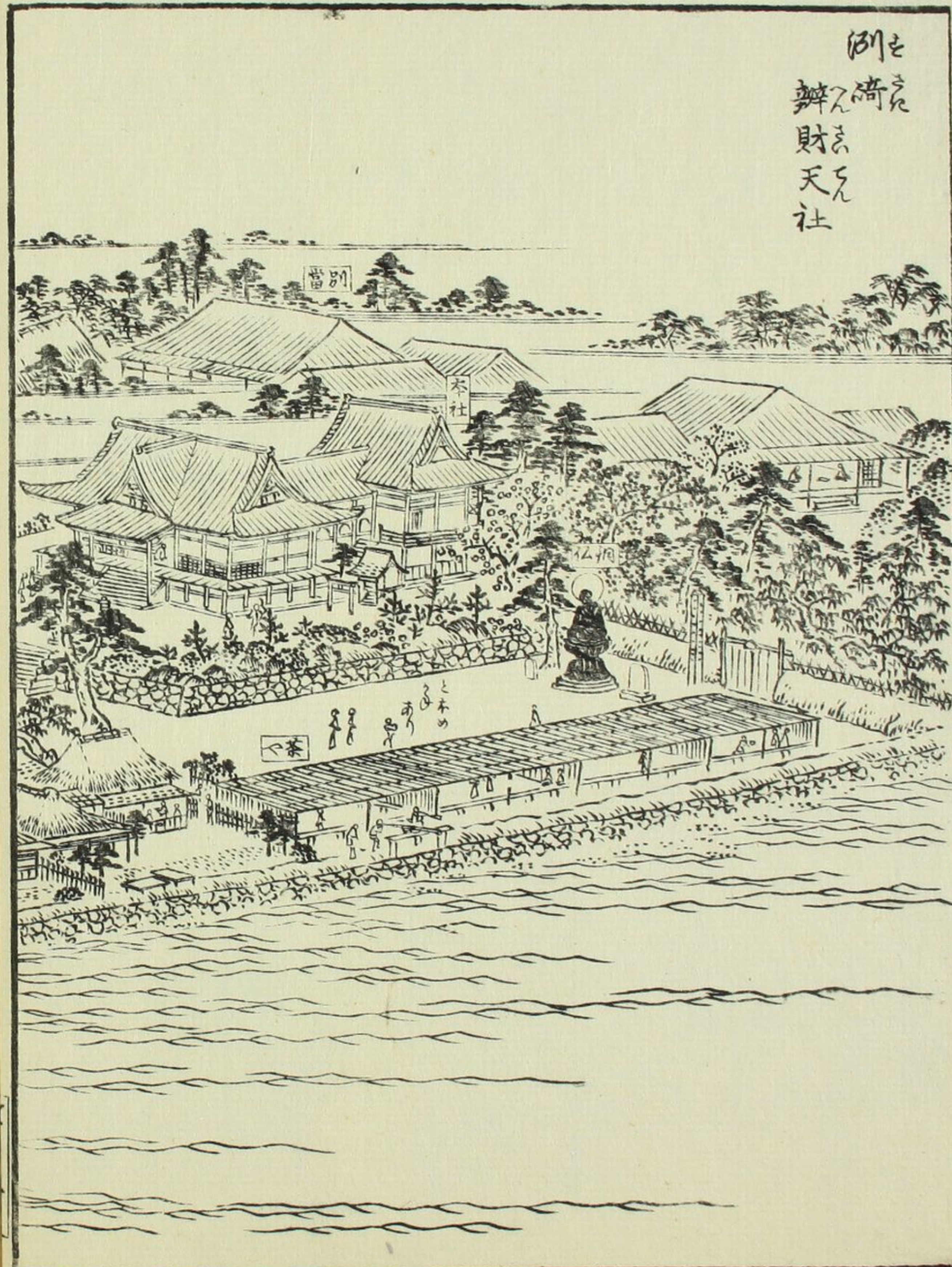
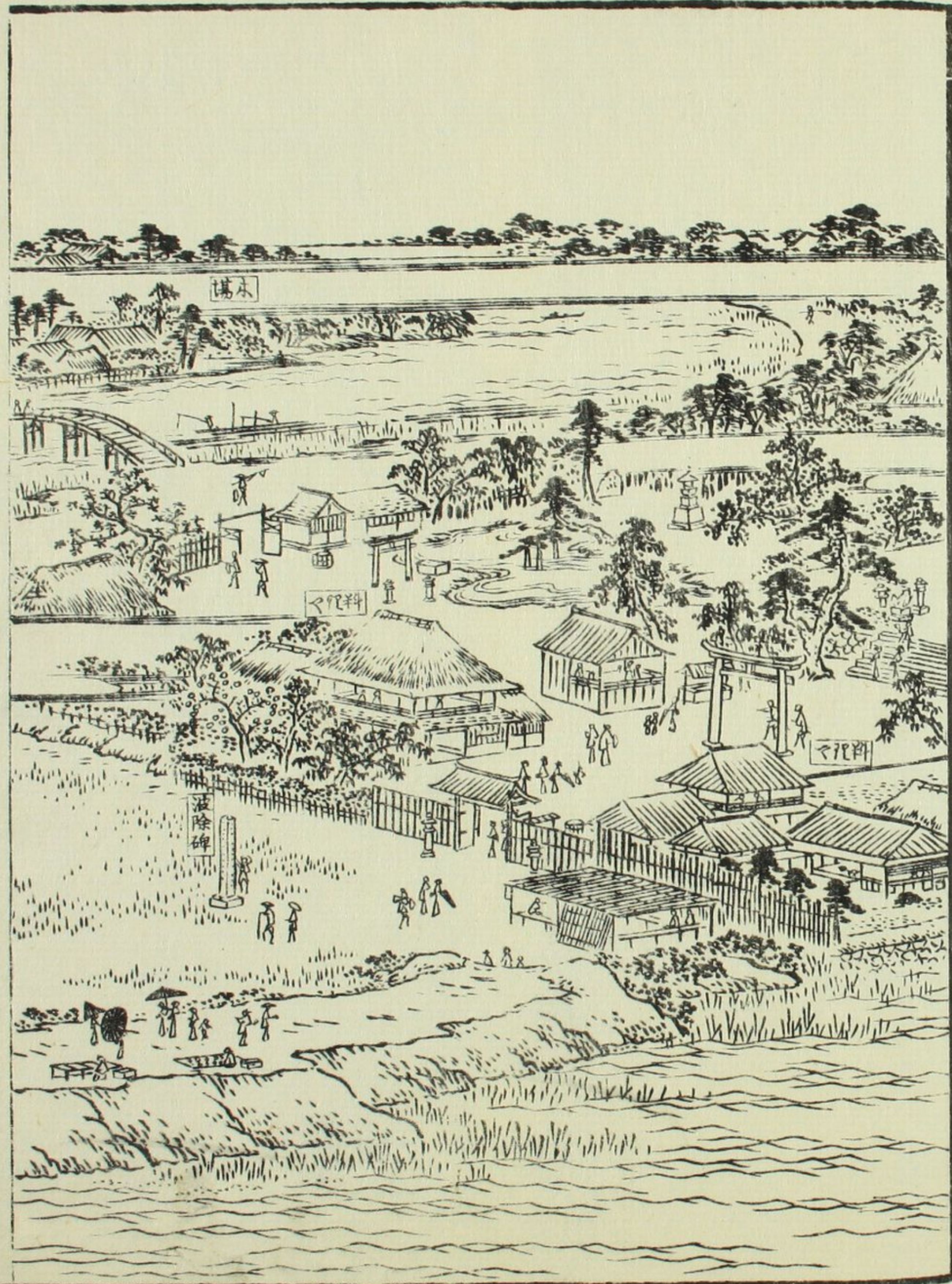


五元集
 新三十二間
 若草や
 そのしの
 若え
 本綿
 うま
 其角

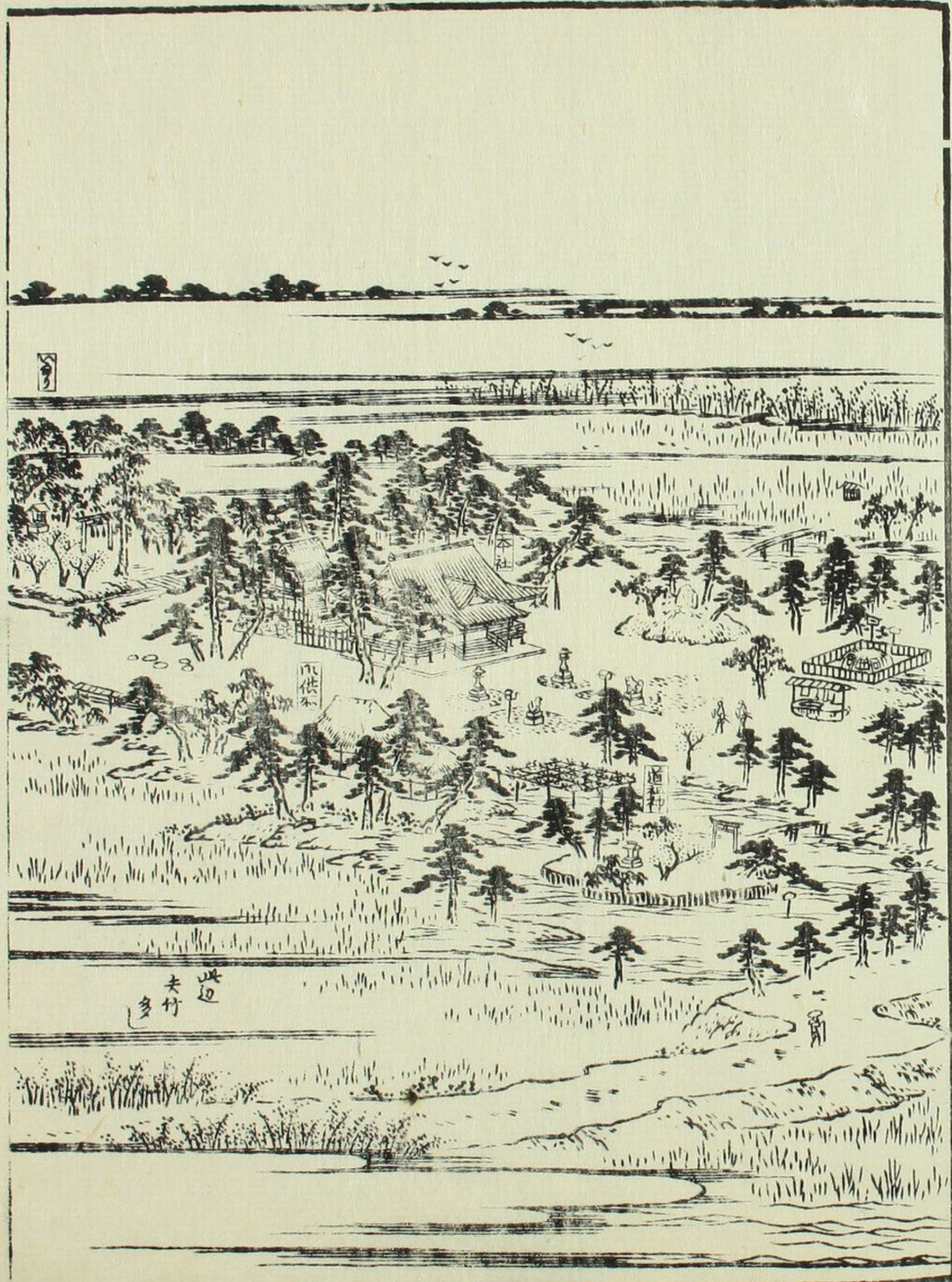


五元集
 三十二間堂



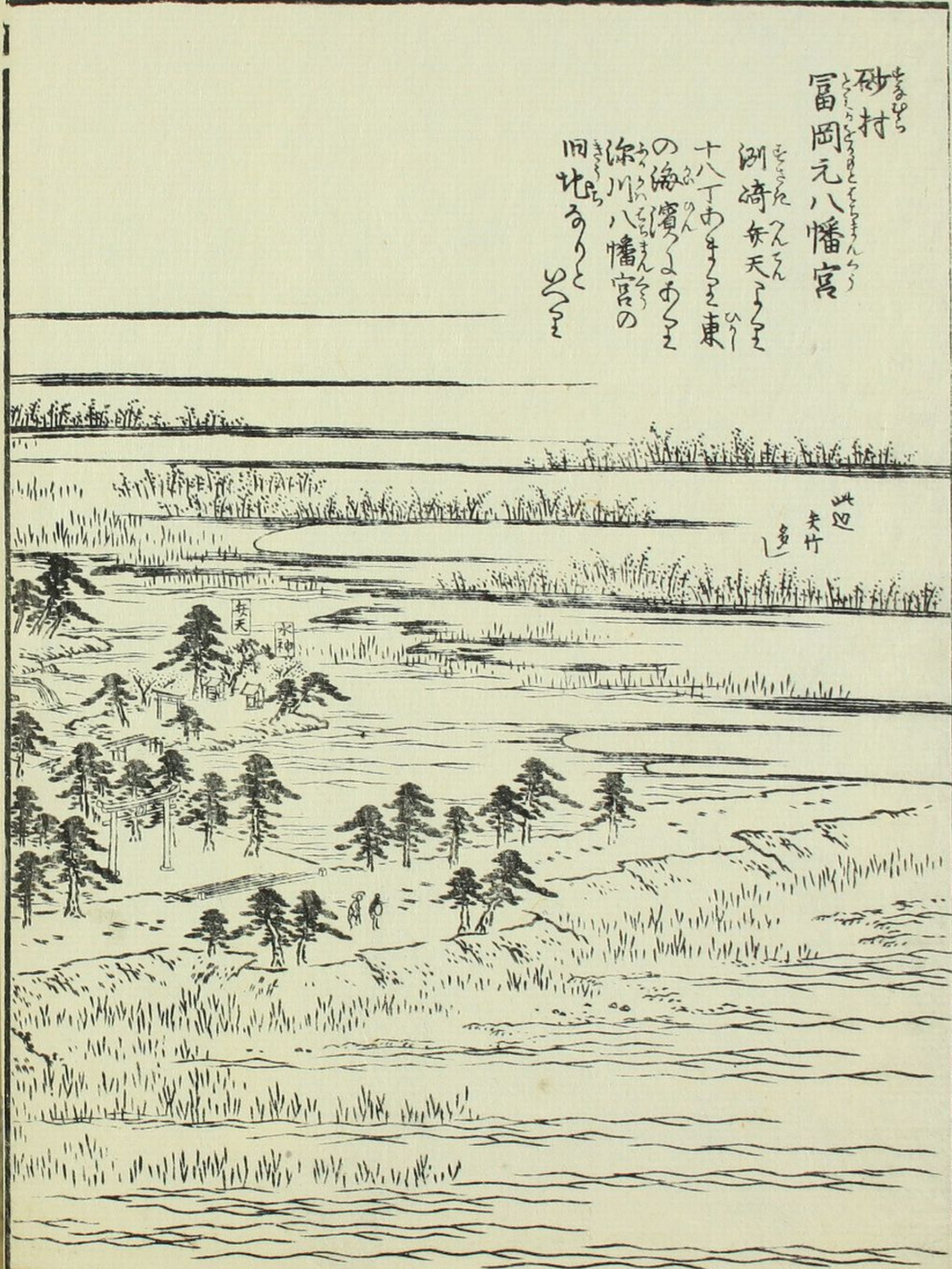


河之
 辨財天
 社



此
多竹

砂村
富岡元八幡宮
洲崎弁天
十八丁ありて東
の海濱ありて
深川八幡宮の
旧地ありと
いふ

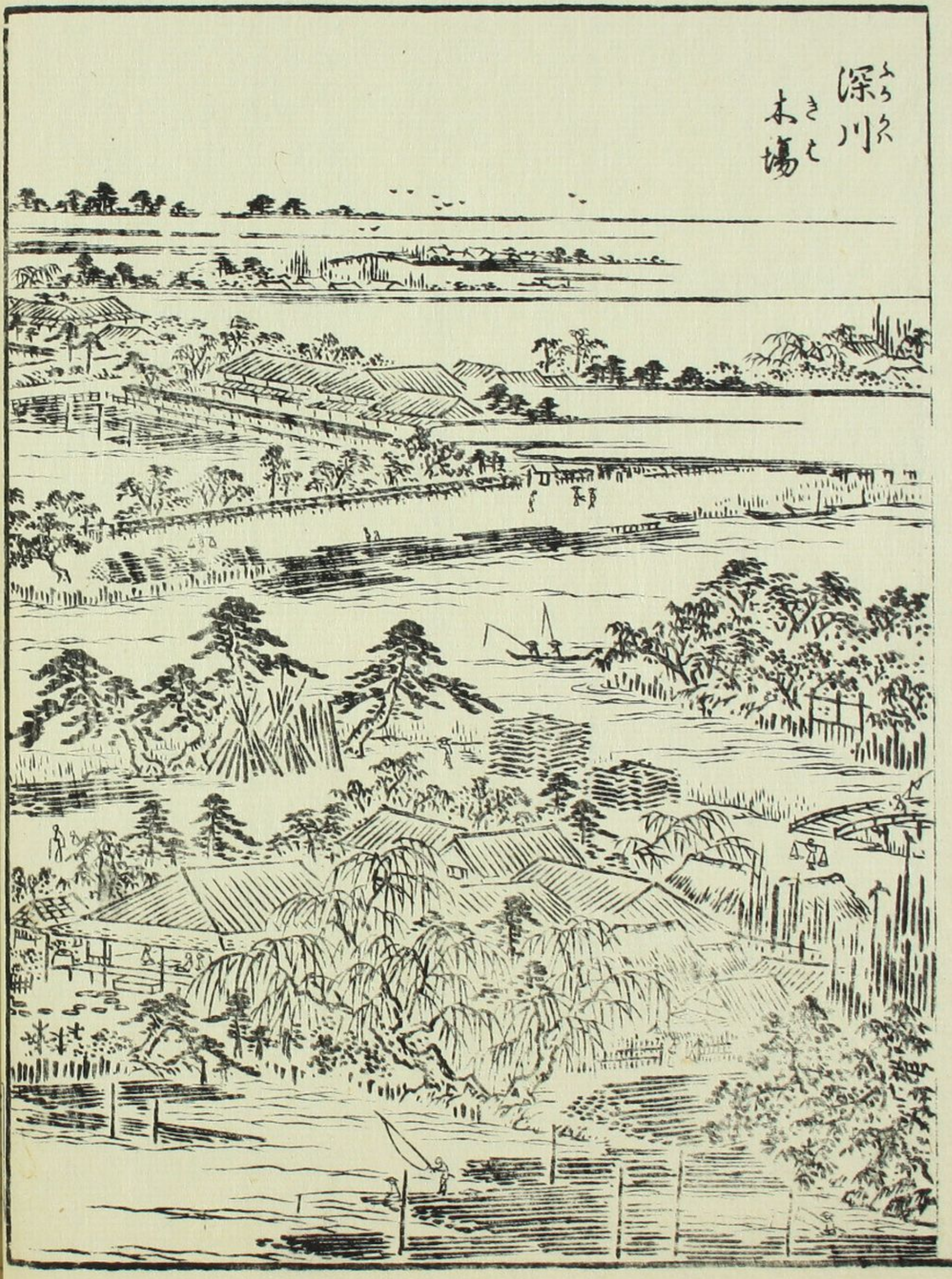


此
多竹

檜
其
小
菜
の
も
と
わ
し
宗
瑞



深
川
木
場



墓の精舎より文室和尚を冠山とて陽嶽の向井和尚の相列三崎見
 桃寺白室和尚の法弟あり見桃寺も領主向井氏

出山釋迦如来像立像三尺ありあり極妙作り坪内大隅守と云ふ人為寺文室
和尚の需ふに造りし彫刻也寺記に云ふ

二代目英一蝶墳墓當寺卵塔の中あり坪面は概外道輪信上元文二年丁巳四月十二日
と記してあり通稱は長八を信勝といふ

永壽山海福寺 同所寺町通り中程の右側より黄檗派の禅林あり
 江戸觸頭二箇寺の一負たり萬治元年戊戌の創建開山隠元禪師

中興之獨本和尚あり本尊釋迦如来左右に迦葉阿難十六阿羅漢未
 の像を安と開山隠元禪師の肖像あり

佛殿 額に二重
 掲る冠山隠元禪師の
 筆あり

大 隆 堂

本堂の上
 掲る額筆

空 燈

聯 額

妙お塔若美又玉毫長現瑞

庭門弘忍手秋後海冬末初

室衣也六妙道弥隆亦兼代
 祥利中真法靈振起於千秋

天王殿 額内
 佛と安と額に二

天 王 殿

聯 左右の
 大鶴の筆

海國衣氏風高名而浦明
 降魔捕正法遂又以安字

鐘樓 天王殿の
 右より大鶴

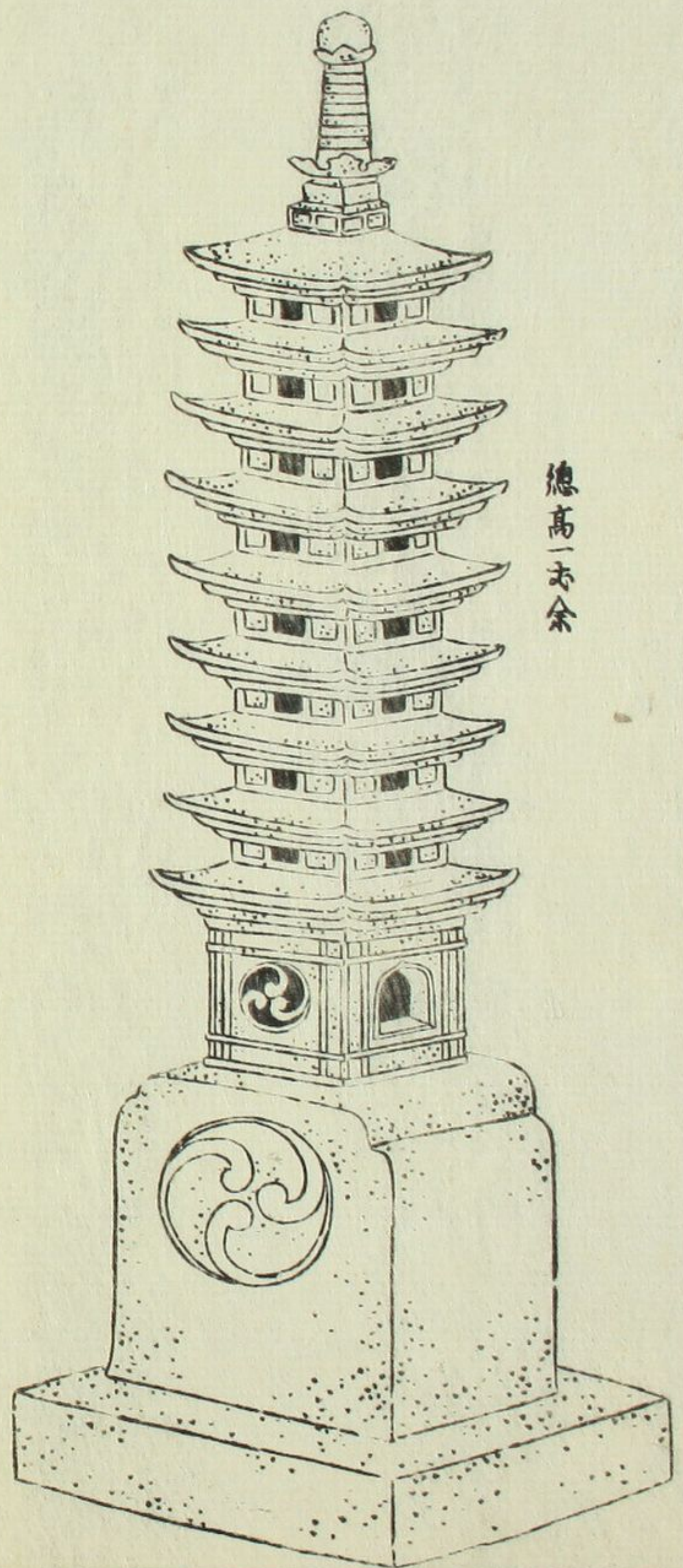
鐘 樓

其文たのこころ

崑山 洪鐘者寛文壬子年石川政勝个住居二指之
 爲大福田因請銘乎之冬初火起炎燎殿宇巨罌
 也時天和二年壬戌之冬初火起炎燎殿宇巨罌
 等鉢者同氏思失先亡之冬初火起炎燎殿宇巨罌
 及乎竣工知事來乞銘遂再舉此以鑄其上銘曰
 大化音燼内一火鑄成中虛而寂有扣則鳴
 洪音嘹唳醒覺群惺禪林令振地府業輕
 返聞自性寂寂惺惺禪源綿行大矣難
 化風永扇一家國昇平謹題 王 肇 敷
 開山八十翁隱元琦謹題 大 矣 難 名
 右三 年 癸亥 小陽 吉日 臨濟 正宗 三十三 世
 永壽 山 海 福 禪 寺 住持 沙 門 獨 木 源 和 南 謹 識
 檀主 石川氏 正之 正黃

九層塔

寺境池のわきにはあり高一丈五尺の石の塔あり相傳に武田信玄の
 りのありとせり上屋氏某を保持せり



徳高一丈余

採茶庵舊蹟 同所平野所より能諧師杖風子の庵室あり杖風本園の
 参列あり杖山氏より鯉屋と唱へ大江戸の小田原町に住て眞信たり
 後隠栖し一と号と 常は能諧を好む檀林風を慕ひ
 のち芭蕉翁杖師とて此遊に遊ん度凡六十年翁常より與せらるる
 云く去来ハ西三十三箇圃杖風の東三十三箇圃の能諧奉行あり

と杖風白集 予兩居採茶庵より杖風一は芭蕉子の号あり杖風杖風翁より其四代ハ
 杖風の芭蕉子の号あり詳あり享保十七年壬子六月十二日八十六歳うて没せり西本殿の中成徳也

向家もははとぬ花乃と花とていふ
 こめつれよのうら

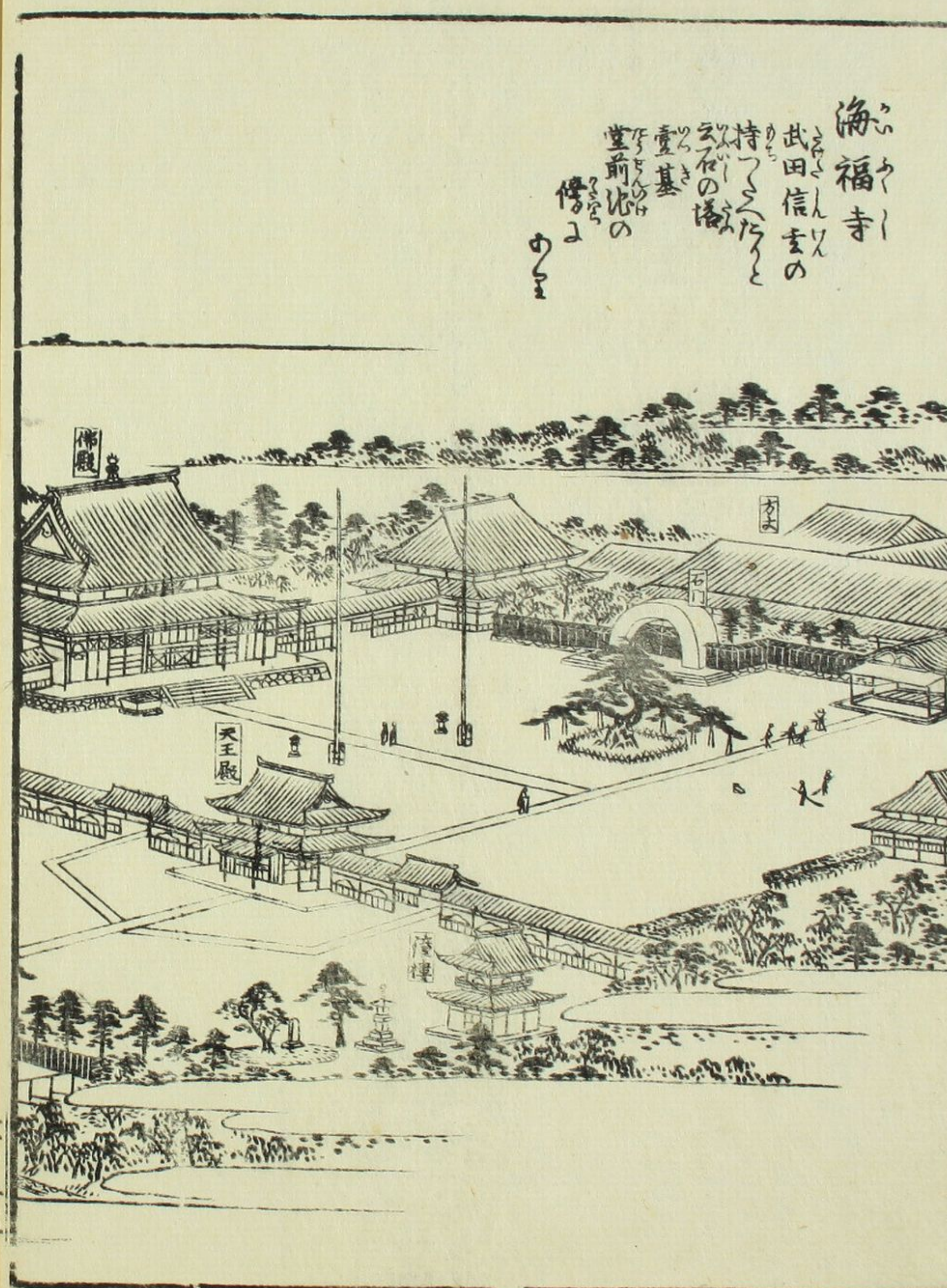
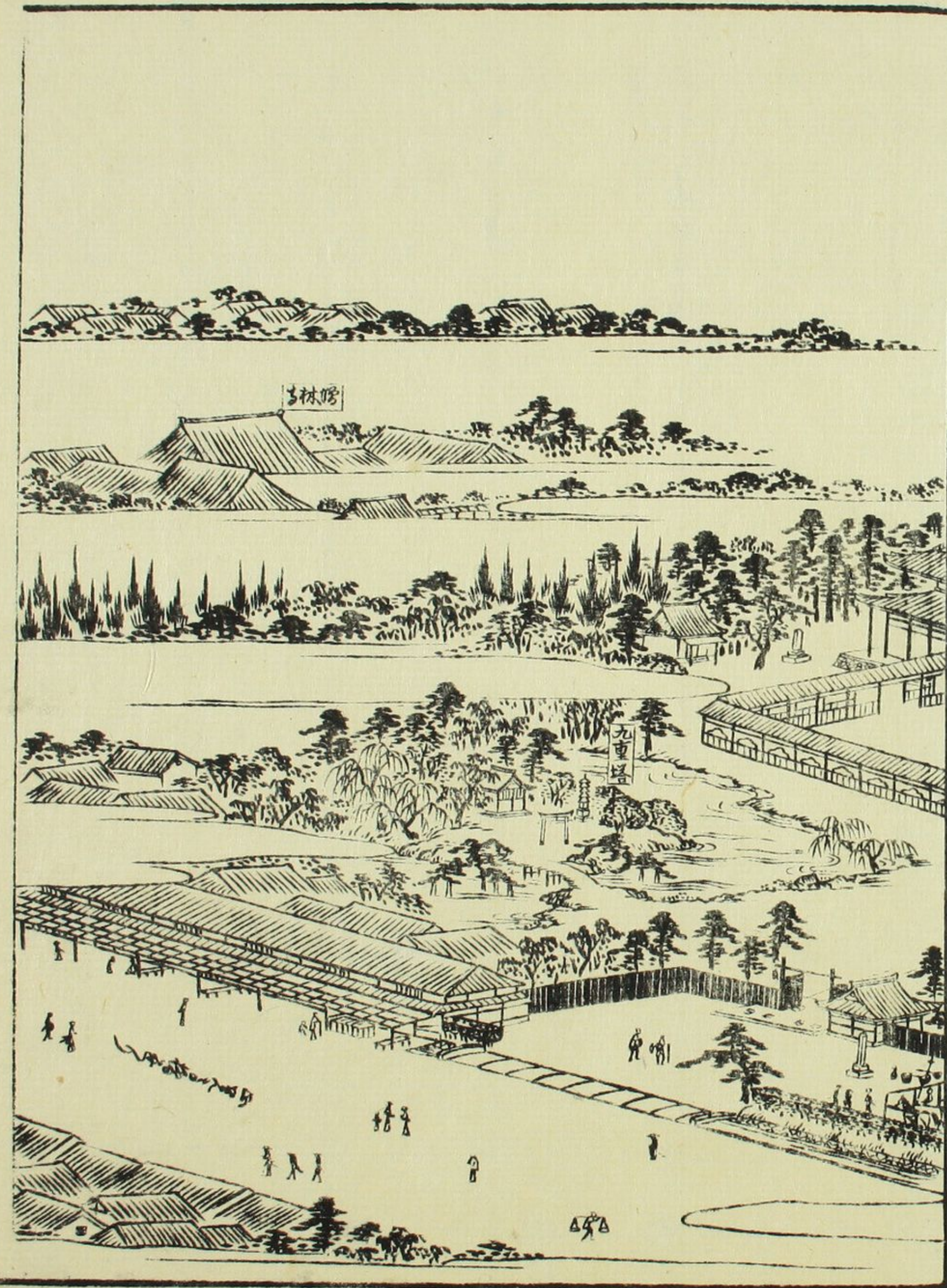
羨うとてひらりえさうらとて戸流り耶 杖風

深川の月も時雨ふ長うのうらりの相 全

海川よとてうられ

川の青葙の起野とてとてとて 全

法苑山浄心寺 同く通り正覺寺橋より北の方右側あり日蓮宗中興
 圓牙延山は屬と乃身延山の弘通所と稱せり萬治元年戌戌創建の
 寺院なりと閑山の通遠院日義上人と号と中興ハ覺成院日念上人
 たる本尊は釋迦如來の像を安とありて當寺よりとてとてとてあり



祖師堂 本堂の左より 七面堂 本堂の右より

相傳當寺の淨公院殿妙秀大師の菩提を弔ひせぬらん御建
立ありし精舎ありと當時淨公尼の小堀正一入道宗甫の妻あり

寛永十八年辛巳 大樹 御誕生あり頃正一入道の忠公を
補ふの一分は備んと春日の局は執事 御乳母あり

大樹を育しなる故に淨公尼卒するの後も猶生前の勤勞を思ふ
され萬治元年戊戌當寺境内若干の地を封し錫ひ又堂舎經

堂の料として大に資財を喜捨しぬ日義上人をして當寺尼山
にらしむ乃淨公尼の遺廟を建又香燭の料として同二年庚子寺

産を附せしむるなり 此寺の境内に阿彌佛從忠秋の母堂如藤全村氏清正の息女蓮成院

道奉山靈巖寺 日一北に隣る淨土宗國東十八檀林の一室より宏社の
梵刹ありと奉尊の阿彌陀如来開山靈巖和尚なり 和尚諱の松風檀蓮社
雄養と号を浄上高僧

傳は姓の里見氏南條小糸の産あり十三郡同縣青龍寺の秀岩師の室に入利深き其性明敏
聖に實し檀林の英より寛永十八年九月一日化寂せ給壽八十五又淨土傳燈系より南條
天羽の佐實の人或は後列所中の表姓の今川氏源津津運院院主の
法嗣ありと高向創の精舎松苗寺あり牧奉のいふ所を依是を略す

寺産を附せしむる寮舎僧坊堂を連結し魏然たる正元坊より造立
せし銅像の地あり大江戸六地所の一負ありと總門の内正面より

對し毎歲四月朔日より同日とて阿彌陀經千部讀誦修行あり
ゆへに道俗群請せしむ

相傳寛永年間當寺開山靈巖和尚或曰大江戸の東諸を顧て侍
者より稱て云く我大藍を此地に建し侍者の云く江潮浪高く鉢

盂底空し一竿巨楹碩梁を架せん師笑云く俟夫日わらん於是師
化疏を筆し諸檀家を勸勵し一簣毎に十念して願譜成結縁する

り故小四輩競廉廣汀日あらとと陸地とある 今靈巖嶋と
稱す其地也 其地早く

成て梵刹を用創し靈巖寺と号せしむる於て學資五十石とあり
爾法幢盛る起て五百の義龍恒に蟠る勢より河山和尚の世 尚寺第二世
松蓮社大僧

明曆丁酉の回録に罹り悉く灰燼とあるの後今の比も移りて其頃の比も海濱より軒寺院構営ありけり
なり成阿碩和尚 河山和尚の弟子ありて 興澤九品佛の寢基に 十方を勧進して比を築固め諸堂を建立せり

當知山本誓寺 重願院と号と相通りの向例あり浄土宗江戸四箇寺の一負た

唐佛の阿弥陀如來を本尊とて 相傳此本尊の相列小田原の漁者 魚畑を沈く彼比の海中

小得て後靈亦く依せ當寺よ女とありて寺者寺往古の小田原の

傳蓮社囉答阿和尚 創建一藤枝氏岡基の

浄舎ありり文禄四年丁未 嚴命よ依寺を大江戸よ移す

貞蓮社大誓上人文賀和尚中興の岡祖とあり

其後馬喰町の辺より比を賜ひり

水戸中納言頼房卿の浄母堂英勝院殿當寺を被造りあり

馬喰町

一蝶寺 同阿東の方海辺新田藪の内より京師妙心寺流の禪宗蒼龍山宣雲寺と号と元禄七年甲戌創建の梵園より卓禅和尚開山たり英一蝶翁曾當寺よ寓居と其頃の遊とて佛殿信房等の屏障悉く翁の畫あり故よ世俗一蝶寺と号と

日曜山法禪寺 同阿南の小路より浄土宗より京師知恩院より

本寺阿弥陀如來の像の佛工安阿弥の作あり 菩薩の像の雲中より羅列し常に行者を護念し場山の躰粧を模擬と

阿上人と号と 濃列惠那郡稻塚の住人格性ハ伊賀氏 弘治元年乙卯稻塚より

一城を築き江田の城と号けりといふ居住と

後出たかして駿別に至り中嶋と云比より閑居を由ゆ

と号け雲碩と改めて浄業を修行しり

御打入の頃道徳殊勝の字ある以て大江戸より召れ品川よりひと寺

境を賜ふ

比を習させられたり

龍徳山雲光院

寺の一あり本寺阿弥陀如来の像の京師東山獅より谷忍上人

の作といふ用山の還蓮社往善上人潮吞和尚と号せり

本願の阿茶局あり

局の大将軍家泥近の侍女ありて元和六年庚午

女御入内の時供奉の功より後一位と叙せらる當寺創開の

初も黄金二枚をとり堂材をとり

と号せり

額に後水尾帝の勅を奉りて良恕法親皇筆を添られ

五奉松

同所小名本川通り大嶋小あり

面を再獲ふ

川を隔て南岸の比に知恩院宮尊空法親皇御幽棲の舊跡を

天王山雲光院

武州越生の龍穩寺より属して本尊の聖觀世音用山に放ち

和尚と号く宝曆七年丁巳

あり

あり

あり

あり

あり

あり

あり

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

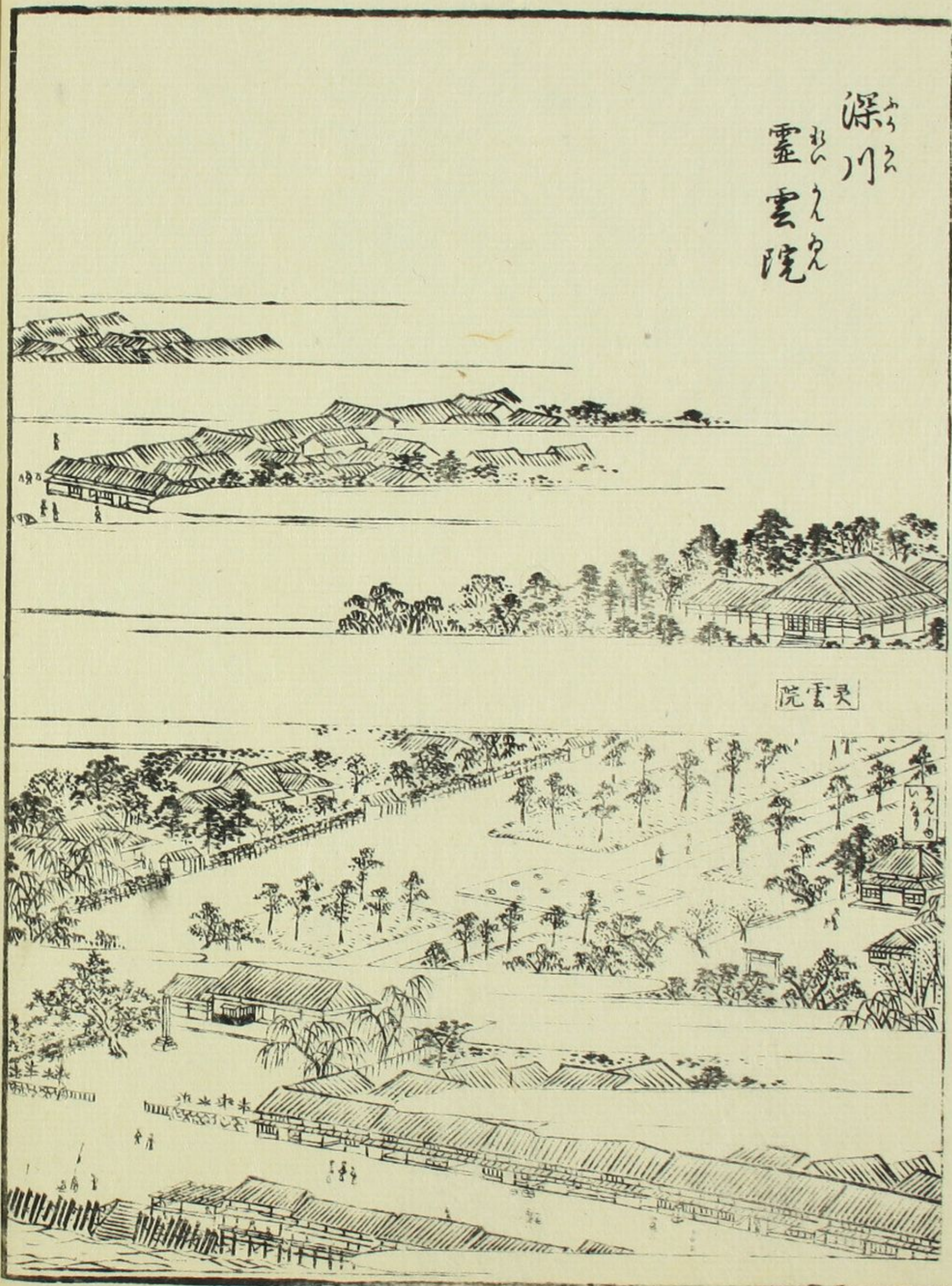
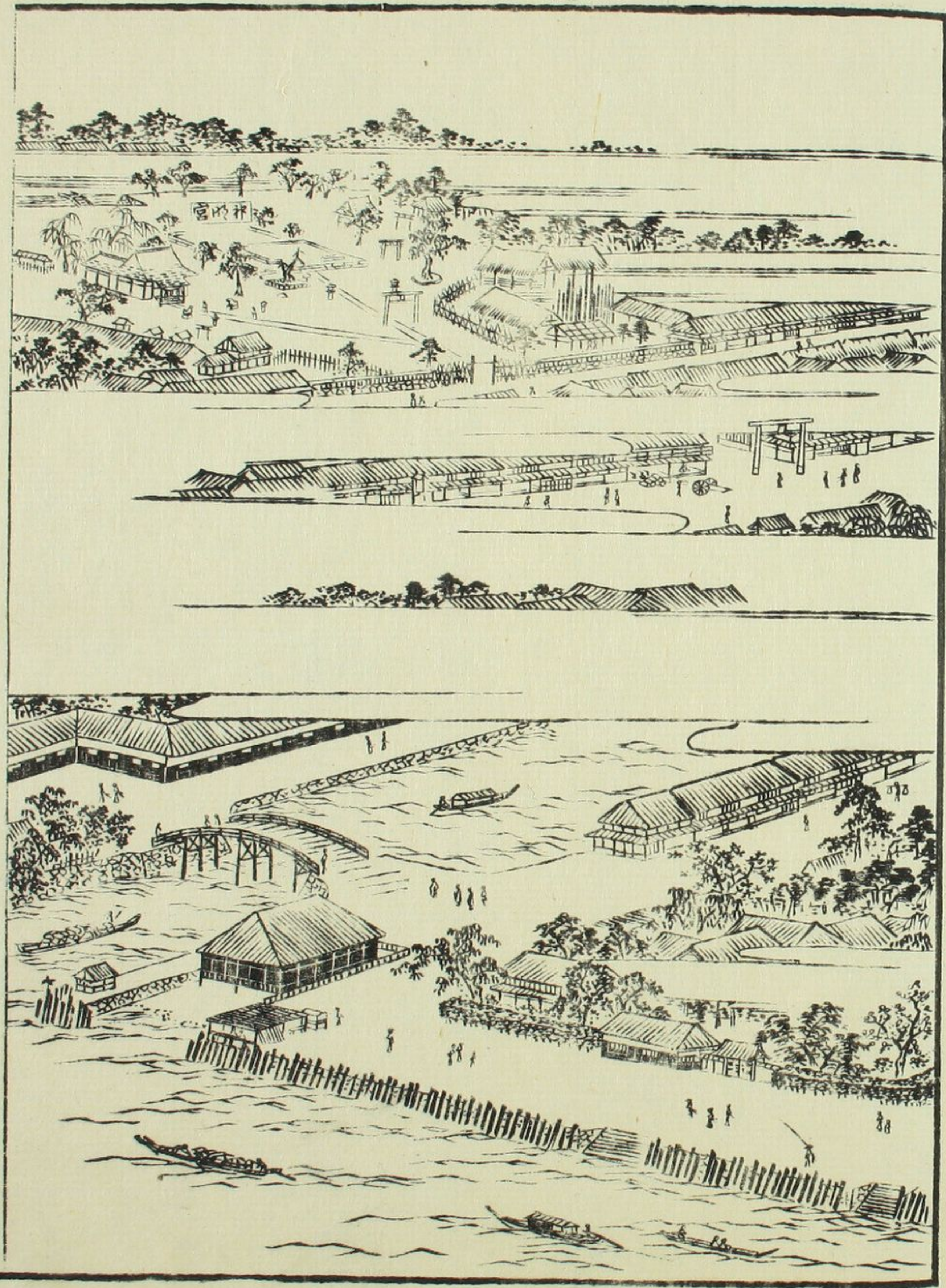
其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ

其の例もあつたといふ今も正月三九日の夕に松鼓を鳴らすといふ



深川
靈雲院

靈雲院

芭蕉庵

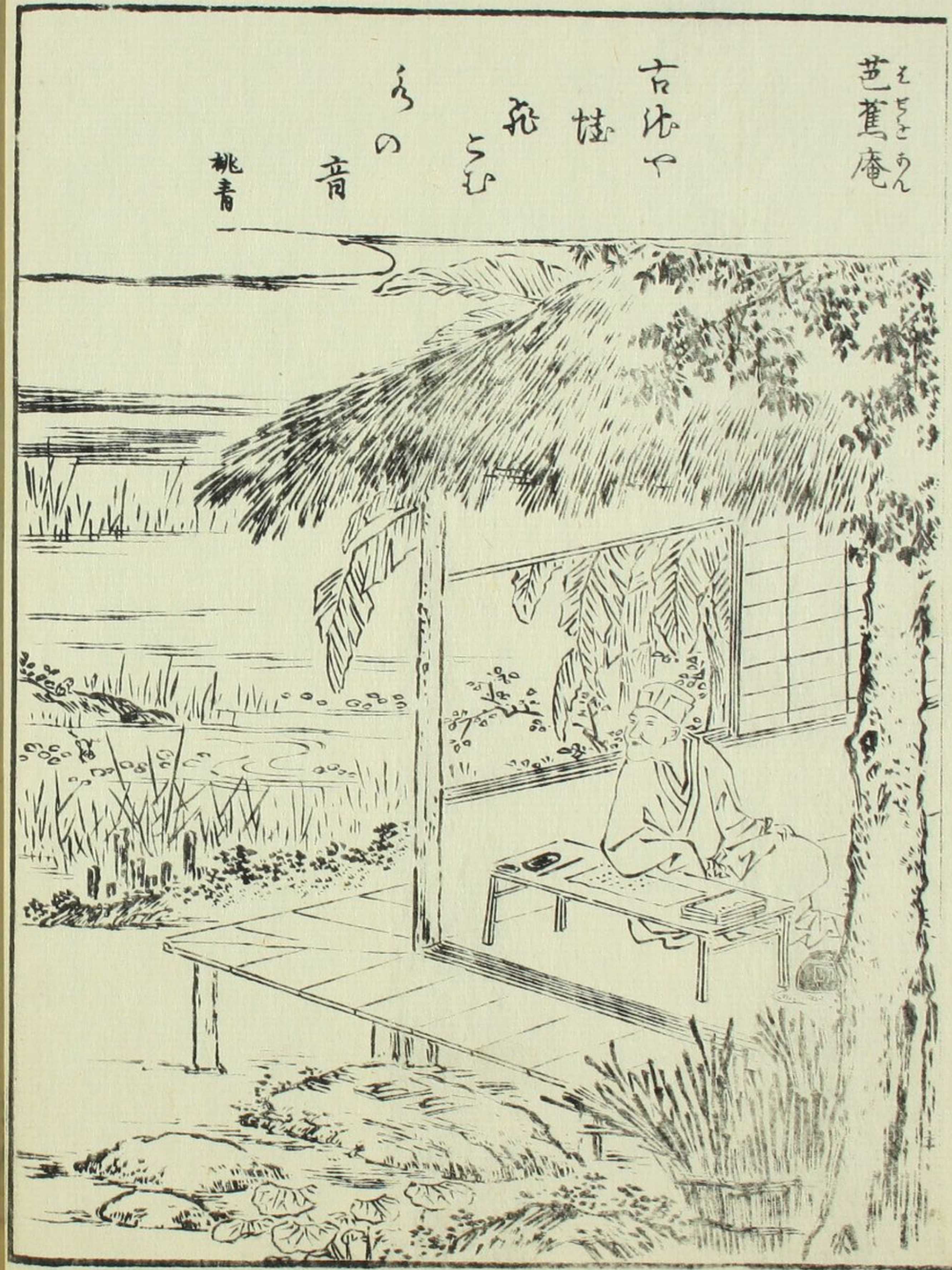
古休ヤ

桂

の

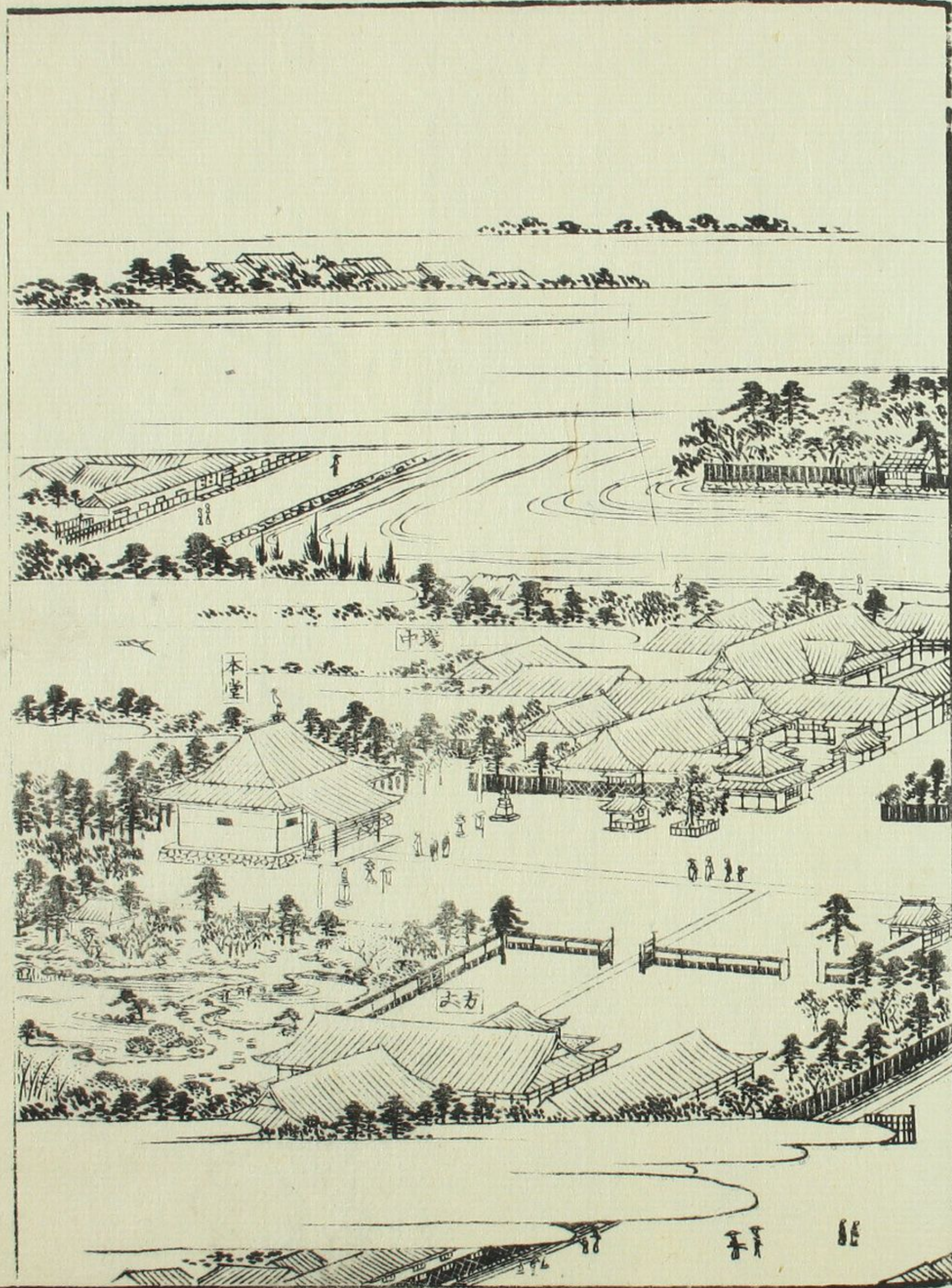
音

桃青

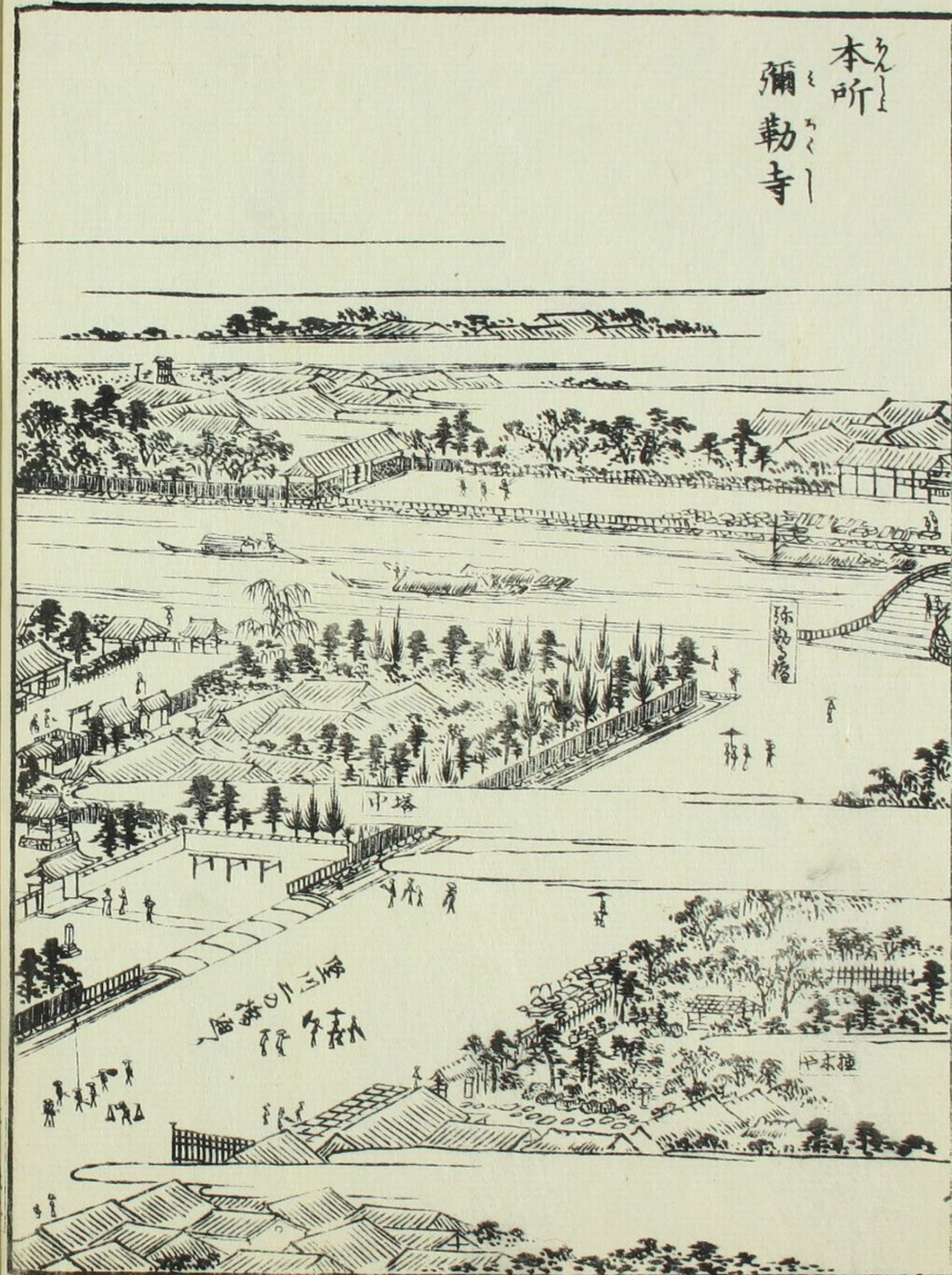


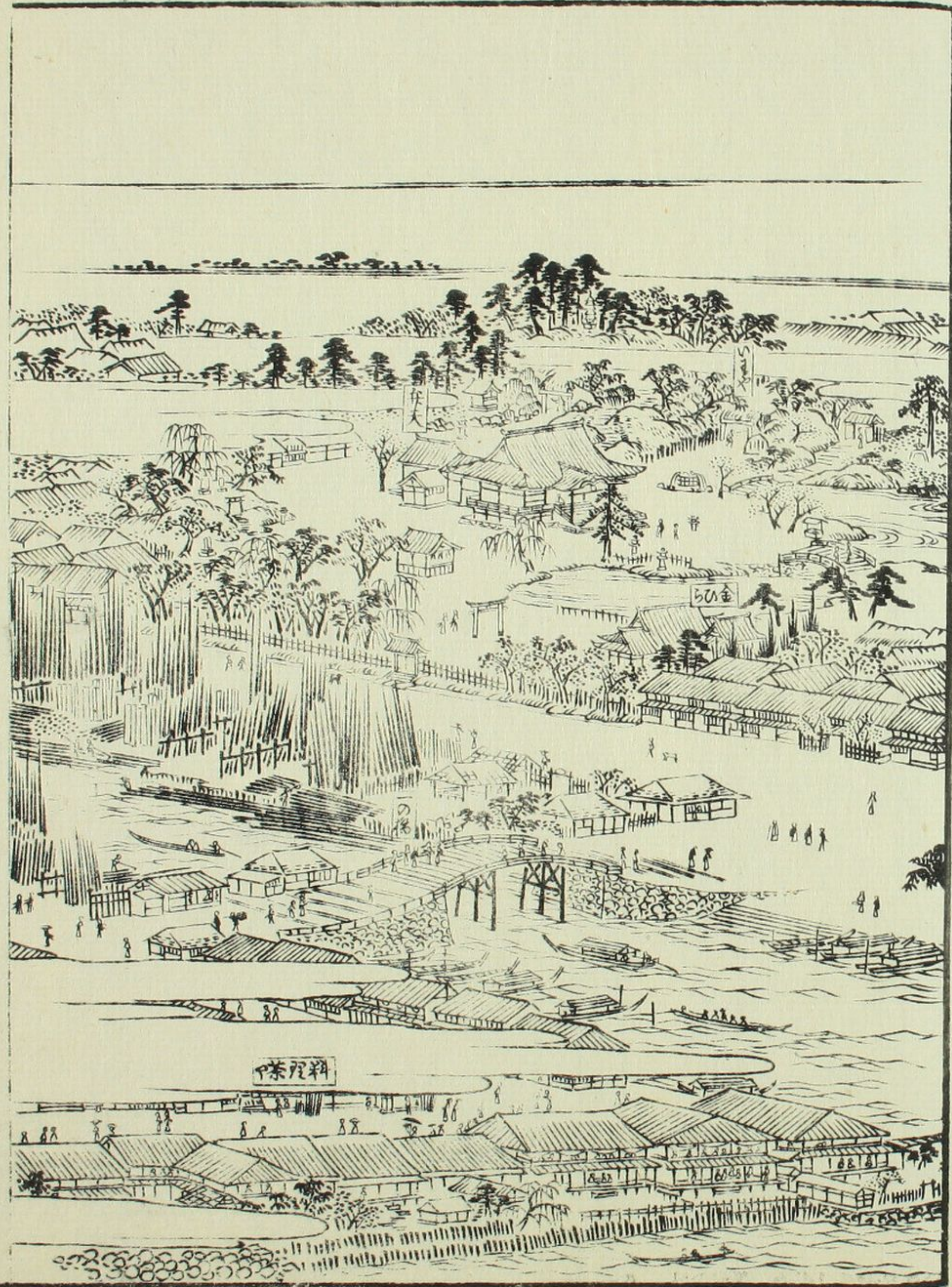
萬徳山彌勒寺 月所二丁のまりのを隔て弥勒寺橋の北結まのり真言新
 義の彌頭江戸四箇寺の一室あり奉尊の薬師如来
 中興岡山双脊鏡上人と号と徳門の額弥勒寺と書す朝鮮
 國雪月堂の筆跡あり當寺旧柵原の地ありと天和二年回祿

毎歳正月と九月の十三日ハ舊式の祭祀あり
 是を歩射と號く相傳ハ昔此地岡割の里正深川八郎右衛門某
 宅地ハ伊勢兩皇太神宮を勧誘するあり泉養寺の岡山秀須法
 印をして奉祀せしむるとのハ此地ハ深川氏宅地の旧跡なりといひ
 泉養寺記簿ハ深川の起立のゆゑを載其畧云く深川の地往古ハ廣く原野あり
 其頃揚州の老々ハ海川ハ舟を其と稱するありとの地ハ居住せしむるハ慶長元年丙申
 方舟軍ありて此地ハ舟を其と稱するありとの地ハ居住せしむるハ慶長元年丙申
 初住人ありて荒廢の地ありて此地ハ舟を其と稱するありとの地ハ居住せしむるハ慶長元年丙申
 深川の文字ハ此地ハ舟を其と稱するありとの地ハ居住せしむるハ慶長元年丙申
 香花院ありて今ハ舟を其と稱するありとの地ハ居住せしむるハ慶長元年丙申
 岡山云く泉養寺の地ハ重辨紅花の蓮あり花散牡丹ハ髣髴たり故ハ年花の所を移す
 万徳山彌勒寺ハ寶鏡十年の夏夏初ハ此花散牡丹ハ髣髴たり故ハ年花の所を移す

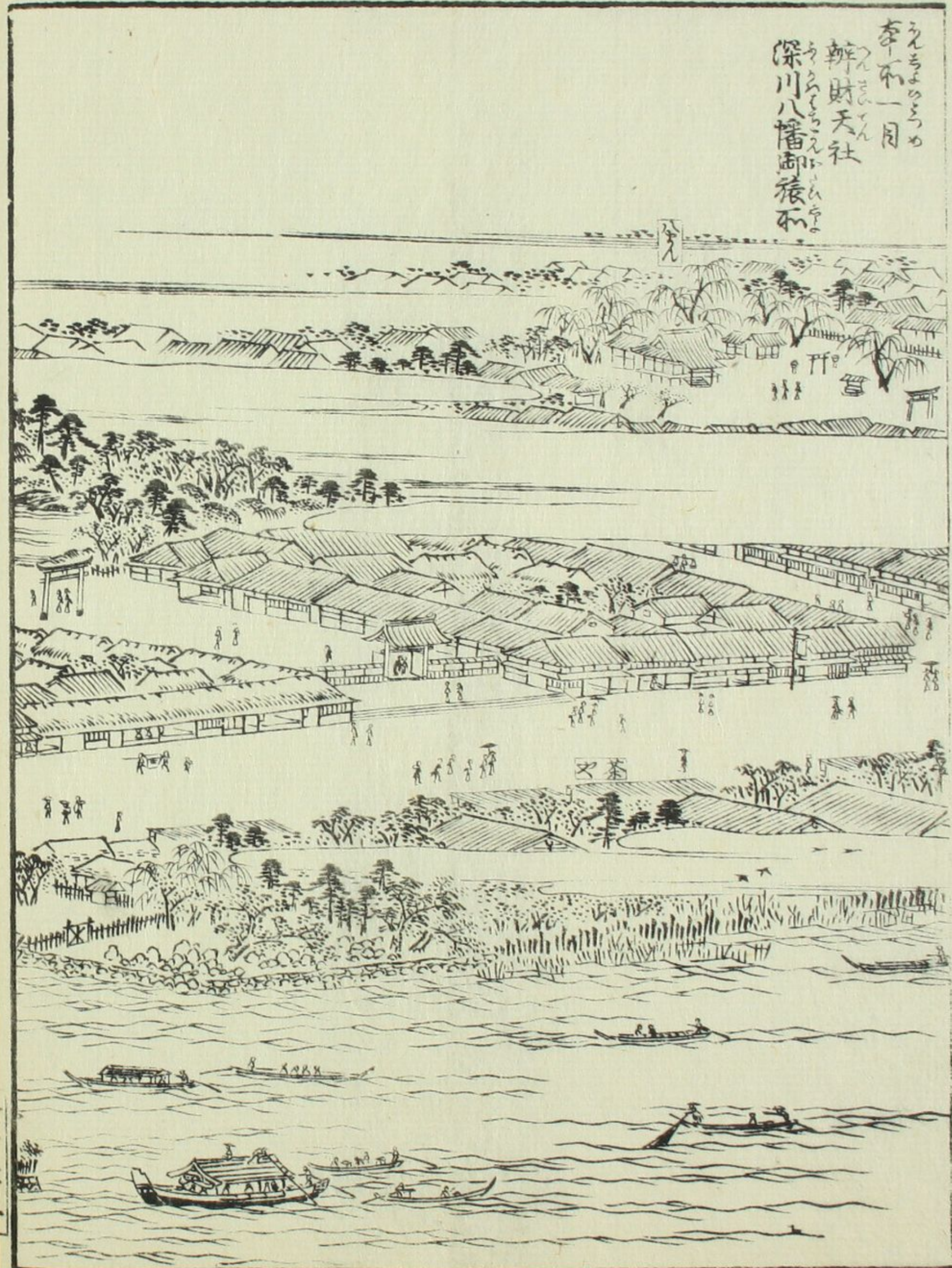


本所
彌勒寺





えきまのりや
本町一月
辨財天社
深川八幡御後不



の後此地へ移されたり毎月八日十二日を擇日として奉請多し

深川八幡宮御後所 大川猪大船倉の前の富田賀岡八幡宮祭

禮の砌ハ神連此地へ渡らせらる

辨財天社 同所一の橋の南の結あり祭所相別江嶋より同く元禄

の始惣換校杖山氏勸請と己巳の日奉請多し

志天に於てあると云ふこと一三七日の宮飲食を断て相別江嶋よりあり天女窟より奉請し

至山流との小慶安の頂 命命を蒙り巽堂中に祀られ江嶋より奉請し

國豊山日向院 西國橋の東結あり

祢念上人の遺風ゆて捨世一流の佛域たり明暦二年丁酉の春大火

の時焼死の輩の冥魂追福のため毎歳七月七日大絶賊鬼法會を

後行と又月八日佛餉籠入の檀主現當西蓋の法ありの徳の顯

又國豊山とあり縁山定月和尚の等あり

本堂 本尊阿彌陀如來座像壹大計あり

洞の阿彌陀佛の像ありある者四世觀音上人枯濫和尚あり今の本尊を造りて堂あり

第三世觀音和尚今 備中千體阿彌陀如來

思本尊と同體ありといふ縁山二十三世の賢首遵善貴屋上人念相公より明暦の大火焼死

弱死せる不の十萬八千餘人の死者を同向のへた旨 命せられ其頃 官府より假の佛堂を造り

言觀音 佛の像ありありを觀音惠心傍の作る南都指提寺より遷すと云ふ有信の

辨財天祠 佛堂の本より其末畏之疾才天の内首より遷すと云ふ有信の

馬頭觀世音 佛堂の本より其末畏之疾才天の内首より遷すと云ふ有信の

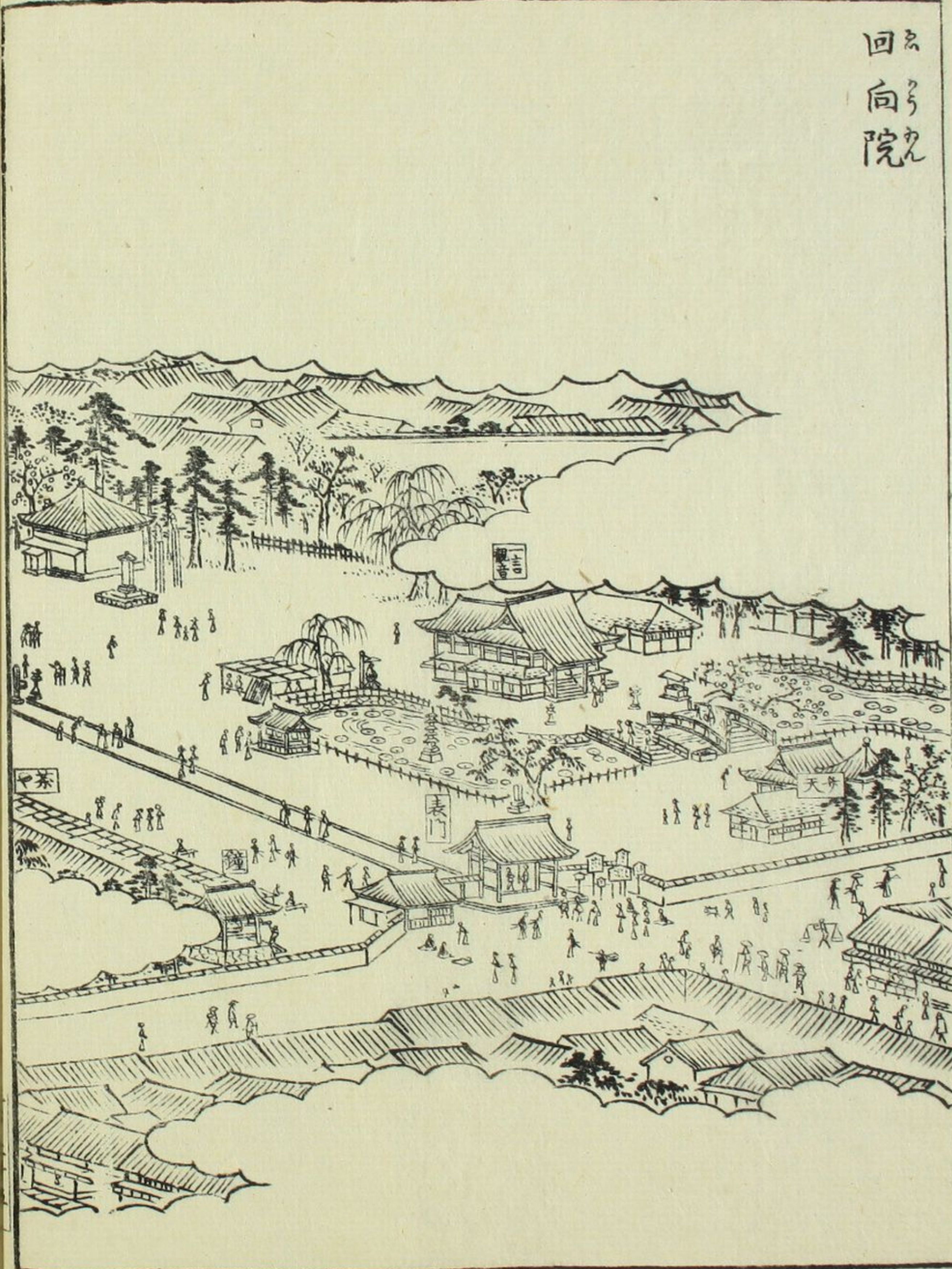
圓光大師堂 佛堂の本より其末畏之疾才天の内首より遷すと云ふ有信の

蓮池 信善上人常蓮實を念誦して其蓮實の積る二十五

阿彌陀如來銅像 佛堂の正面あり

是も信善上人手自樹られ

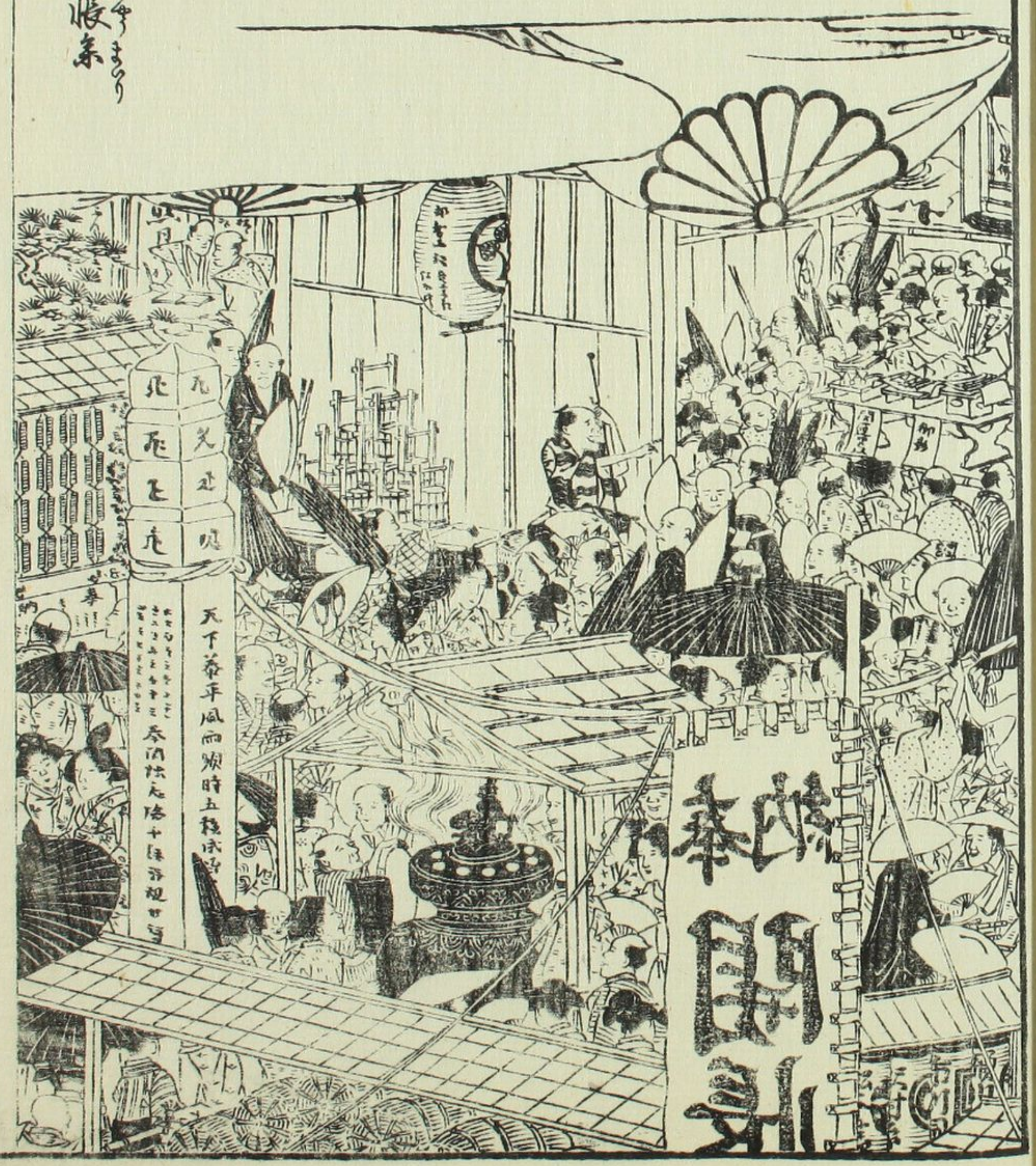
回
向
院



不
見
烟
中
寺
但
聞
烟
外
鐘
江
城
秋
色
遠
暮
日
驚
高
峯
白
石



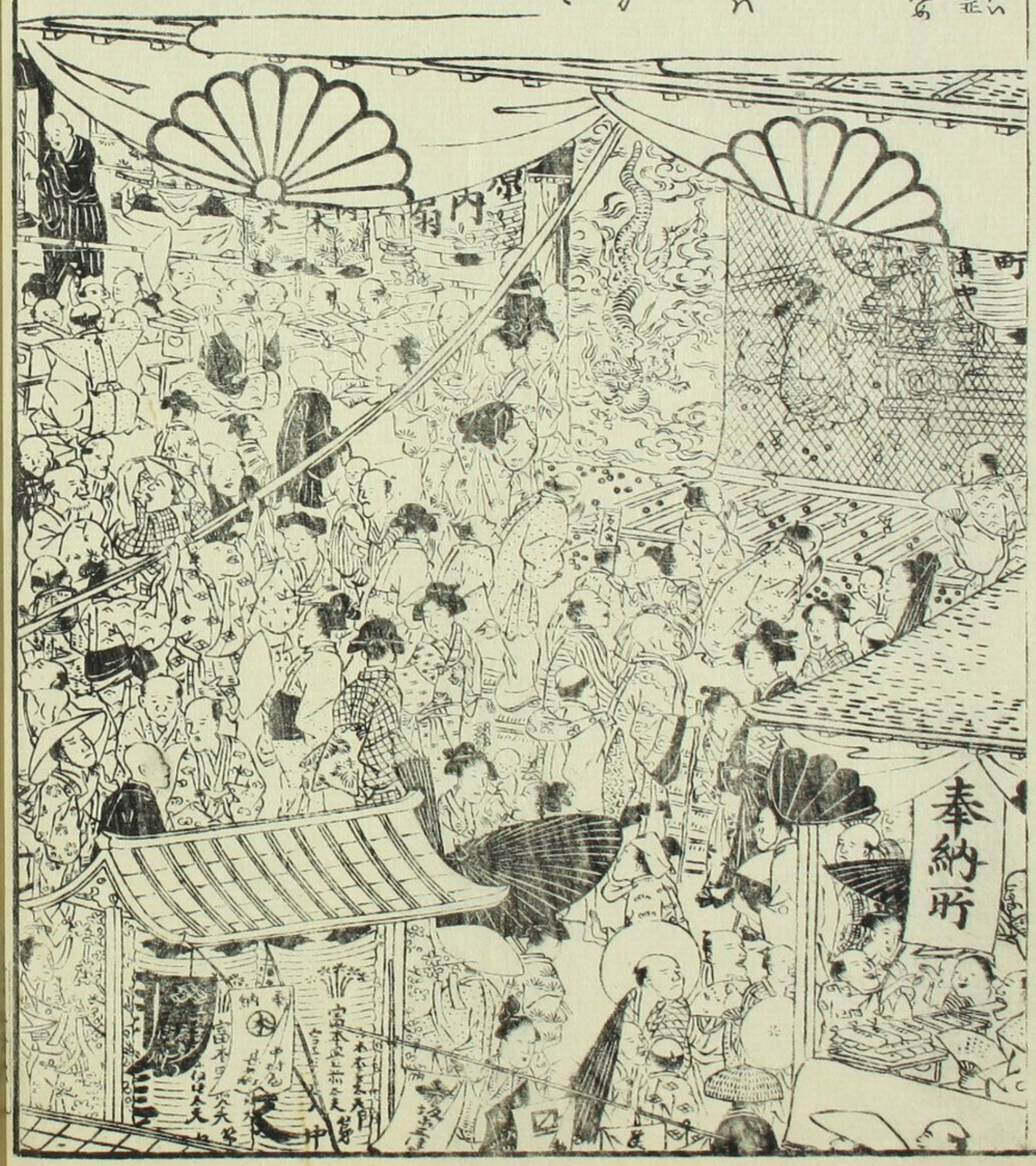
長らくわんくわんすまのり
 日向院帳系



天下蒼平風雨順時五穀成
 奉納所

奉納所

諸國の靈佛聖
 神等結縁のた
 大に戸よちく
 啓合祀せんと
 敬るの多るハ
 尚院に於て
 繪せしむ依方
 りり便りよき
 比るの故
 殊に
 未請
 多し



奉納所

相傳明曆三年丁酉の春正月十八日大江戸大火に仍く焼死する者凡

十萬八千餘人あり時よ台命ありて此地をト一六六

許歩の比よ件の焼死骸を埋藏一上よ一堆の塚を築き號けて漏澤

園と唱へ乃亡魂追福の爲増上寺第二十三世貴屋大和尚一

一字の梵刹を創基せしめらる當寺是あり昔の諸宗山並縁寺といふこと

諸宗の僧を集め一七日の回塚の事實のむむの経を讀誦せしめ

大法會後行ありされとも任持ありし其頃小石川智香寺の信

譽自心上人道光世よ隱きありし當寺よ移住せしめ第二世よ

岡山と稱したる上人彼塚上小堂宇を建營し長よ幽魂の冥

福を助むる爲不斷念佛の道場とせしめたり因云信譽上人佛像を造る

天息山五百大阿羅漢本所五目堅川より南よあり黄檗流の

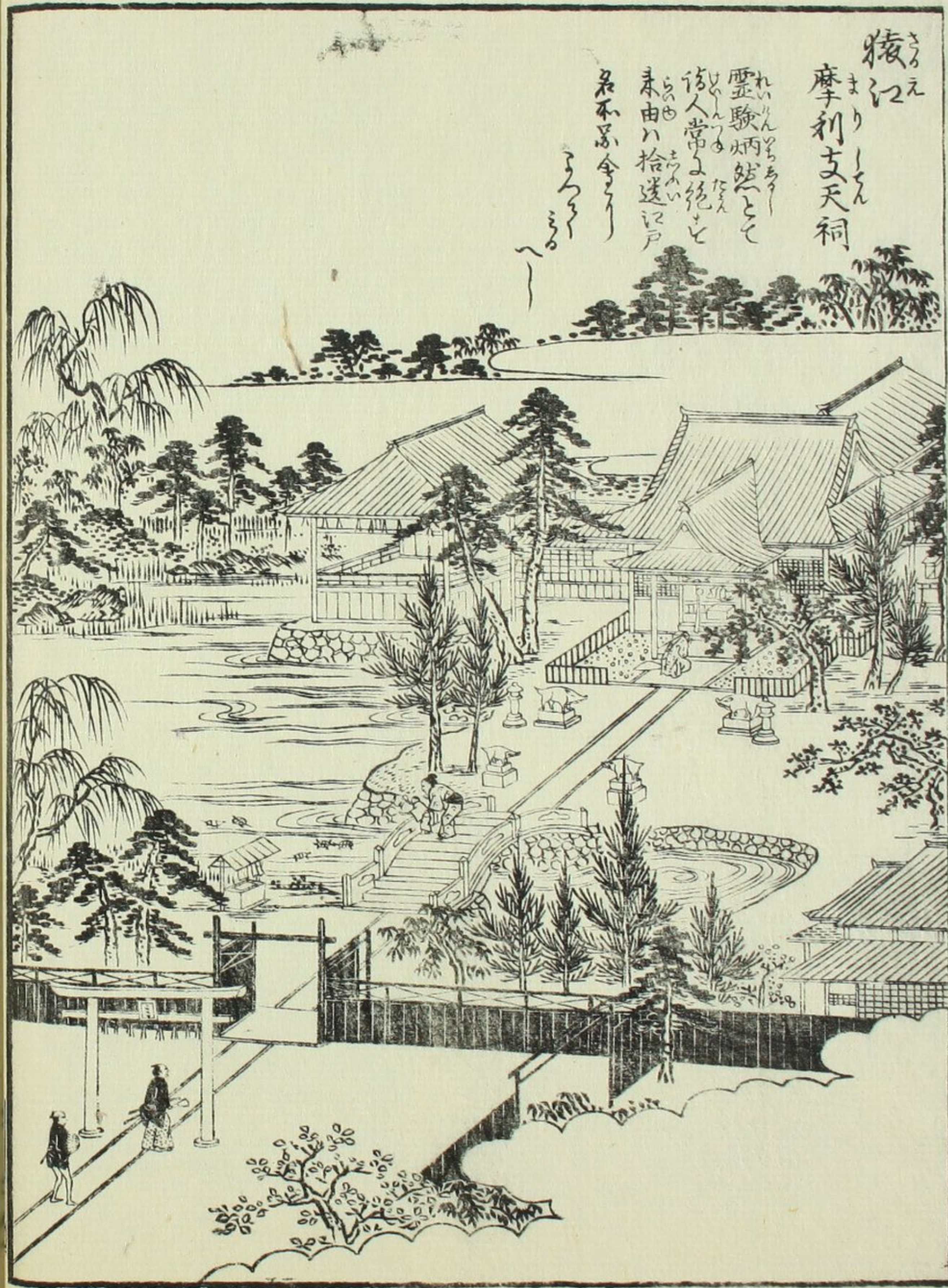
禪林ありて河東第一の名藍たり岡山の藏眼禪師中興の象先和尚又



猿に泉鏡寺の池の蓮花の
生すところの蓮花の
重瓣紅花よと花散
牡丹よ鬘髻たり故よ
奇観くと寛政
九年の晩夏
この花を
發ししより
今よ
新くに
去り

猿江
摩利支天祠

靈驗炳然として
俗人常々絶えず
未由に拾送し戸
名不承令々々



松雲禪師を以爾基の大祖と稱す

佛殿 本尊 釋迦牟尼佛拈華像 脇士 文殊

普賢 各高八尺 阿難迦葉 各高九尺 左右の階壇小列する所の五百阿羅漢

の像の各等身よして共小松雲禪師彫刻する処あり

額 本尊の 黄葉隠えを

人の筆あり

額 日堂内 正堂内 掲る美葉 即非の筆

五百羅漢造立之末由

松雲禪師の京兆の人寛雄よしてとて正信を具すと

隨ひ薙髮して僧とある後游方の懐のよより師の許を辭して

實文九年己酉 十二歳の瑞龍精舎小入て鐵眼禪師よ

九去尚と呼たりとあり

隨ひ薙髮して僧とある後游方の懐のよより師の許を辭して

峯園曙

帷明光

美法号

又おめおま憐深光室基祇園乙地
び子屋者現深淵影影歸石橋海雲

額 佛殿 二重 佛殿 根の軒よ 掲る隠え和 尚の筆あり

聯 同堂内 左右の 柱よ掲る象 老の筆あり

或人云く松雲禪師始ハ



月の

交

芭蕉

小名木川
五本松

深川の末

五本松の

石の

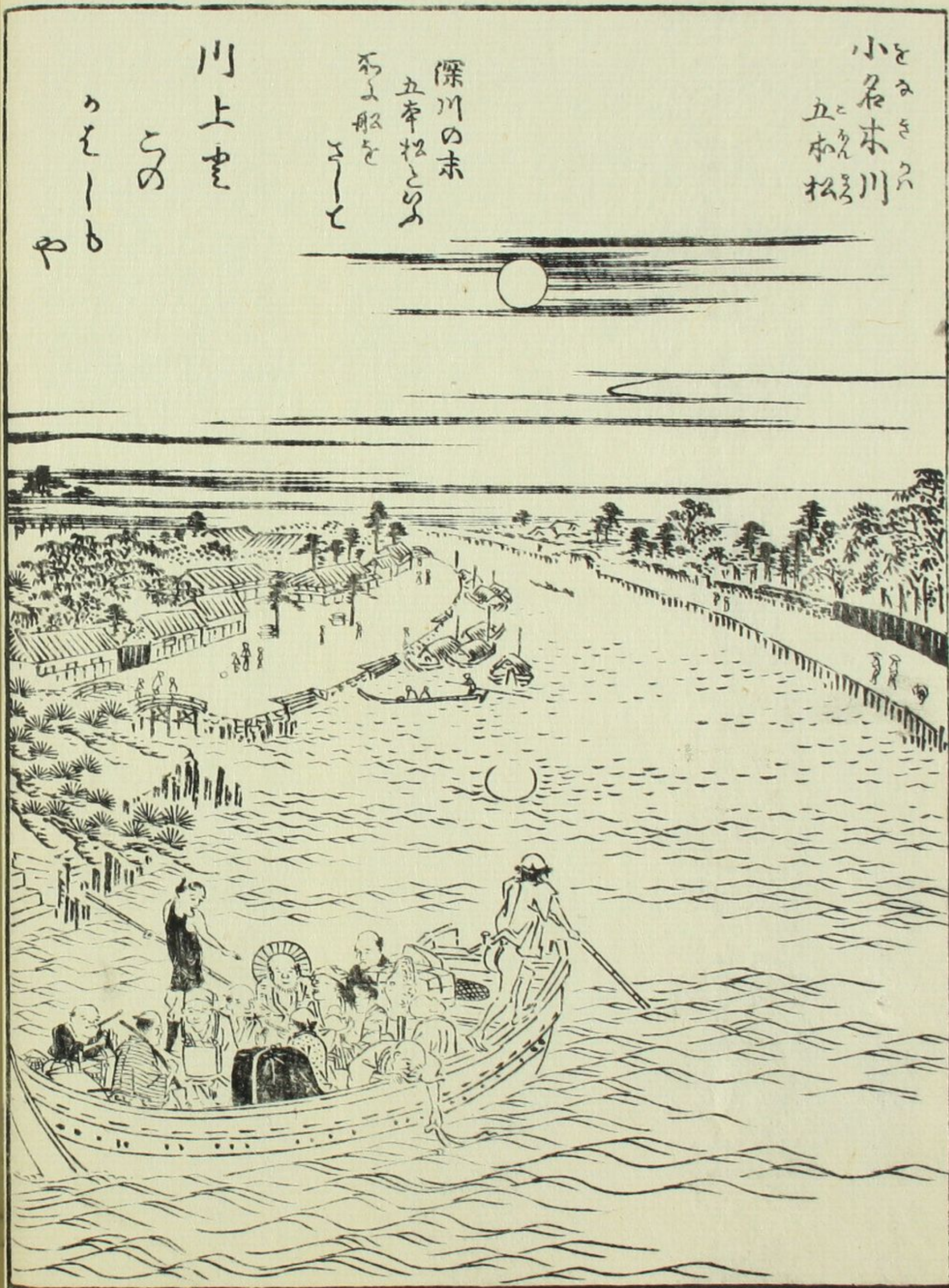
石

川上

の

うしろ

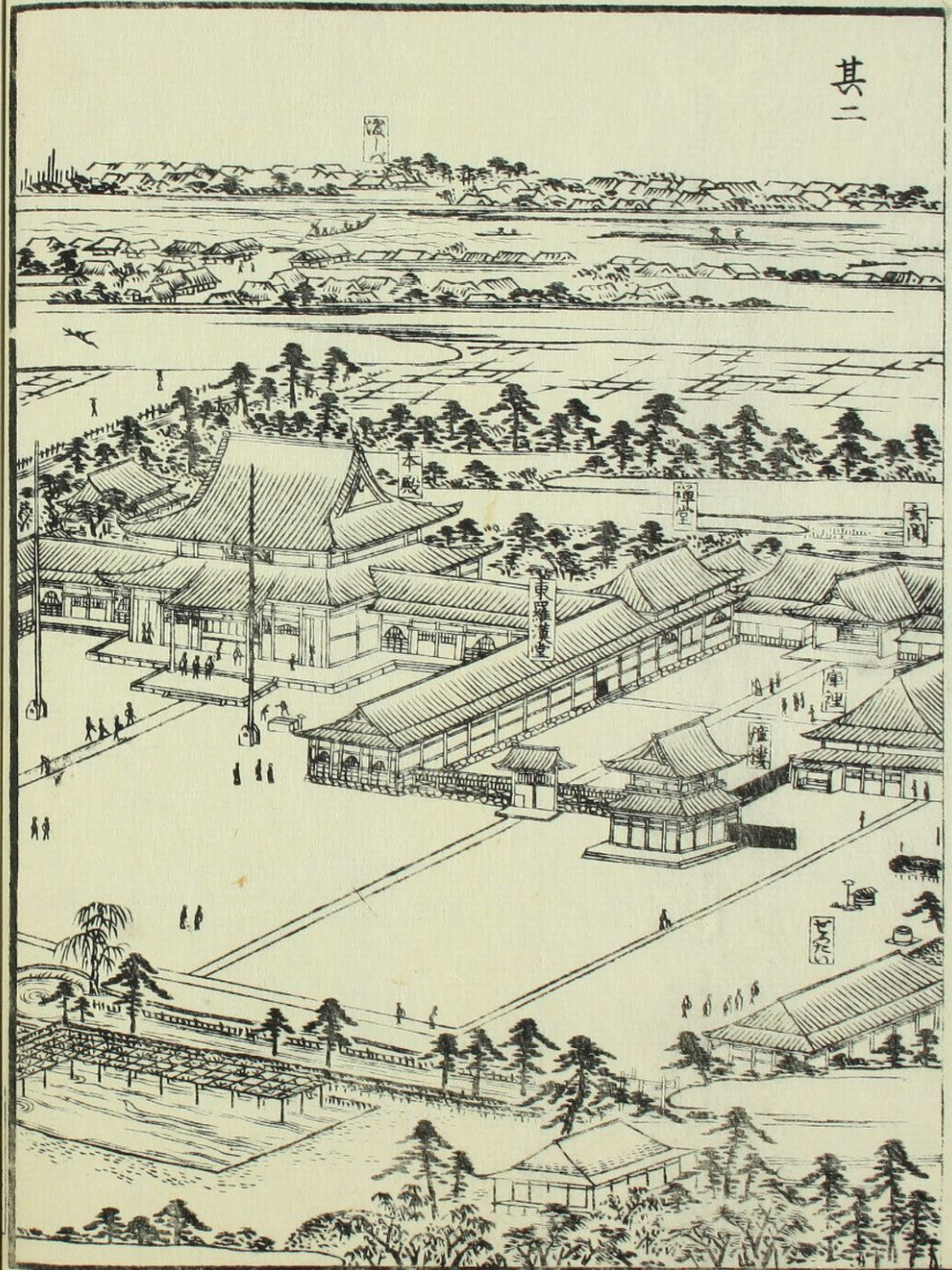
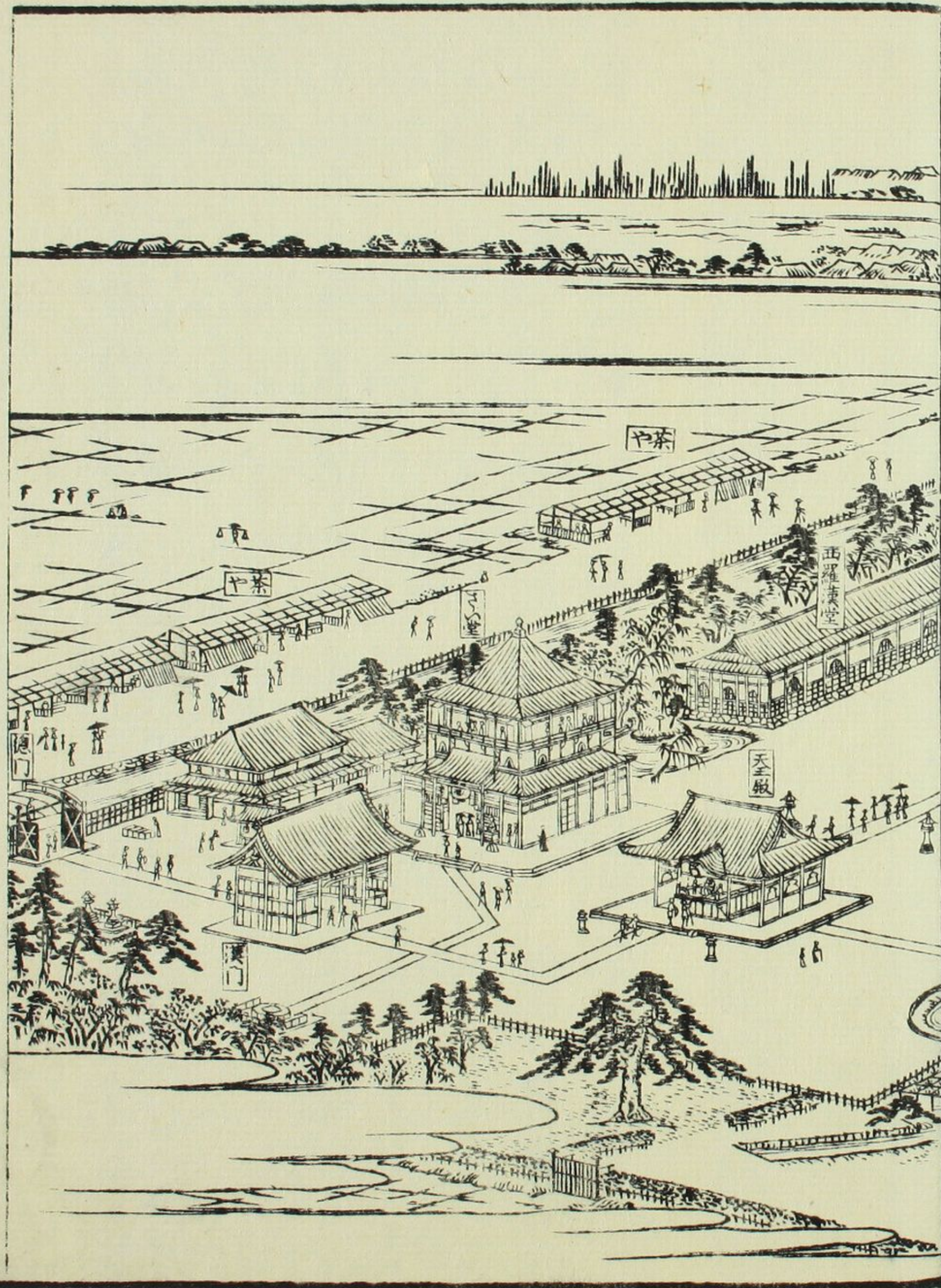
や



五百羅漢寺
三廨堂



海西小瓢歴一豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に賢
 順とて二僧一夜に造立せしといふ五百聖者の石像を瞻禮し
 恭敬日く小厚く其後漸く五百羅漢の像を手彫りんとするの意
 あり歸省の日鐵眼禪師果して其命のを以て遂に貞享年間江戸
 小末り元禄辛未始て浅草寺の境内壽松院に就て假屋を假け
 衆人をとりめ羅漢の本像を彫刻し弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜
 捨一尊を刻しむるといふ時至りて絶あるに微くこよ
 歲月を歴たり然る小同壬申の年大倉前一十六頁の道俗結盟
 輔佐と癸酉孟春より至り五十尊成甲戌三月忝も
 御國母桂昌一位尼公金を賜て佛像造立の資とすあ此時
 十尊成彫當とあるありしより縁化響音の愈々如く施財日く
 小多く竟より一ト餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及ひ
 阿羅漢等とて五百二十有餘餘の佛像縹緲として現し其



梵相の奇古坐立の威儀儼然として生り如く其妙手常人のそと
 ころ所あり騰禮する者として雲山一會未散の嘆めらるるは八年
 乙亥夏五月 鐘の鐘よ 七月とせ
 又天恩山羅漢寺の号を賜ふ依假に堂宇を造立して佛像を遷
 せり同年八月黃檗高泉和尚偶東行あり近て點眼の導師とせ
 又先師鐵眼和尚を以て岡山祖とせ是其原を貴むの故とそ又其時
 黃檗山の末寺とある松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありといふも
 時縁多しとして宝永七年庚寅一旦疾よ罹る月を越て起て終り
 同年秋七月十日奄然として化せ時よ歳六十有二あり
 法臘四十二年

五百大阿羅漢尊號



阿若憍陳如尊者 阿泥樓頭尊者 有賢無垢尊者
 須跋陀羅尊者 迦留陀夷尊者 闍聲得果尊者
 梅檀藏王尊者 施憍無垢尊者 憍梵般授尊者

第十一 因陀得慧尊者 婆蘇槃豆尊者 法界四樂尊者

第十一 優那行那尊者 佛陀難提尊者 末田底迦尊者

第十一 難陀羅目尊者 佛陀難提尊者 末田底迦尊者

第十一 優波和修尊者 達磨迦耶舍尊者 憶持因緣尊者

第十一 定果德業尊者 莊嚴無憂尊者 憶持因緣尊者

第十一 破邪神通尊者 堅持三字尊者 阿闍樓駄尊者

第十一 毘羅羅子尊者 毒龍寂依尊者 同聲誓首尊者

第十一 悲密世間尊者 獻花提記尊者 眼光定力尊者

第十一 伽空舍那尊者 伏底密多尊者 富那夜舍尊者

第十一 不著世間尊者 顯空第一尊者 羅度無盡尊者

第十一 金剛破魔尊者 十劫慧善尊者 無憂禪定尊者

第十一 金山覺意尊者 十劫慧善尊者 梅檀德香尊者

第六十一

無念宿盡尊者

第七十一

堅通那含尊者

第七十一

薩陀波菴尊者

第八十一

周利槃特尊者

第九十一

解空伽藍尊者

第九十一

羅網思惟尊者

第一百

善注俱提尊者

第一百

除憂尊者

第一百

雷德尊者

摩訶利尊者

觀身無常尊者

乾陀利尊者

見人飛騰尊者

七佛不動尊者

辟支轉智尊者

劫寶覆藏尊者

大忍尊者

嚴土尊者

無量本行尊者

成就因緣尊者

解空空自在尊者

師子不有尊者

三昧甘露尊者

山頂龍聚尊者

神通億劫尊者

無憂自在尊者

金髻尊者

第一百

明首尊者

第一百

眾首尊者

第一百

悟達尊者

第一百

馬勝尊者

第一百

自淨尊者

第一百

調達尊者

第一百

寶幢尊者

第一百

善慧尊者

金首尊者

辨德尊者

天動尊者

不動尊者

善積尊者

善相尊者

梵勝尊者

明照尊者

敬首尊者

離垢尊者

魚勝尊者

息勝尊者

勇寶尊者

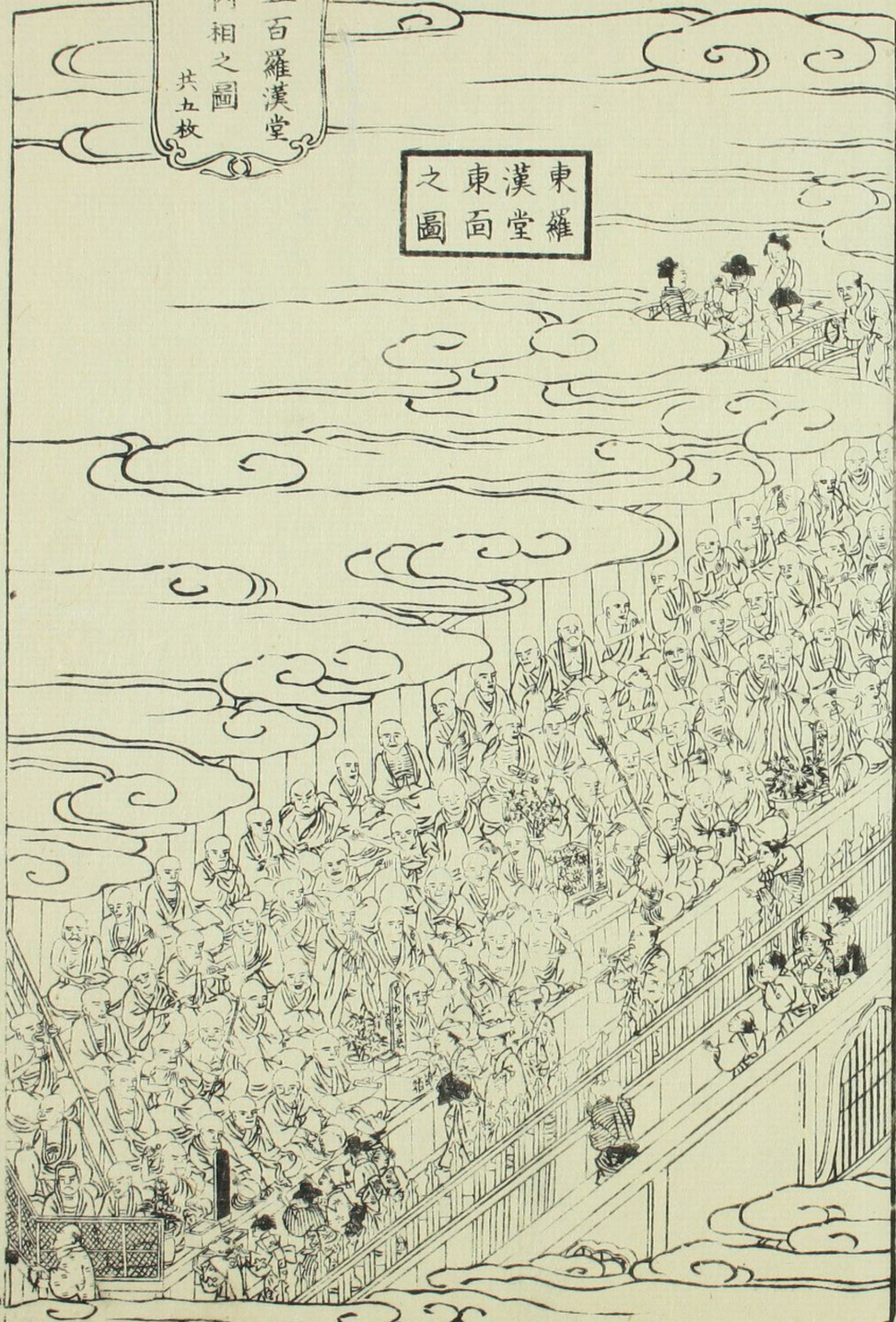
善住尊者

歡喜尊者

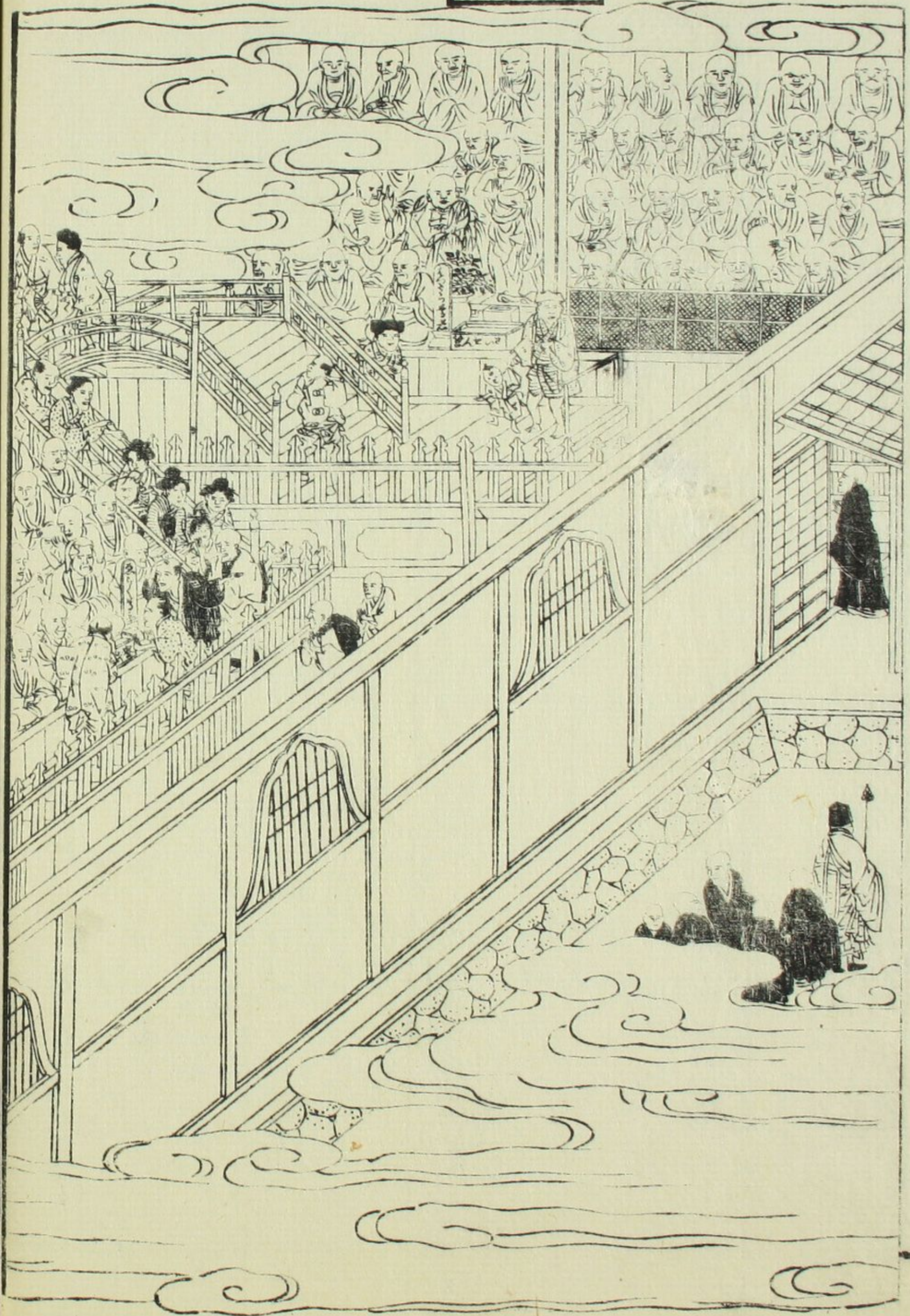
善等尊者

五百羅漢堂
內相之圖
共五枚

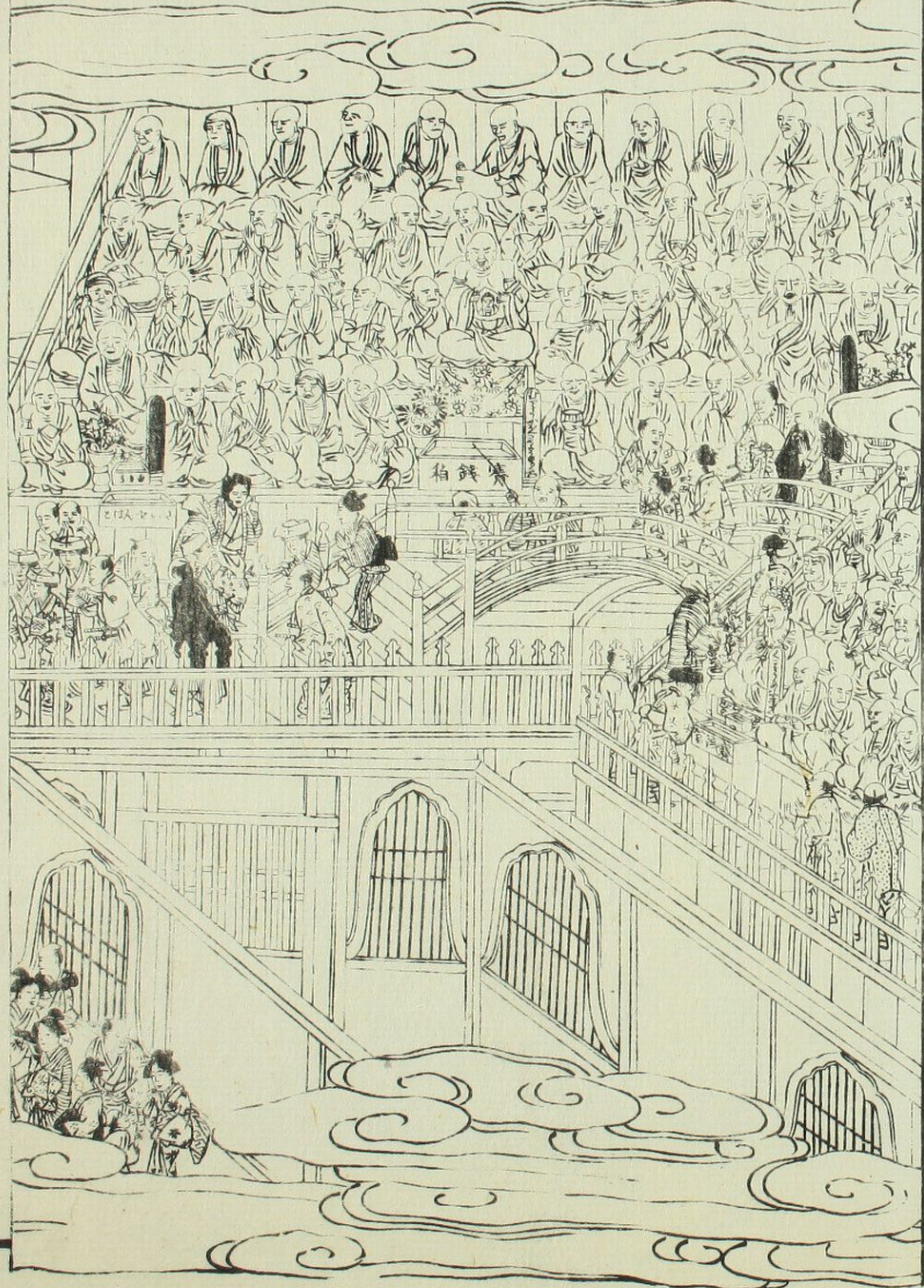
東漢東
羅堂面
之圖



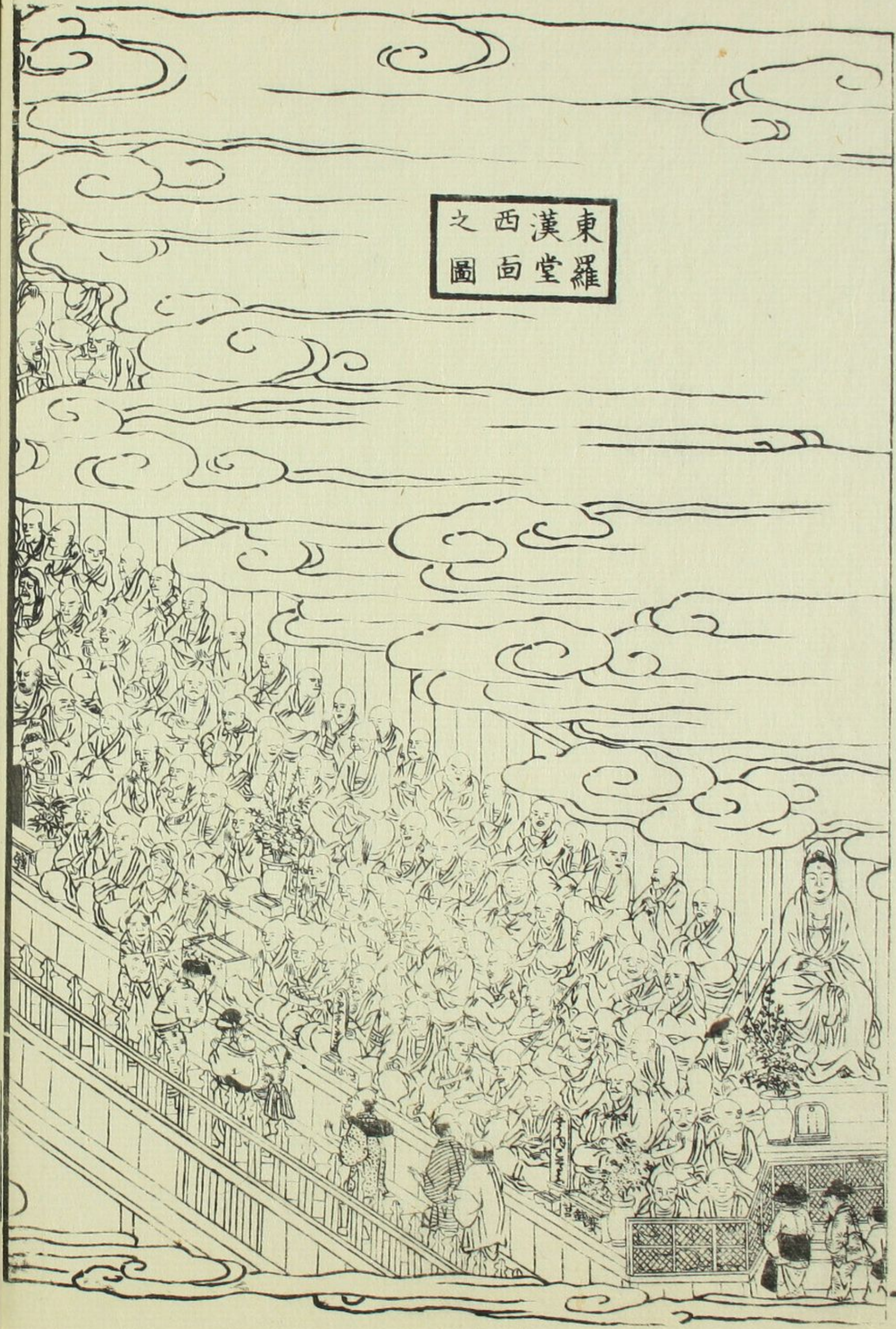
正反面圖



正百圖

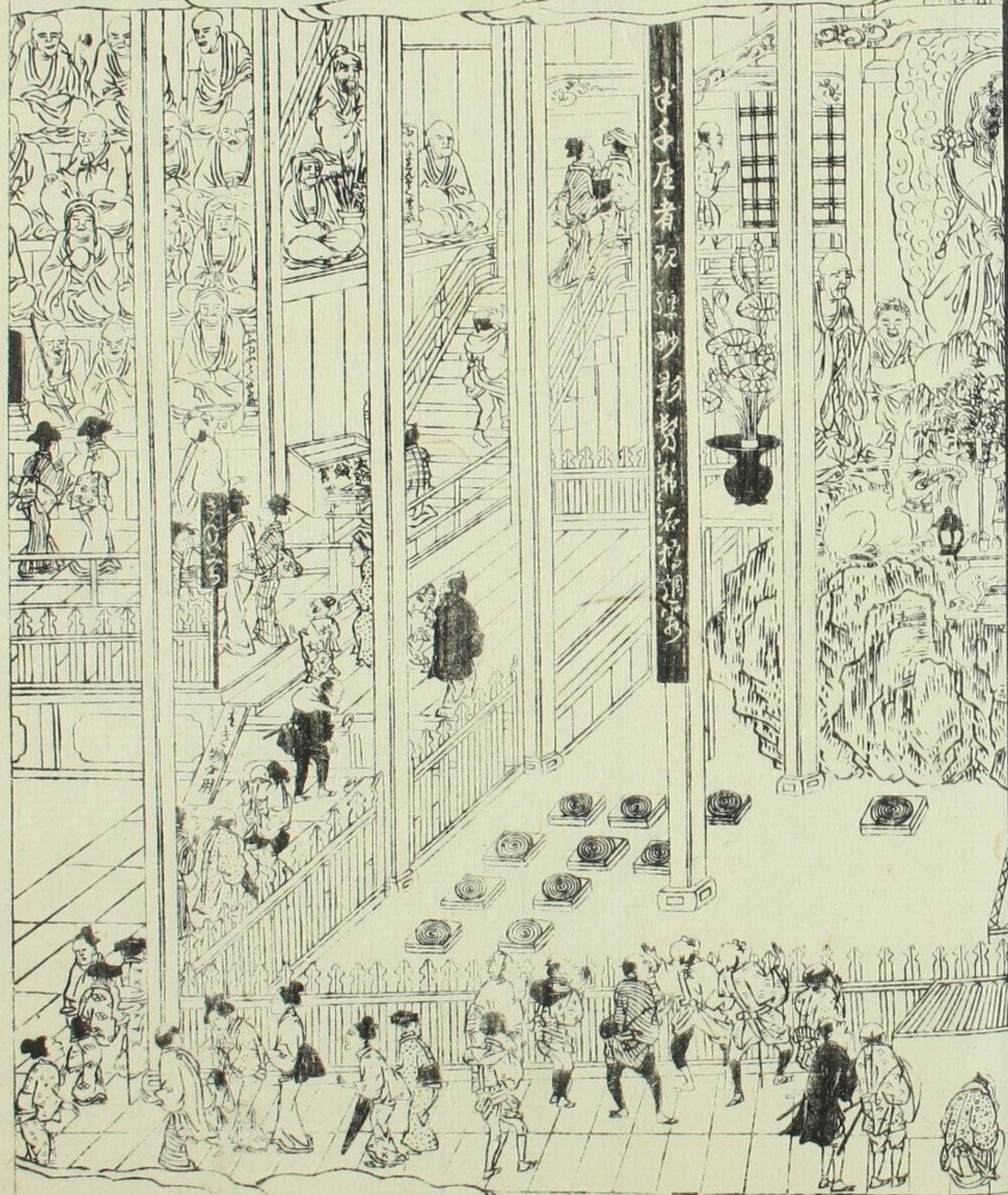


東漢西之
羅堂面圖



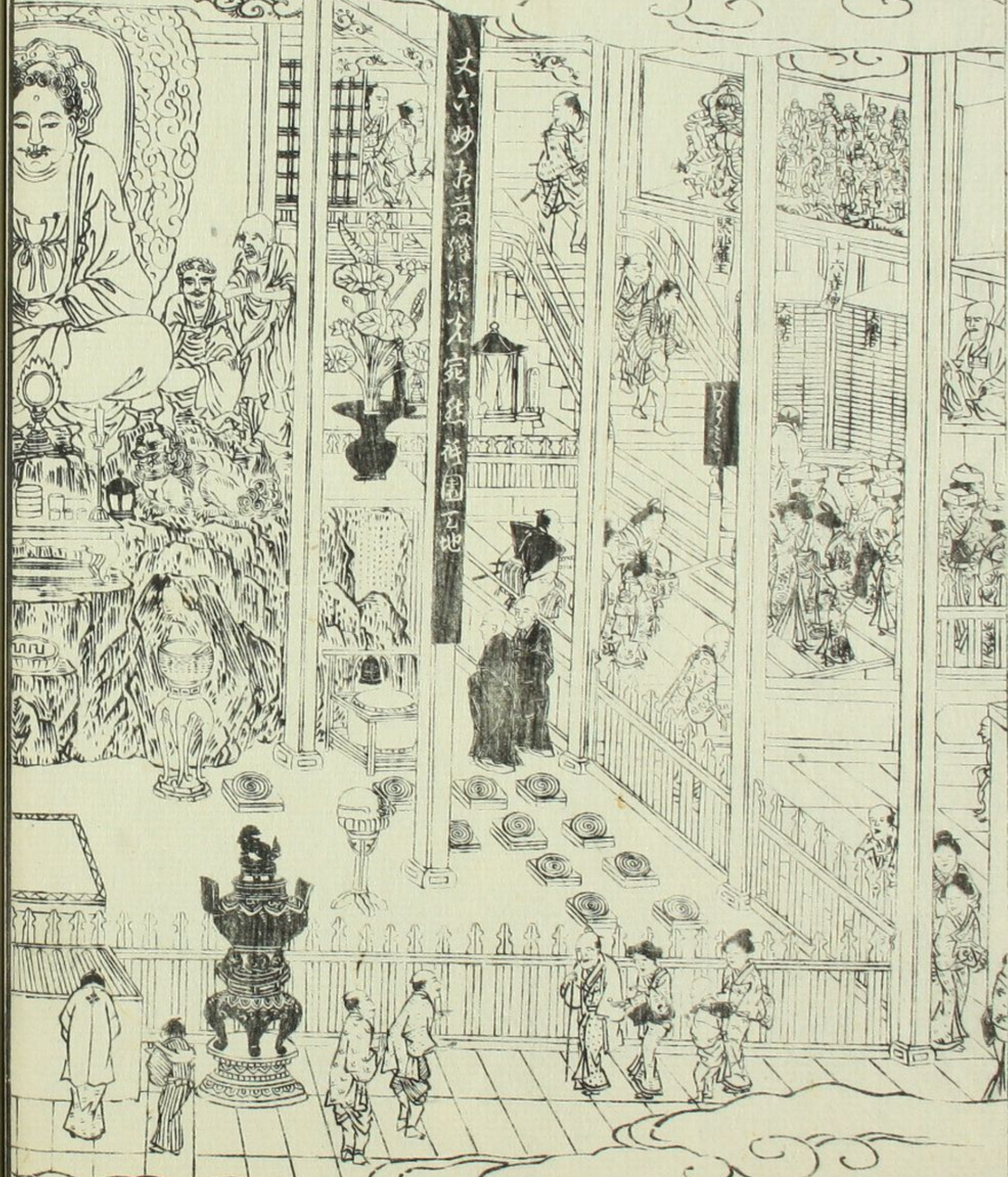
圖面正

之正中
圖尊面

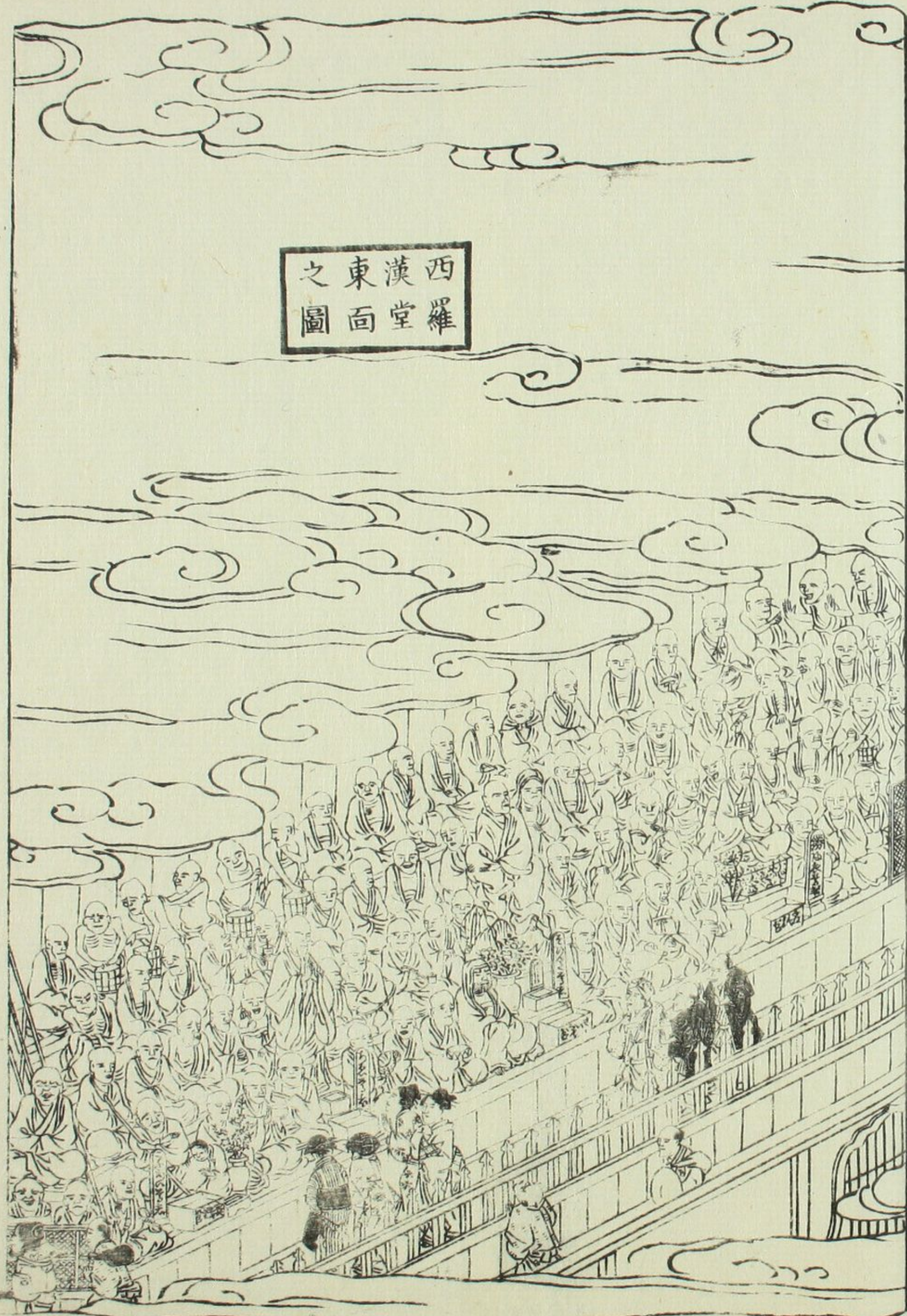


諸閣

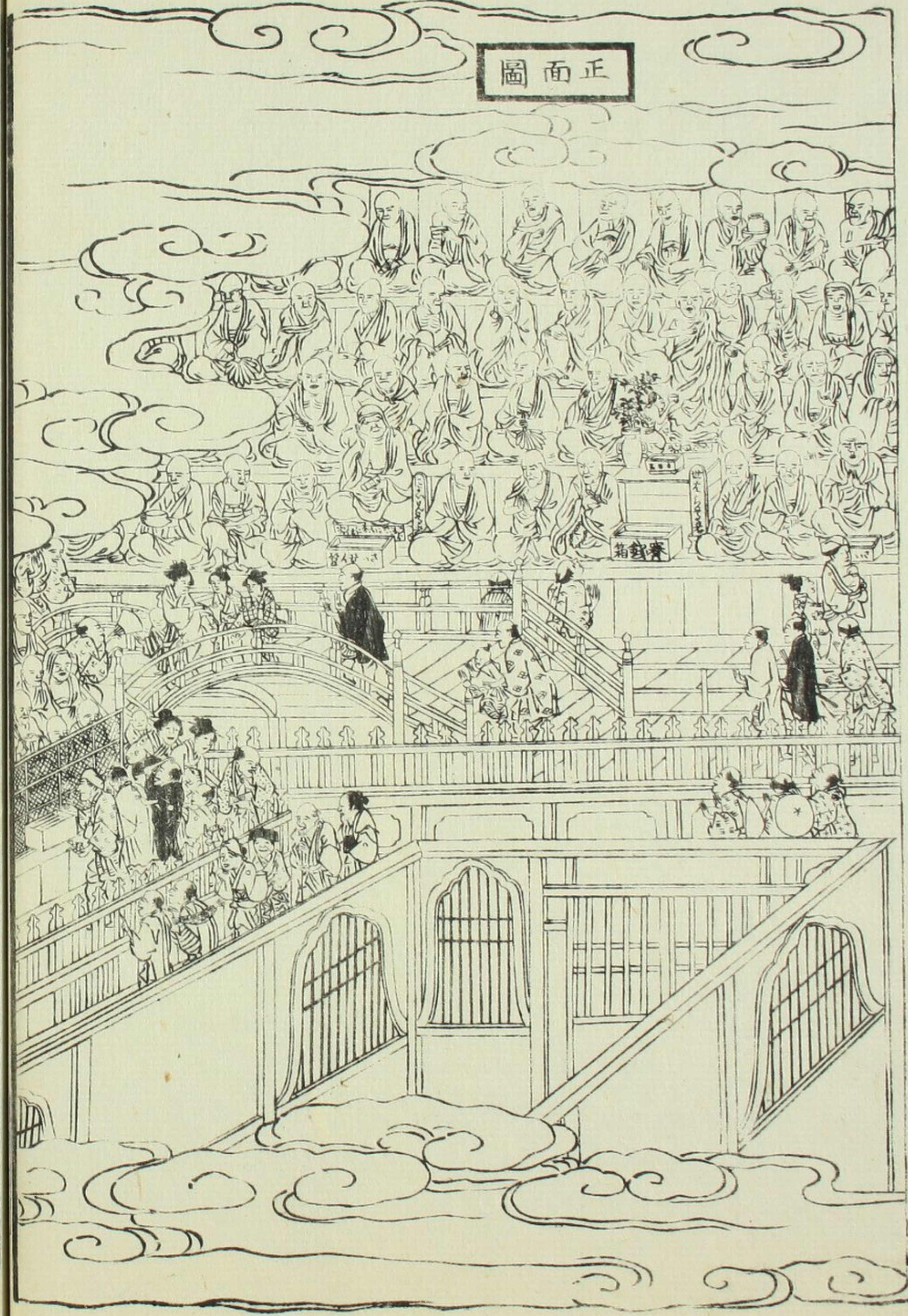
圖面正



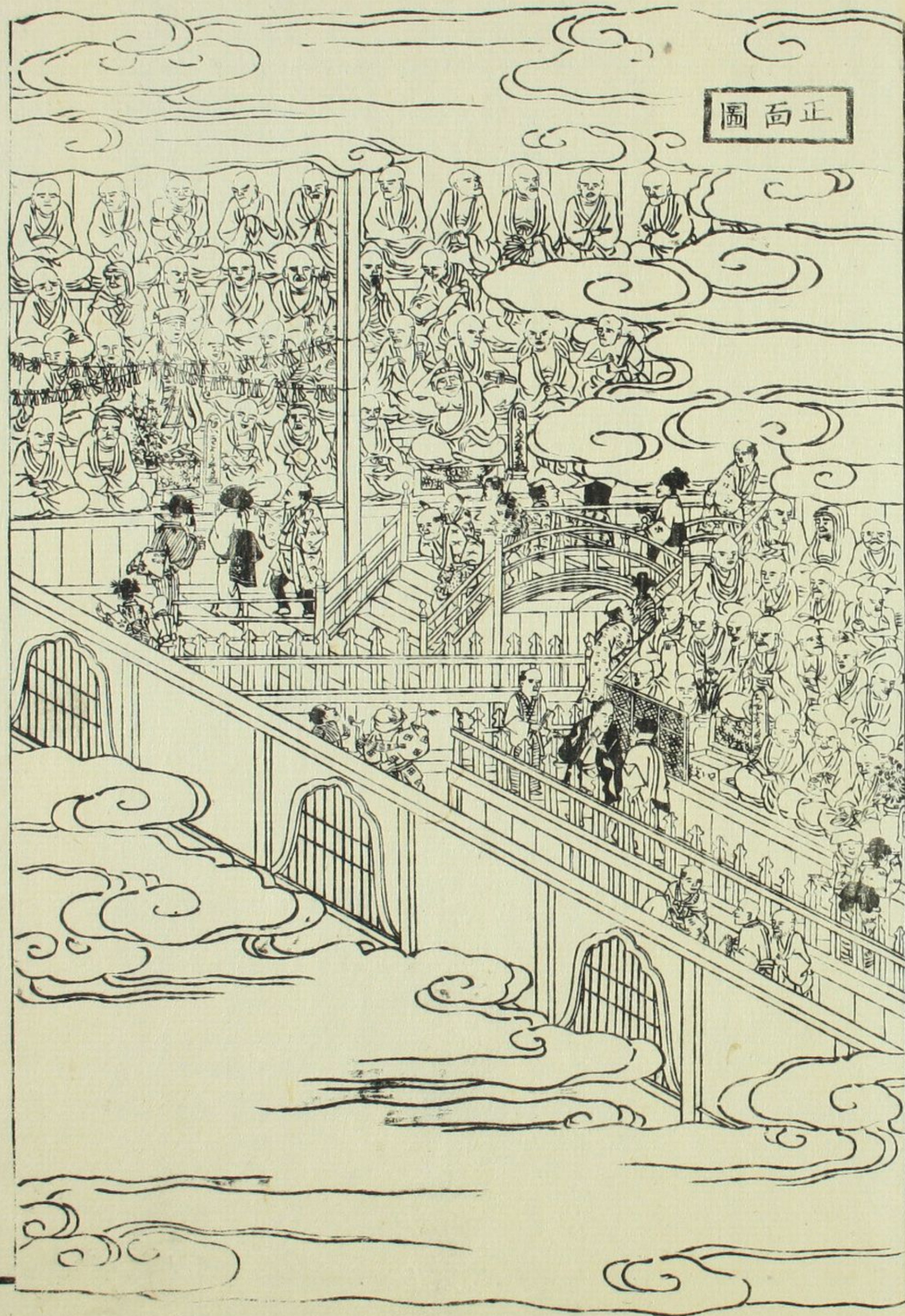
西漢東之
羅堂面圖



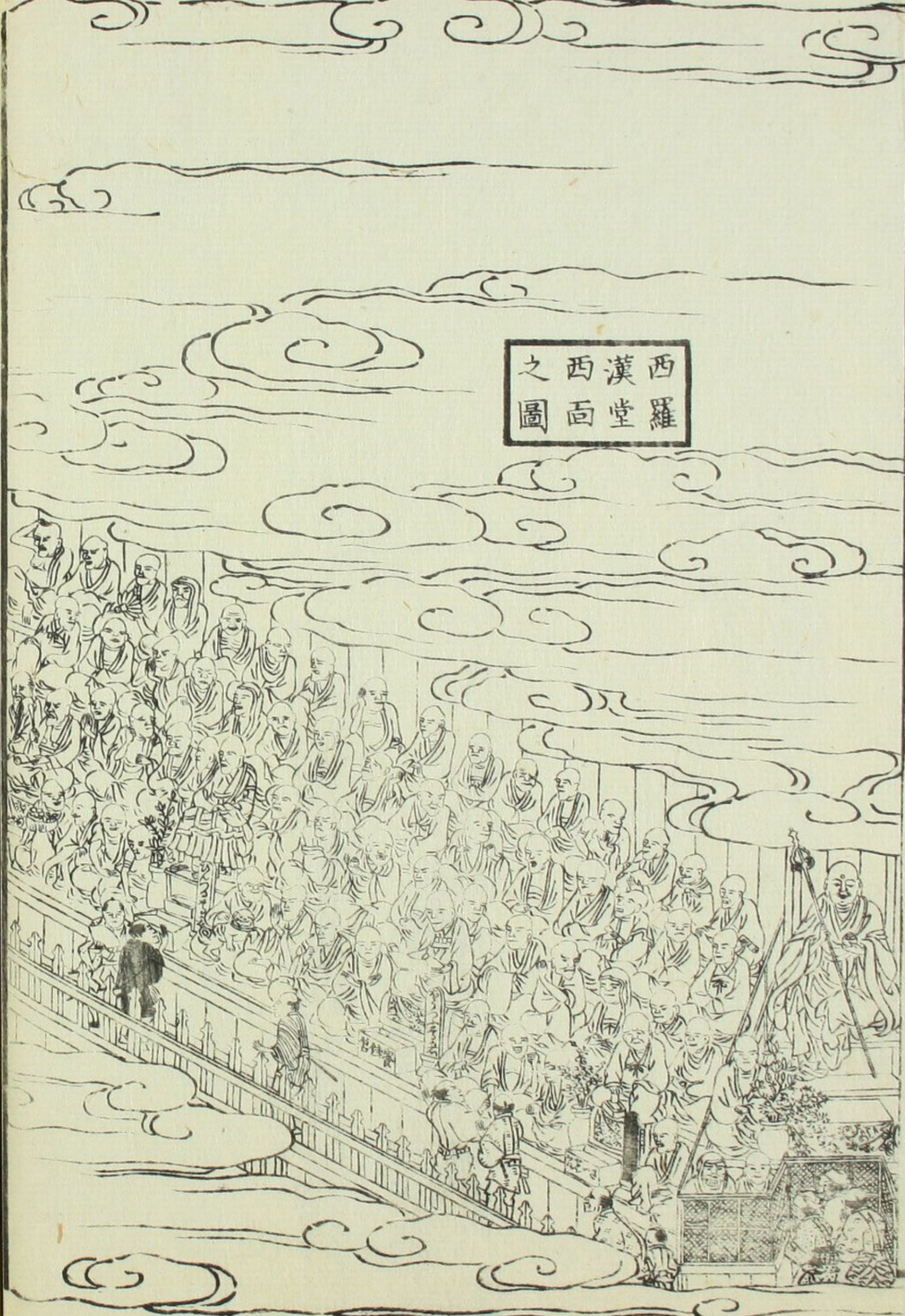
正面圖



正圖



西漢西羅堂面之圖

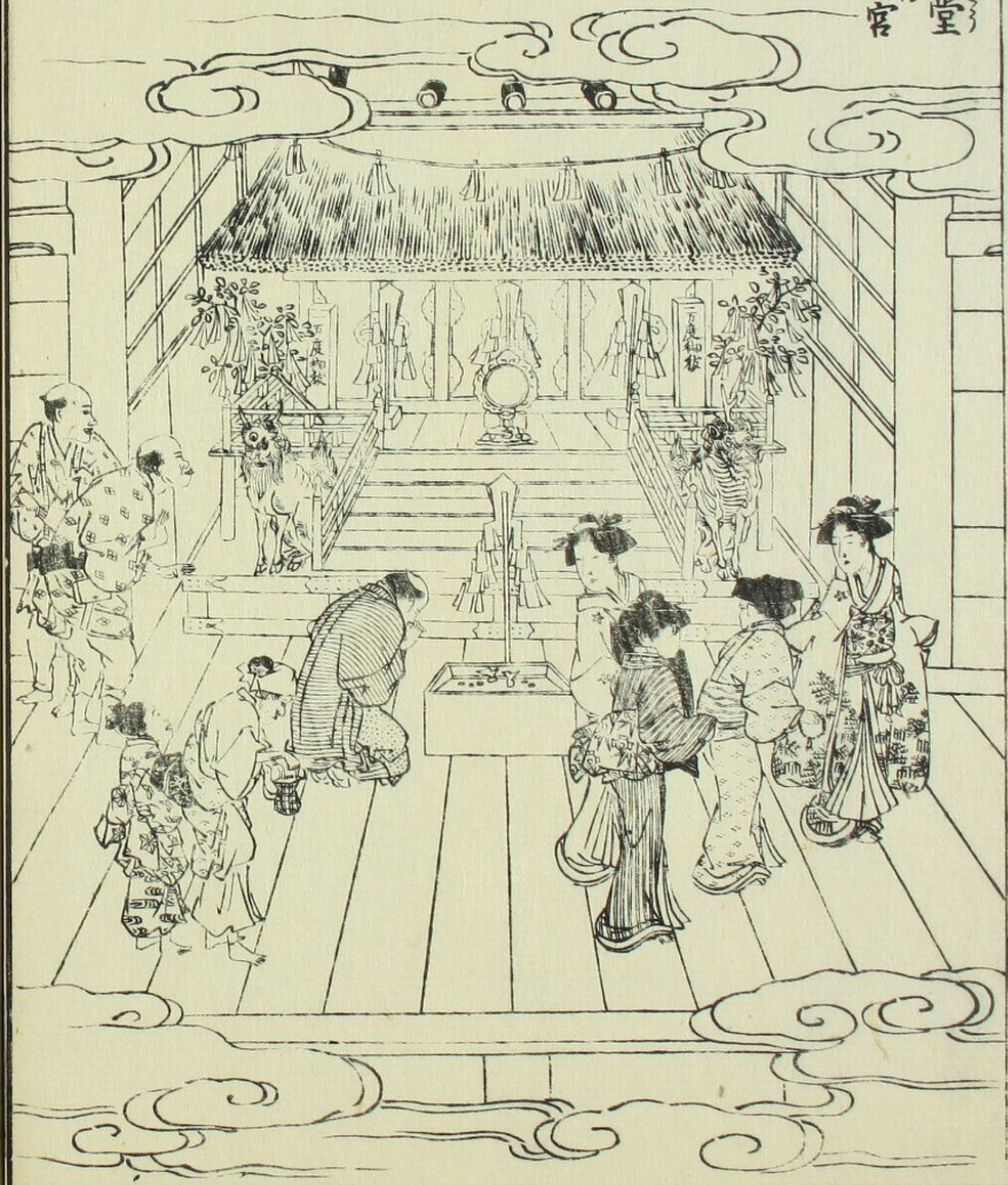


第百二十一 樂婆私叱藏尊者	第百一 來魚善波 味邊薩羅 尊者尊者	第百九十一 羅旬十一 尊者尊者	第百八十一 龍益十一 尊者尊者	第百七十一 善善德 見意首 尊者尊者	善花王 尊者尊者	慧作 尊者尊者
------------------	-----------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------------	-------------	------------

火心 焰平等尊者	賢吉俱 劫祥那 首咒含 尊者尊者	大滿慈 天宿地 尊者尊者	電淨弗 光正沙 尊者尊者	善變喜 根光見 尊者尊者	寶助 涯歡 尊者尊者	
-------------	---------------------------	--------------------	--------------------	--------------------	------------------	--

顯不可 羅比尊者	金鉢三 剛多味 味羅聲 尊者尊者	淨闍慶 藏陀友 尊者尊者	寶善德 仗觀光 尊者尊者	德花善 項光宿 尊者尊者	觀難 身勝 尊者尊者	
-------------	---------------------------	--------------------	--------------------	--------------------	------------------	--

羅漢堂
護法神宮
九んんしう
たきのゆふ
観す



第 斷 護 妙 煩 惱 尊 者
第 二 百 一 十 一 勝 意 尊 者
第 二 百 三 十 一 香 燄 幢 尊 者
第 二 百 四 十 一 須 彌 望 尊 者
第 二 百 五 十 一 歡 喜 智 尊 者
第 二 百 六 十 一 持 善 法 尊 者
第 二 百 七 十 一 智 慧 海 尊 者
第 二 百 八 十 一 淨 善 提 尊 者
第 二 百 九 十 一 梵 音 天 尊 者
第 二 百 十 一 精 進 山 尊 者
第 二 百 一 十 一 精 進 善 業 尊 者
第 二 百 一 十 一 聖 峯 慧 尊 者
第 二 百 一 十 一 曼 殊 行 尊 者
第 二 百 一 十 一 眾 和 合 尊 者
第 二 百 一 十 一 如 意 輪 尊 者

薄 俱 羅 尊 者
須 彌 燈 尊 者
善 圓 藏 尊 者
梅 檀 尊 者
摩 尼 獨 尊 者
舍 遮 羅 尊 者
乾 陀 羅 尊 者
提 多 迦 尊 者
尼 貝 伽 尊 者
眾 貝 伽 尊 者
提 貝 伽 尊 者
尼 貝 伽 尊 者
因 地 果 尊 者
無 量 光 尊 者
阿 逸 多 尊 者
阿 利 多 尊 者
阿 利 多 尊 者
首 陀 焰 尊 者

利 婆 多 尊 者
波 持 伽 尊 者
波 頭 摩 尊 者
迦 難 留 尊 者
福 德 尊 者
斷 業 尊 者
莎 伽 尊 者
水 潮 聲 尊 者
不 思 議 尊 者
首 正 念 尊 者
覺 性 解 尊 者
不 動 意 尊 者
孫 陀 羅 尊 者
法 輪 山 尊 者
天 鼓 聲 尊 者
魚 比 校 尊 者

第 多 伽 樓 尊 者
第 二 百 七 十 一 利 婆 多 尊 者
第 二 百 八 十 一 威 德 聲 尊 者
第 二 百 九 十 一 阿 那 悉 尊 者
第 二 百 十 一 行 化 國 尊 者
第 二 百 一 十 一 聲 龍 種 尊 者
第 二 百 一 十 一 行 傳 法 尊 者
第 二 百 一 十 一 普 現 尊 者
第 二 百 一 十 一 光 燄 尊 者
第 二 百 一 十 一 首 醜 尊 者
第 二 百 一 十 一 持 大 醫 尊 者
第 二 百 一 十 一 眼 龍 王 尊 者
第 二 百 一 十 一 義 法 勝 尊 者
第 二 百 一 十 一 王 住 道 尊 者
第 二 百 一 十 一 魚 垢 行 尊 者
第 二 百 一 十 一 禪 定 果 尊 者
第 二 百 一 十 一 連 磨 真 尊 者
第 二 百 一 十 一 心 勝 修 尊 者
第 二 百 一 十 一 會 法 藏 尊 者
第 二 百 一 十 一 頭 陀 藏 尊 者
第 二 百 一 十 一 魚 垢 藏 尊 者
第 二 百 一 十 一 金 富 樂 尊 者

普 賢 行 尊 者
普 勝 山 尊 者
利 婆 多 尊 者
普 勝 山 尊 者
誓 南 山 尊 者
香 金 王 尊 者
慧 依 王 尊 者
藏 律 行 尊 者
闍 夜 多 尊 者
施 婆 羅 尊 者
可 波 羅 尊 者
不 退 法 尊 者
持 善 法 尊 者
常 歡 喜 尊 者
議 洗 腸 尊 者
降 伏 魔 尊 者

持 三 昧 尊 者
持 名 魚 王 尊 者
辨 財 王 尊 者
雷 伽 耶 尊 者
摩 拏 羅 尊 者
降 魔 軍 尊 者
德 自 在 尊 者
秦 摩 利 尊 者
闍 提 魔 尊 者
聲 飯 依 尊 者
僧 伽 耶 尊 者
受 勝 果 尊 者
威 儀 多 尊 者
德 淨 伽 尊 者
阿 僧 伽 尊 者

第三百二十一

頓悟尊者
燈導首尊者
須達那尊者
士應真尊者

第三百一十一

堅固心尊者
塵劫空尊者
功德相尊者
白香象尊者

第三百四十一

識自生尊者
聲引衆尊者
鬱多羅尊者
大藥尊尊者

第三百五十一

勝解空尊者
月蓋尊尊者
菴羅滿尊者
直福德尊者

第三百六十一

須那利尊者
提婆長尊者
蘇頻陀尊者
瞿伽梨尊者

第三百七十一

周陀婆尊者
甘露法尊者
超法兩尊者
聲嚮應尊者
光明燈尊者
忍生心尊者
護歎願尊者
離淨語尊者
福業除尊者
修無德尊者
項生尊尊者
喜見尊尊者
成大利尊者
瓊德首尊者

住世間尊者
自在王尊者
德鈔法尊者
應赴供尊者
執寶炬尊者
阿氏多尊者
定拂羅尊者
鳩舍尊尊者
羅餘習尊者
喜無著尊者
心定論尊者
薩和壇尊者
韋藍王尊者
法首尊尊者
金剛藏尊者

第三百八十一

無憂眼尊者
光明網尊者
去蓋障尊者
淨除垢尊者

第三百九十一

天眼尊尊者
寶蓋尊尊者
喜信靜尊者
金光慧尊者

第四百一

伏龍施尊者
蓮花淨尊者
利巨羅尊者
天音聲尊者

第四百十一

大威光尊者
寂上尊尊者
最無比尊者
持世界尊者

第四百二十一

定花至尊者

無垢藏尊者
除衆憂尊者
善修行尊者

除疑網尊者
無垢德尊者
坐清涼尊者

自明尊尊者
去諸業尊者
颯陀怒尊者

和倫調尊者
慈仁尊尊者
那羅達尊者

無盡智尊者
神通化尊者
摩訶南尊者

編貝足尊者
思善識尊者
無量光尊者

幻化空尊者
拘那意尊者
調定藏尊者

金剛明尊者
賢首尊尊者
無垢彌尊者

自在主尊者
金剛尊尊者
超絕倫尊者

明世界尊者
燭慢意尊者
月菩提尊者

無邊身尊者

最勝幢尊者

第 四百三十一
光焰明尊者
無盡慈尊者
葉惡法尊者
常悲愍尊者
普莊嚴尊者

第 四百四十一
那羅德尊者
不勤羅尊者
師子明尊者
堅固行尊者
謝雲雨尊者
法上觀淨尊者

第 四百五十一
信證剛尊者
破邪見尊者
觀無邊尊者
義成就尊者
善住義尊者
師子作尊者
行忍慈尊者
無相空尊者
淨那羅尊者

第 四百六十一
師子頰尊者
音調故尊者
大賢光尊者
摩訶羅尊者
淨那羅尊者
行敬端尊者
勝自淨尊者
有性空尊者
勇猜進尊者

第 四百七十一
智別身尊者
分別身尊者
淨解脫尊者
質直行尊者
大熾妙尊者
如足儀尊者
如意雜尊者
高遠行尊者

第 四百八十一
滅惡趣尊者
慈隱息尊者
性海通尊者
法通尊者
怡真常尊者
破冤賊尊者
寂靜行尊者

第 四百九十一
尋聲應尊者
常隱行尊者
菩薩慈尊者
拔眾苦尊者
得定通尊者
數却定尊者
注根盡尊者
鉢利羅尊者

第 五百
願事眾尊者
思薩地尊者
注茶迦尊者
鉢利羅尊者
得定通尊者
慧廣增尊者
六根盡尊者
鉢利羅尊者

第 五百
阿難尊者
阿律尊者
須菩提尊者
目捷連尊者
阿波離尊者
富樓那尊者
羅睺羅尊者
迦旃延尊者

第 五百
六度尊者
羅漢尊者
羅睺羅尊者
迦旃延尊者
羅度尊者
羅跋黎墮尊者
迦羅尊者
迦羅尊者

第 五百
伐羅閣尊者
羅羅尊者
迦羅尊者
迦羅尊者
羅羅尊者
迦羅尊者
迦羅尊者
迦羅尊者

天恩山五百大阿羅漢寺鐘銘並引
 武藏國天恩山五百大阿羅漢寺鐘銘並引
 松雲創建也辛未春松雲從涼師來謂老僧云沙
 自幼福菲緣像今發志願欲刻五百真為衆生之
 田然嘆曰此願甚難得成必不妄在福緣更老
 老僧願心實與不實難得成必不妄在福緣更老
 全在願心實與不實難得成必不妄在福緣更老
 願之瑞矣老僧實與不實難得成必不妄在福緣更老
 勸論瑞矣老僧實與不實難得成必不妄在福緣更老
 老僧論瑞矣老僧實與不實難得成必不妄在福緣更老
 華之像也甲戌三養月有震動飄雪至孟春成彫
 十尊也自爾功既聞化三昌院大日經始五十一尊
 不尊也自爾功既聞化三昌院大日經始五十一尊
 黃可思議哉偶新開府秋七月其願賜乎成彫
 像丙子夏四月尚就荒官請羅漢寺養建六地華
 會項禮三官之聖庶長普請四衆大漢養建六地華
 拈香凡百官之聖庶長普請四衆大漢養建六地華
 豈非希世之人淳樸寬量哉松雲百者乃趨予法
 之從且為是馬得全量哉松雲百者乃趨予法
 若千不古亦何遷乎茲野氏巖慈大為捨備其德
 色于公室氏亦何遷乎茲野氏巖慈大為捨備其德
 經貞公室氏亦何遷乎茲野氏巖慈大為捨備其德
 成貞公室氏亦何遷乎茲野氏巖慈大為捨備其德
 銅貞公室氏亦何遷乎茲野氏巖慈大為捨備其德
 鐘貞公室氏亦何遷乎茲野氏巖慈大為捨備其德
 大冶鑄就新創鯨鯢
 武陵海上新創鯨鯢
 大冶鑄就新創鯨鯢

額 天王殿の
 禪堂 日野右の方の
 鐘樓 庫裡の前より弘福寺の鐵牛和尚撰する可なり

天恩山

遊佛場

攝待所 日野より
 額 軒下揚
 細井九集の筆

玄系突

藤柳 内腰掛の傍
 四年己未是を
 裁しめたる

三市堂 経門の内左の方天王殿
 觀音の靈燈を模擬して百軀の法衣を
 當寺中興象先和尚ニ支を擬
 として覽保え年辛酉是を造
 りて後三市堂と唱へ後三市堂を造の規
 範とせ其機巧極きに堪たり

右繞三市堂

額 同堂
 階の軒
 寺の先
 和尚の筆

因道園

禁石 羅漢堂の
 利竿 日野右の方の
 天王殿 日野右の方の
 利竿 日野右の方の
 天王殿 日野右の方の
 利竿 日野右の方の
 天王殿 日野右の方の

一音變動警覺曉昏
觀音大士如入此門
幽明莫滯功德難論
存沒俱利消融百寃
雲禪功烈函益乾坤

修洪規範解塵勞煩
由通無礙卻忘聞根
國平岷泰斯子斯孫

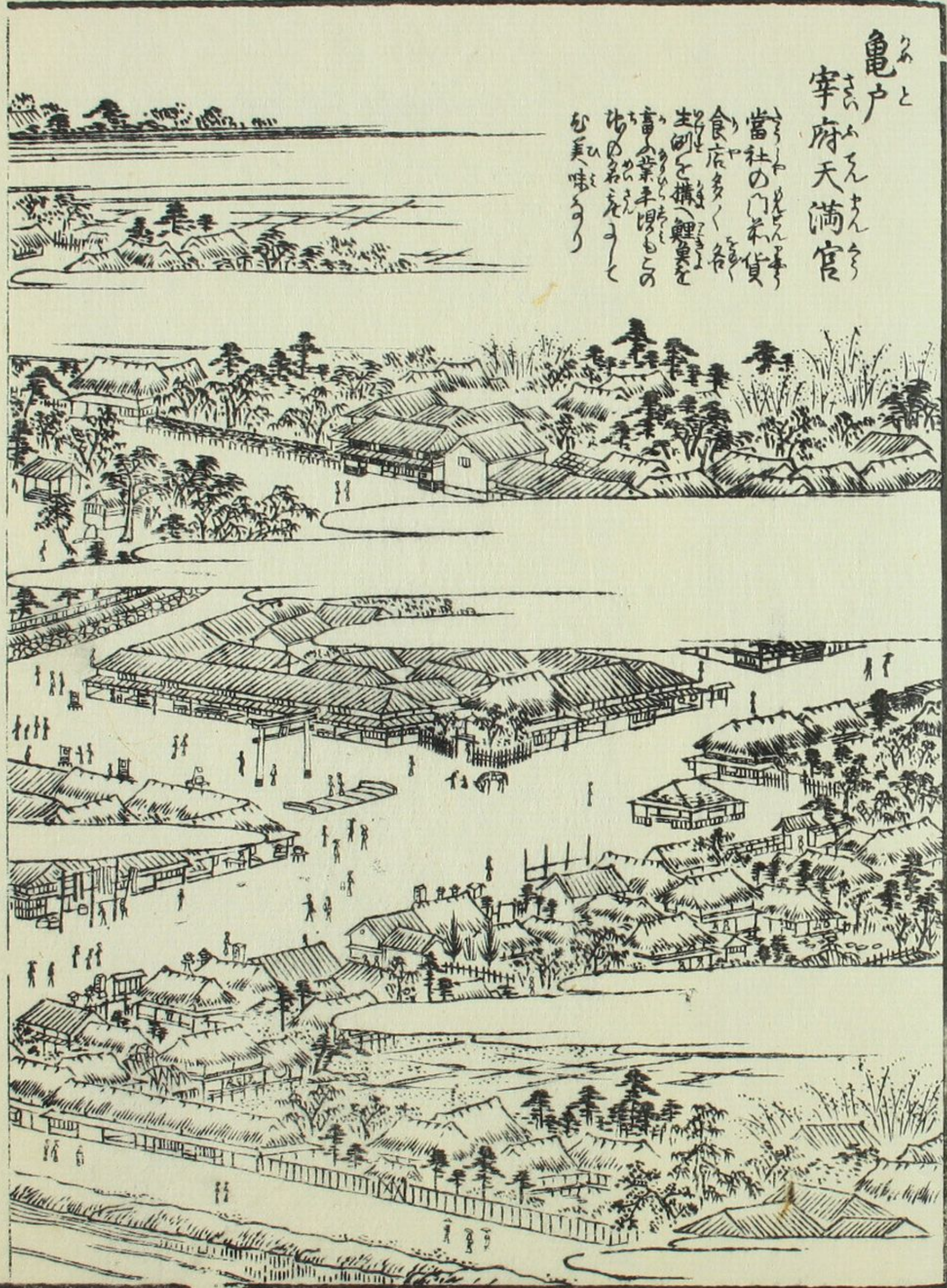
元祿九年丙子四月數日 牛頭缺牛機謹誌

檜樹 境内より交立年庚申檜樹九十餘株を

挑の古手 元文紀元丙辰 當寺の境内南

周山堂 方丈の東より此代は保十八年の頃鐵眼禪所當寺を退玄の後
の像を遷すに三代堂とも唱ふ鐵眼禪所を遷すに三代堂とも唱ふ鐵眼
禪所の行違ふに列傳秘寺の碑文に詳なり
中興象先和尚の黃葉四世の法孫にして鐵眼禪所の法脈なり
當時松雲禪所化寂の後假堂も破壊し佛像も兩露の
石に侵されたりを深く患ふ 正徳三年癸巳本所鐵眼
和尚の命を受始て大江戸より來り當寺より住持を享保二年丁酉
正月より十有餘年の間心肝を碎れ寒暑風雪の厭あり

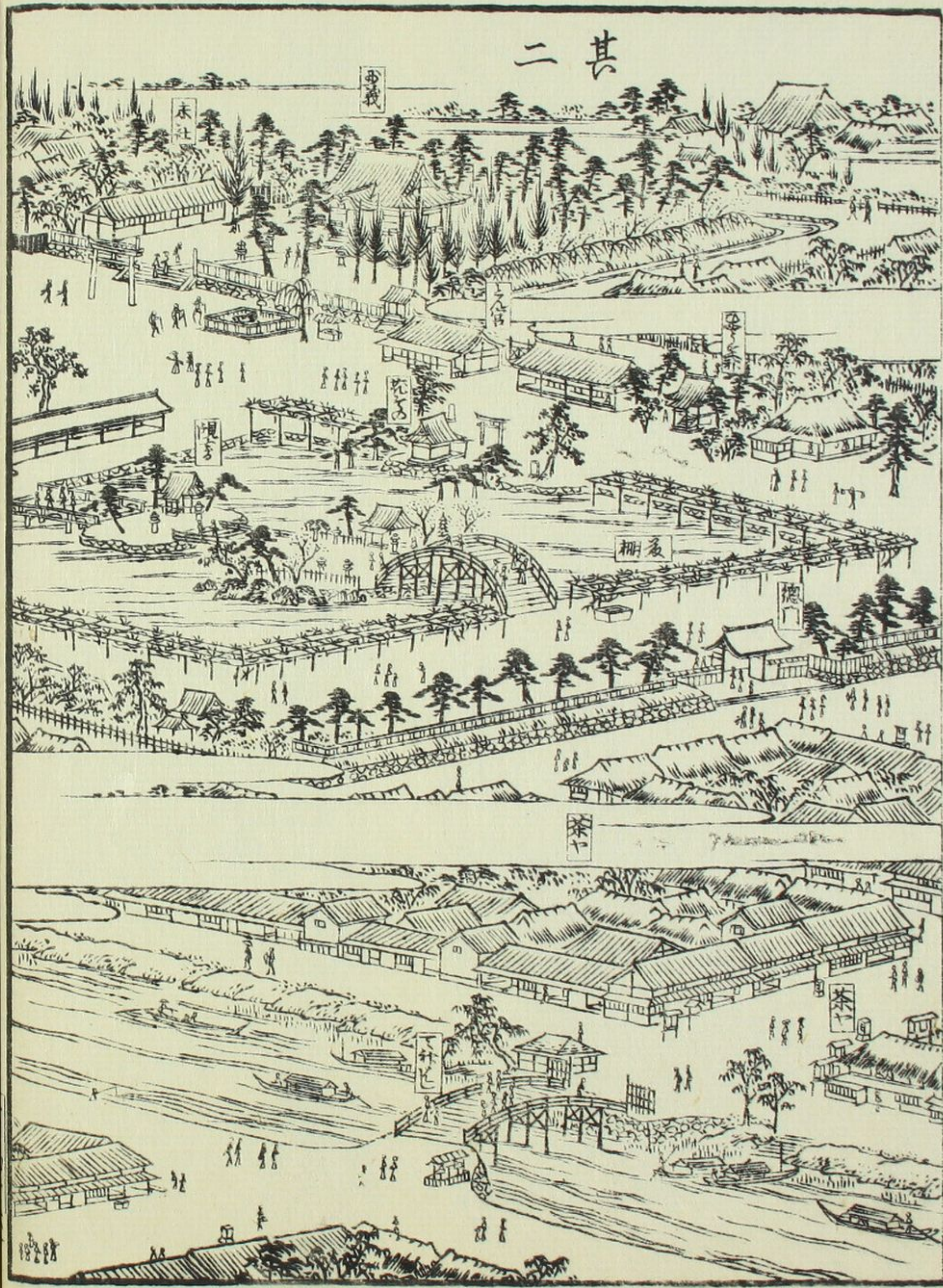
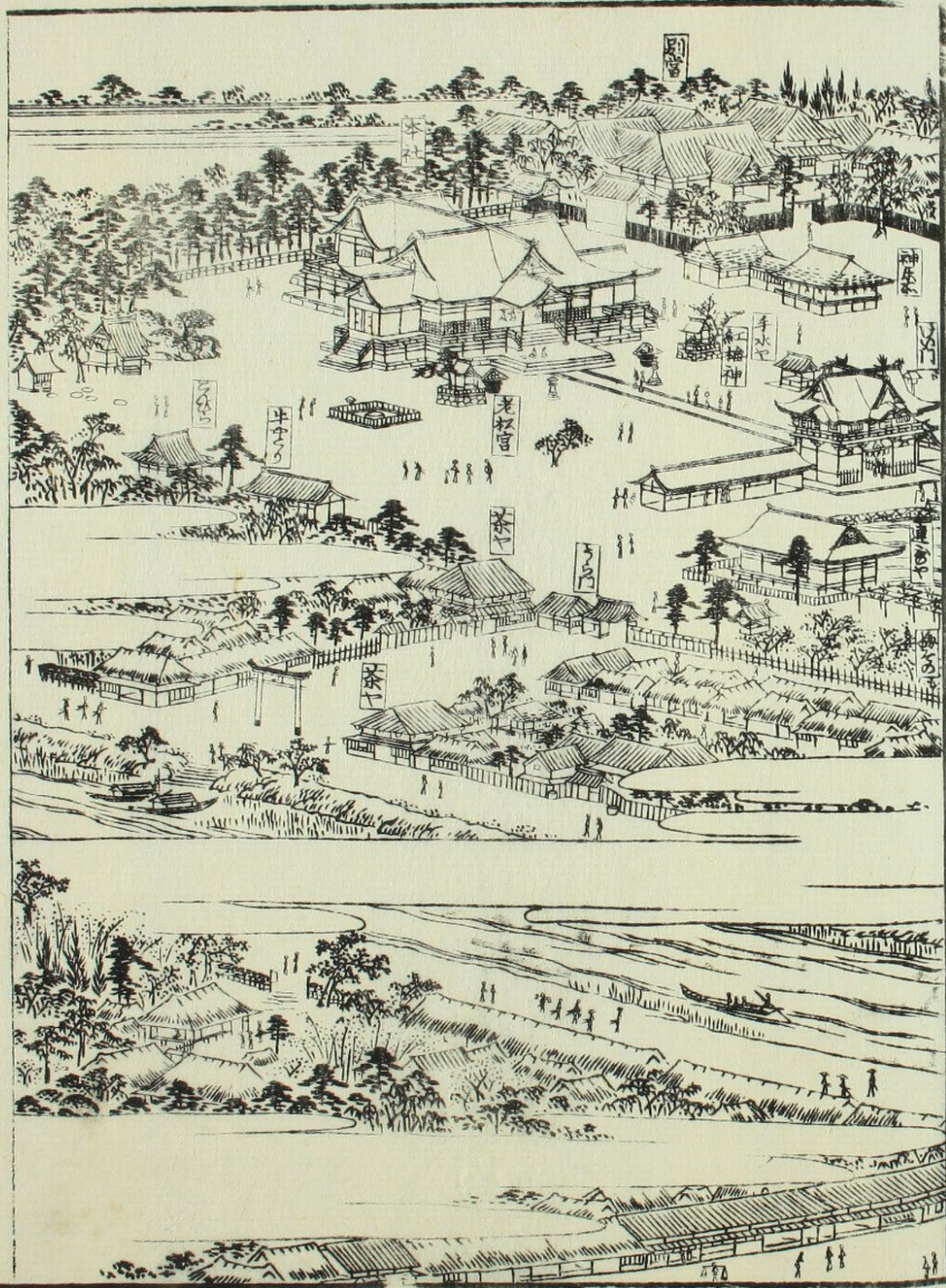
日々に麻巾の街市より入て行乞し既して勸進の功返暮を受
る所の一握一投の米糠を積て其料に元同十年己巳より今
存する所の佛殿僧房悉く建立成就せしを依同十四年己
酉二月周堂惣供養の大法會を行ひしに孟蘭盆の大施餓
鬼會を用く當寺周山の象先和尚たるも其に顯然たり
とどとも故のりて鐵眼禪所を遷山し自の所寶列和尚
を二代とし又松雲禪所創業の大切あるを以一代周基と稱し
自三代の席に坐せしる隱元禪所歸化の後持齋一食して
深く貧者をしてのりれし佛像經卷と古た袈裟の外より聊も
聊も貯ふる事なり日この勤行より般若經越分五卷と花嚴
經行願品百五十卷とを讀誦し觀音の尊号を書寫せしるの
其教積て山の如し又大般若經一部六百卷一字百禮しして
是を書寫し其先師家得道の時拈髻就寺より入て法道成



龜戸
宰府天満宮

當社の門前、食店多く、生刺を撰、鯉魚を賣、業平、此の名を以て、此美味なり。

就の誓願を發し三年の間に双手の指紙切八十卷の花嚴經を
 血書せ其後當寺殿堂の管大平成といふも宗門の坐禪
 夏冬の結制行れうらと関曲うらと依後住榮朝所命
 を受てえ文二年丁巳の冬洞涿両首坐を立て五千指の僧を
 集め江湖の大會を行ふ時 大樹らよ取てたすひ
 坐禪の行相致さるると則江湖の僧財とて米五百俵
 をたすふ支うら後般若の全文を真讀しと泔れを致す
 竟り寛延三年己丑六月五日七十三歳うら七濕般末の大定
 入貴絨香苑を捧じとほとひ来るうら二日之夜炎暑甚
 一とらうら遺骸聊変る色う茶毗しと全身舍利とせる
 其舌根の室塔に収て今從
 中興堂に在り
 當寺の黃檗流江戸最大の禪園うらて佛閣の巍たるう
 日域にわらうらえ祿年間寺領山号等を揚り享保九



年甲辰十二月 大樹始て當寺へ入せり其後同十五年正月

月晚課 河聴園翌年十二月方丈に於陞坐住持象先是を

勤む同十九年甲寅三千畝の地成派あり同二十年乙卯境

内は新殿を營せり後此地より河放鷹のあはるる

ありしを當寺へ立寄せりありし月毎の朔日あり

観音藏法を彼行へ十六日あり大般若經轉讀あり七月

は多れい毎夕施餓鬼を彼へ十六日廿二日廿五日晦日の殊

道俗群衆と象先師より已來當寺の住持ハ風雨寒晴

を厭はせり大江戸の市中を行乞すをりて勤行

と努む

宰府天満宮 龜戸村より故に龜戸天満宮とも唱ふ

別當を天原山東安樂寺聖廟院と号せり司務兼官司

大鳥居氏奉祀せり 當社列あり押菅連教の列あり

所の當社の南登川通北松代町四丁目にあり 龍王國板寺の摸あり

奈神の持神像を 此像は近しあり

本社 奈神 天満大自在天神 相殿 天穗日命

紅梅殿 本社の前右の方にあり 龍王國板寺の摸あり

回廊 瓊門 右に龍王國板寺の摸あり

と菅神の所よりよりて見をすりてありの用を以て

ありの菅神の北の方にあり 龍王國板寺の摸あり

十四前を相殿とす 龍王國板寺の摸あり

と菅神の所よりよりて見をすりてありの用を以て

ありの菅神の北の方にあり 龍王國板寺の摸あり

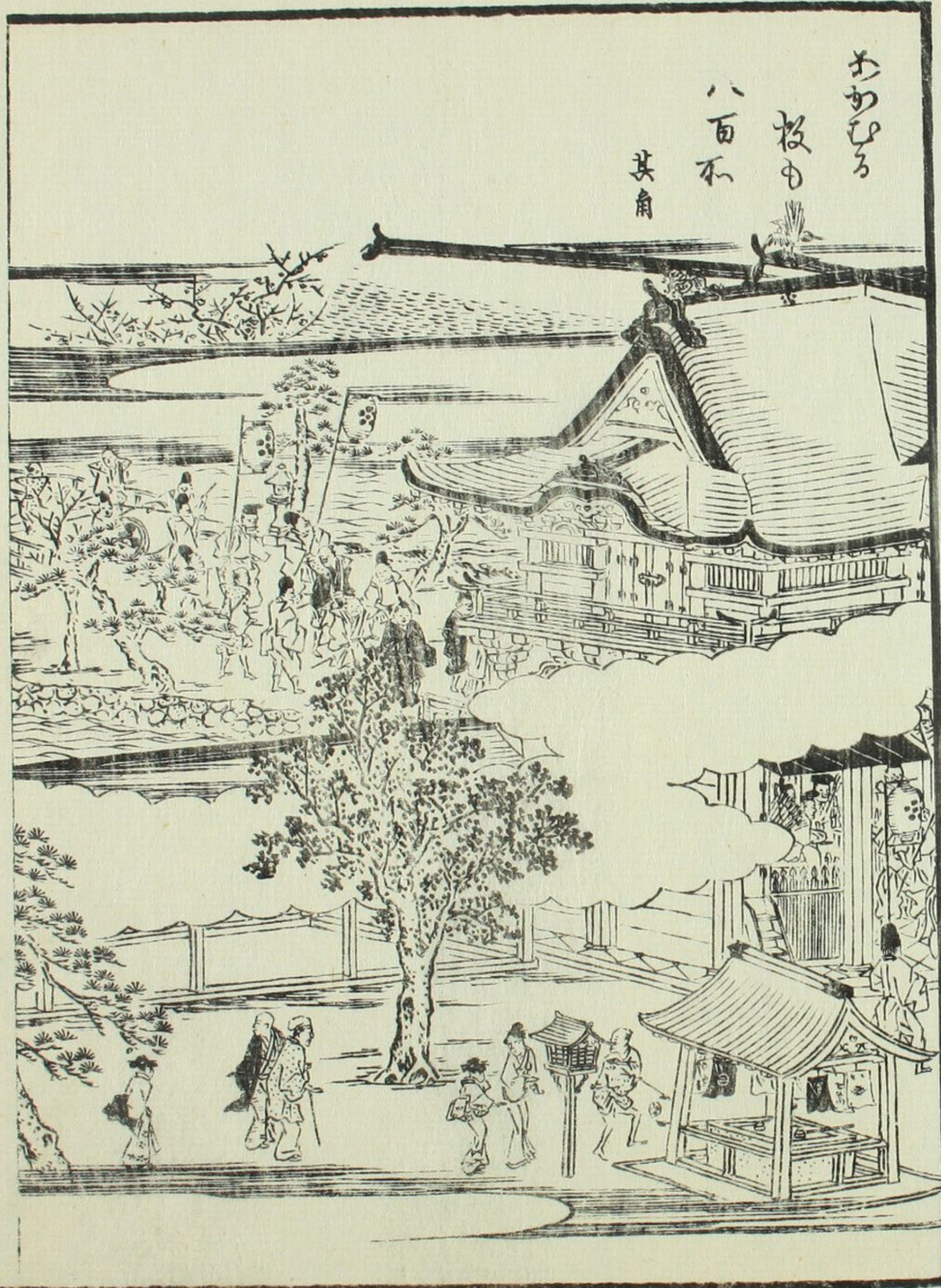
邊神祠 日所よりあり菅神連ひたりあり

延宝五年丁巳二月十二日 大樹の四 河放鷹のあはるる

裏向連教會 正月二日連教あり 若菜神供 日七日今朝若菜の餅をたぐ

菜種神事 二月廿五日菅神の神忌より二十四日通夜連教

社人水神供を奉る 奥行二十五日午時より社人等協の



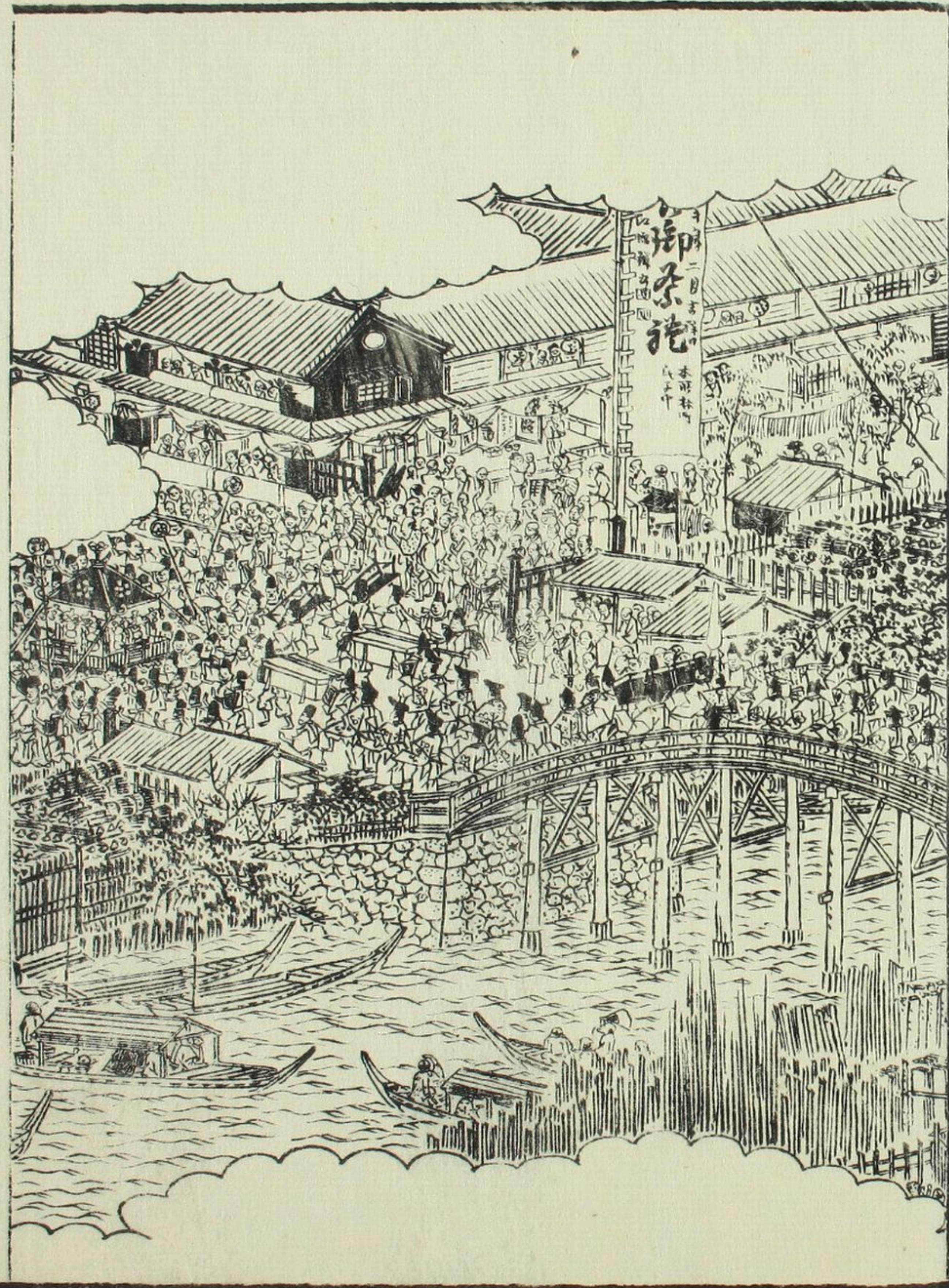
おおひら
 八百
 其角



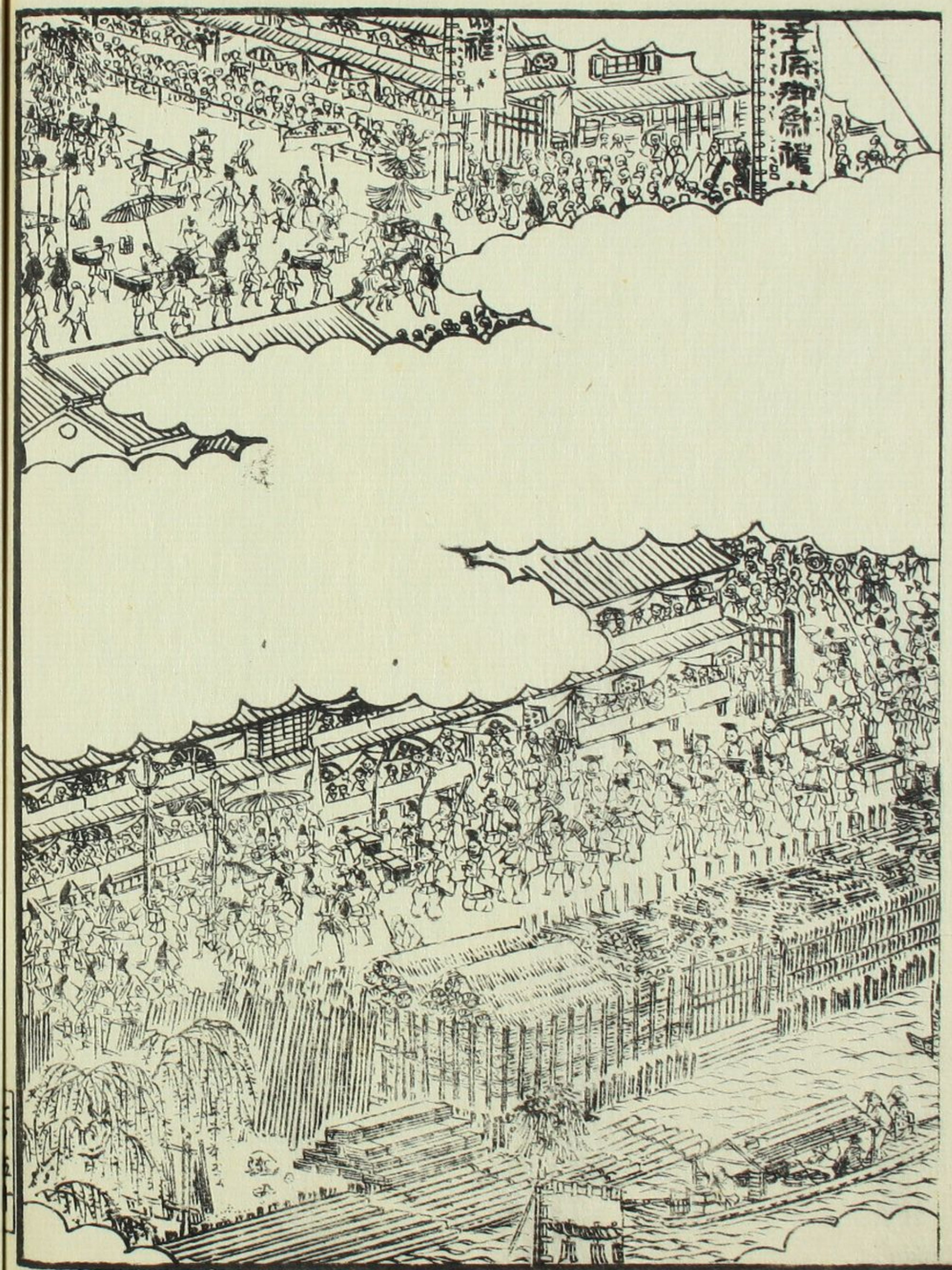
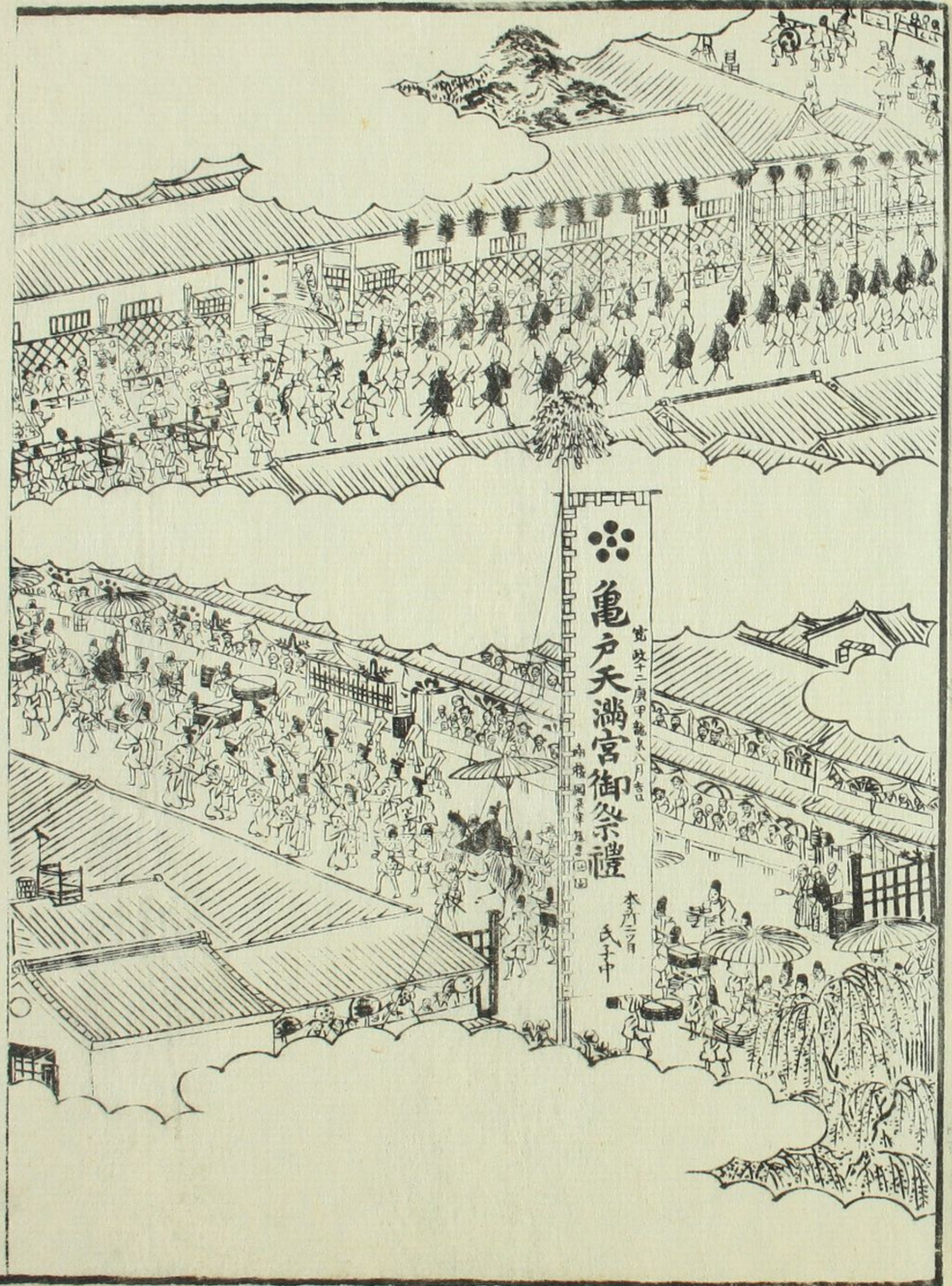
五之集
 元禄十四年
 二月二十五日
 聖廟八百餘
 御年忌於
 龜戸御社詩
 歌連御令與
 行一坐

梅松
 戸

二月二十五日
 菜種神事



龜戸天満宮祭礼
 神輿渡御行列之圖
 毎歳八月廿一日廿二日
 の四日松平一社幸あり
 て御祭籠多あり
 産子の町も縁物に出
 都鄙のまはれ群集して
 けさの一盛なり

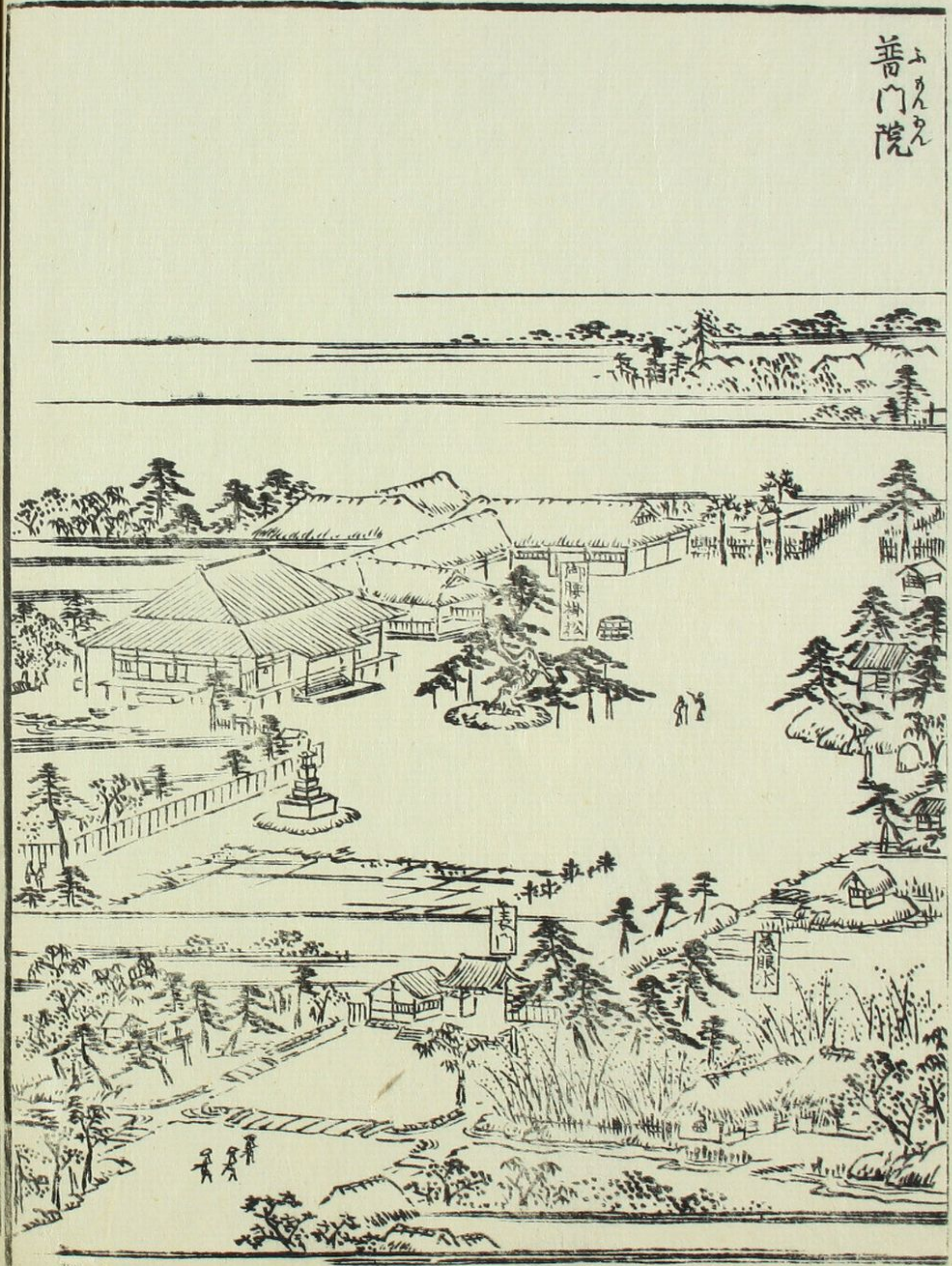


梅を指梅の神像二十八首を披瀝と又夜よりに菅原善外始筑前大宰府より一頃正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る其夢中十立て蒙る
梅の推枝うれととる獲ちを得たり依其後赤梅を双
新の神像を造り是を護ちて江戸より彼天満宮を今
の亀戸村に勧請と
社記云用祖信祐の苗裔より始筑前大宰府より一頃正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る其夢中十立て蒙る
梅の推枝うれととる獲ちを得たり依其後赤梅を双
新の神像を造り是を護ちて江戸より彼天満宮を今
の亀戸村に勧請と

其後寛文紀元辛丑 台命を蒙り同年壬寅始て今の
池を揚の同三年癸卯官居を管心字の池樓門ホ之
社頭の光景宰府の侍を摸り依は十二年辛丑
後水尾帝震翰を瀧に菅神の号をわしめ又元禄
十年丁丑一社の神事法武等宰府本官の例に准とる
ひの 同帝の勅許を蒙る爾来神威顯赫として靈瑞昭
著るり當社至寶と稱するりの菅神佩とるの天國
の寶釵なり

福聚山善門院 善應寺と号と同所一丁のり東の方より
志云宗よりて今大日如来を本尊とて
香燭の料を堂前より昔大樹竹枝香の初内腰を
御腰懸松堂前より昔大樹竹枝香の初内腰を
二用の普門慈眼の意を

普門院



身代觀音菩薩

當寺に安置を傳教大師の儀にて

緣起云大永二年壬丑千葉公直自胤三勝の城中

一字の梵刹を圍此靈像を安置一長賢上人をして始祖

たりしむ今この普門院なり三勝と云ふ隅田川後荒川の落合に三侯

たりし其れとも後公直より昔千葉公直在城の時其の普門院の跡と稱し

沈没其地を築つて鐘の聲と云ふ元和二年城を住持長真法印公命より三勝の

地を移して寺院を今の龜戸の邑に移しと云ふ往古千葉自胤の臣佐田

善次盛光後藤藤原と云ふと虚名の眾にたり誅を伏せ時日頃念す

不の此靈像の加護よて其白刃段々に壞し危難を避るる

又天文二年國中大疫疾流行

一死する者少くともこれと此靈像を念する輩の悉く病

平愈し病に臨する者も病者と床を等しくとも散て條

延の患なり其後任拍長榮上人睡眠の中一老翁の来るあり

吾は是疫を畏大士なりある人の代り疫病を受故に病苦



毎歳正月十四日
 此の童子多く
 造りよしたる
 小き船又多彩の
 幣帛を建松竹採
 ちの粗飾り其中
 大に空舟といふ文を
 を添へたる織を建
 たるを舟に飾り音
 曳ひ連て此辺を
 持ち行り其夜
 童子集會して花ひ
 裁るを
 恒例とす

亀戸邑
 道祖神祭



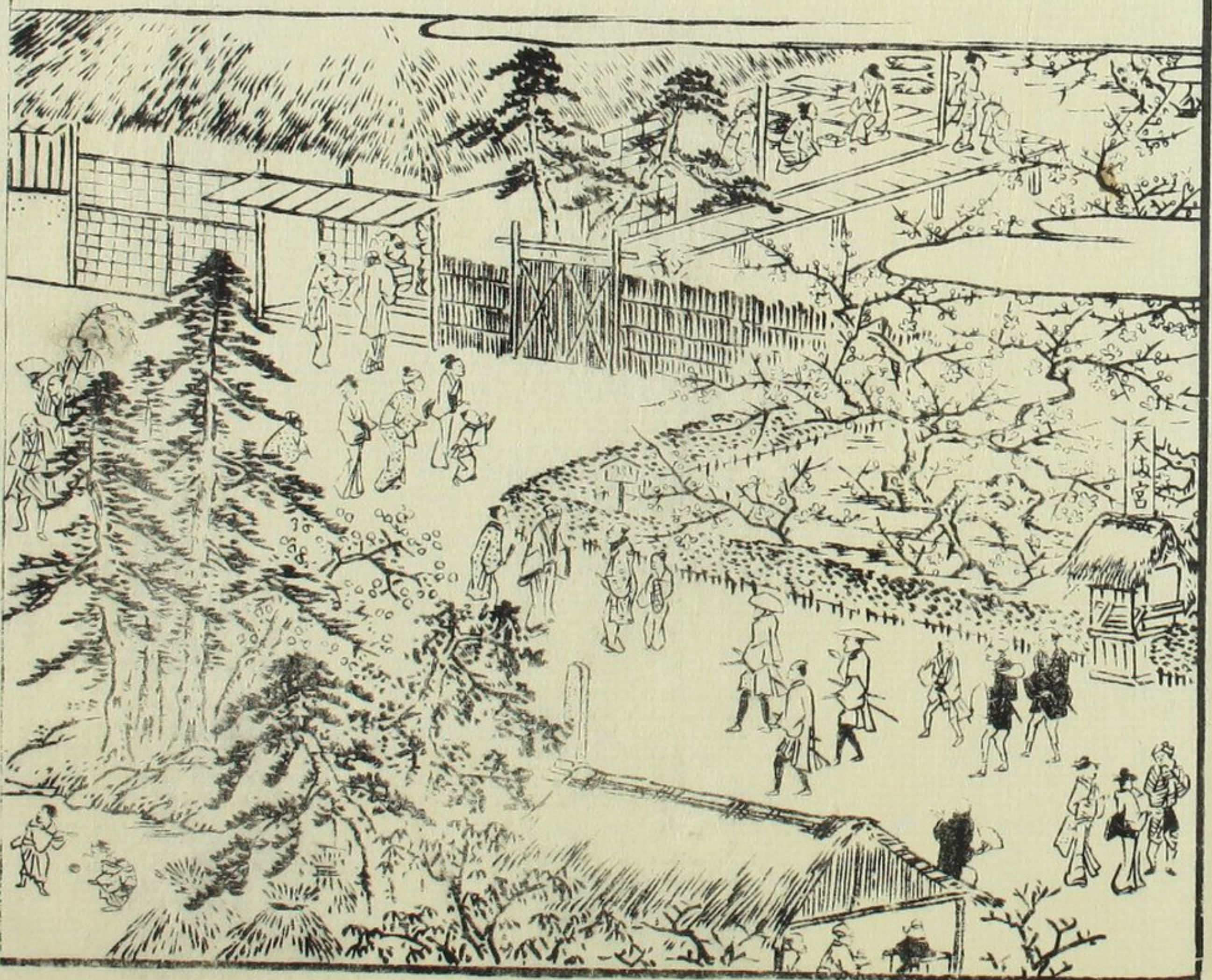
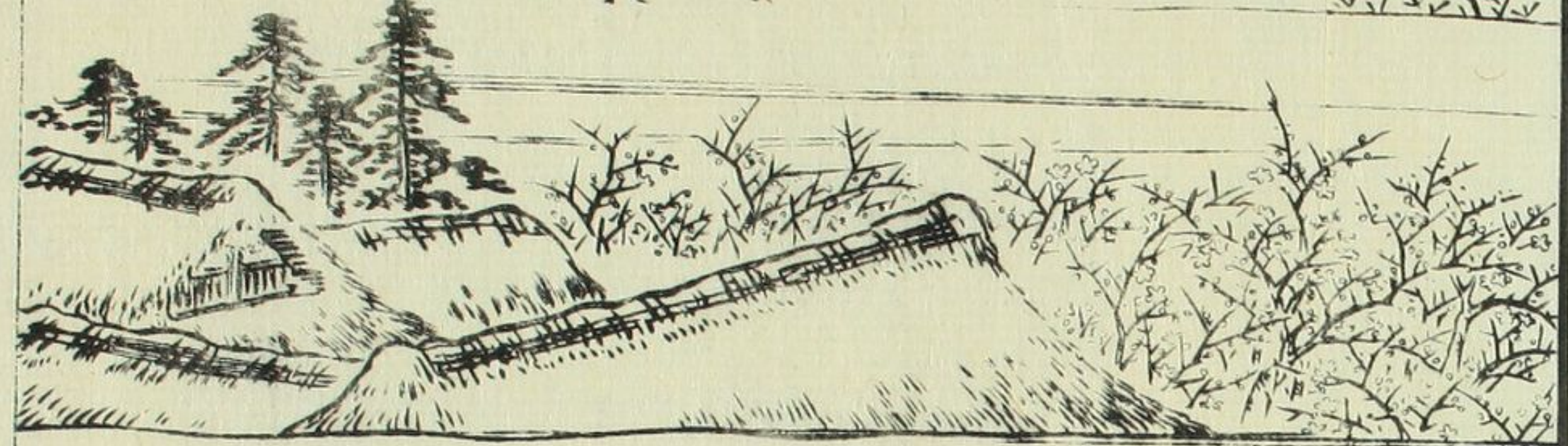
一身に逼り上人願ハ我法一千座を彼して予り救世の加彼
カとあるへーと夢覺て後益殺車を加へ予そを孫一奉ふ
佛跡へ行らして蓮臺に法を感涙肝に命一まより晝夜不
退一千坐の觀音供を彼しつれ四中頓に疫疾の患ひを
遁るるを故に世俗身代觀世音と唱へるるなり
卧龍梅 日所清香庵あり俗間梅屋敷と稱し其花一品
よと重辨潔白なり薰香至て深く形状宛も龍の蟠即
如一園中四方殺十丈の間は蔓て梢高ゆと枝毎半ハ
地中に入地中をゆく枝莖を生し何を幹ともワきと云り
ゆゆと曲りて自其勢を彰と仍卧龍の号ありと
しり梅譜に卧梅梅乳杯しりゆゆと云り

梅譜曰 公都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐
物也謂之梅竜好事者載酒遊之云云

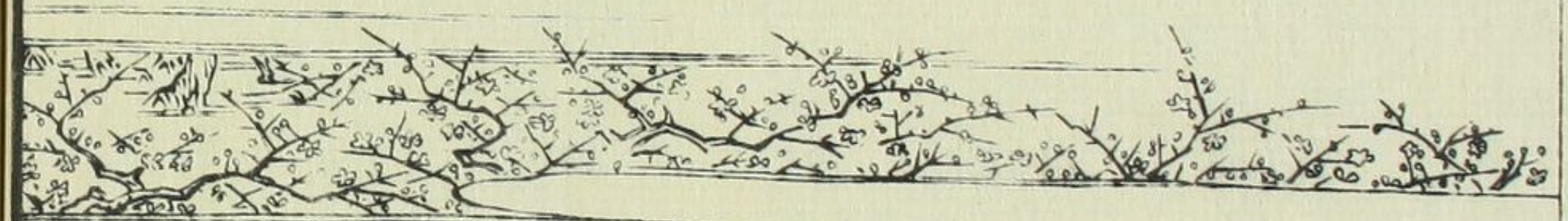
神明宮

日所あり宮居の一堆の塚上あり相傳上古此北ハ
一の小嶋より其繞り海面なりと其頃渡海の船風浪の
難く遠く浮勢両皇太神宮の保護より命を乞ふ也
報賽のため此北に水神を勧請りより官居を宮と
しり
往古此北船多く溺るるあり入と唱へしり 網干根と云ハ社
の傍にありて神木と云
昔此辺の人は海をうり頃漁者の網を
穿て土中より漁網は具と云ふの礎と名つるあり今此の地の
より古人云々しりし根の一名を大平根と号し社地をも大平根と稱す
明王山東覚寺 同所南の方にあり真言宗より寺嶋の蓮
華寺に属し本尊は弥陀觀音勢至の三尊なり當寺は福
四年辛卯草創し日所の寺院より岡山を玄覺法印と号し
不動堂 當寺は安置を良疾僧都の彫像より相列大山寺の奉ると日所
縁起曰當寺住持草庵より頃岡山玄覺法印に住せらる猶より辛卯四年
辛卯或時負笈の優婆塞まりて投宿を乞ふに法印許諾し其夜床は安卧
しり翌朝法印疾起て仏間に入むとす傍に一人の壯士の壯然として行あり
法印怪し其容を問はしり壯士の聲惡の如くしり其時投

卯月の花盛
 容色
 強の雪成
 散る餘香の
 芳くして四方
 顔まゝ花の
 後実とひさし
 を採収し目よ
 乾く迄漬
 とく常々これ
 を賣入の賤い
 殊に且美
 るれはこよ
 花賞する人
 くらとせ
 古く
 大土産
 とと



梅屋敷
 白雲
 の
 花
 を
 眺
 む
 や
 梅
 の
 嵐
 雪



希の優婆塞これをけしめしあて云く我々の中よ安すその不動の罰たふ
 不さくんと云く即答の希ひのさすの漸沙念に不例に彼社主身跡の自由ある
 身をわねえさすわの語を發せしを遂く方々終る一也盜賊なりをを
 其罪を謝してわく良公のひるくさし物一まぬ依法印を奇く其不その由縁
 を同優婆塞と云く良公の良公傍都相列大山と元基一たすの頃我始祖其麓
 子安村の傍に其時傍の供事すすのて前路を元通一傍終るく山頂
 ありしこれ相列大山寺の真基なり其後傍の隨後の家を併して此本寺を我始祖
 に附屬ししは昔々云く人界の大患の盜難銀難のよらにさるるなりけ靈像を復持
 せし承りぬり子孫のよひ見す結縁の輩も又其難を遠れあめんと云くありより
 希希と相傳せり今よありて二十五代あり田圃の間も途中危難を遠れしる屢多
 りりもこの靈像の靈像にさる所なりと語られは印像の感歎しこの靈像を永く
 此像よとめ一字を建せし昔の衆生と結縁せん欲し頻りに此靈像を乞求じ
 優婆塞も終り其意を遂くその像を玄學の附と云學中よ一字の香堂を
 置し此靈像を女と為すこれなり故に世人盜難除不動尊と稱しやあり

香取大神宮 同所二丁許乾の方にあり

此地昔の太平塚に等しく海
 一丁の離嶋あり電の像あり

本社 奈神經津主命
下総一宮の 神同所

相殿 武甕槌命 鹿嶋大神宮
 猿田彦命 大炊大明神 三坐

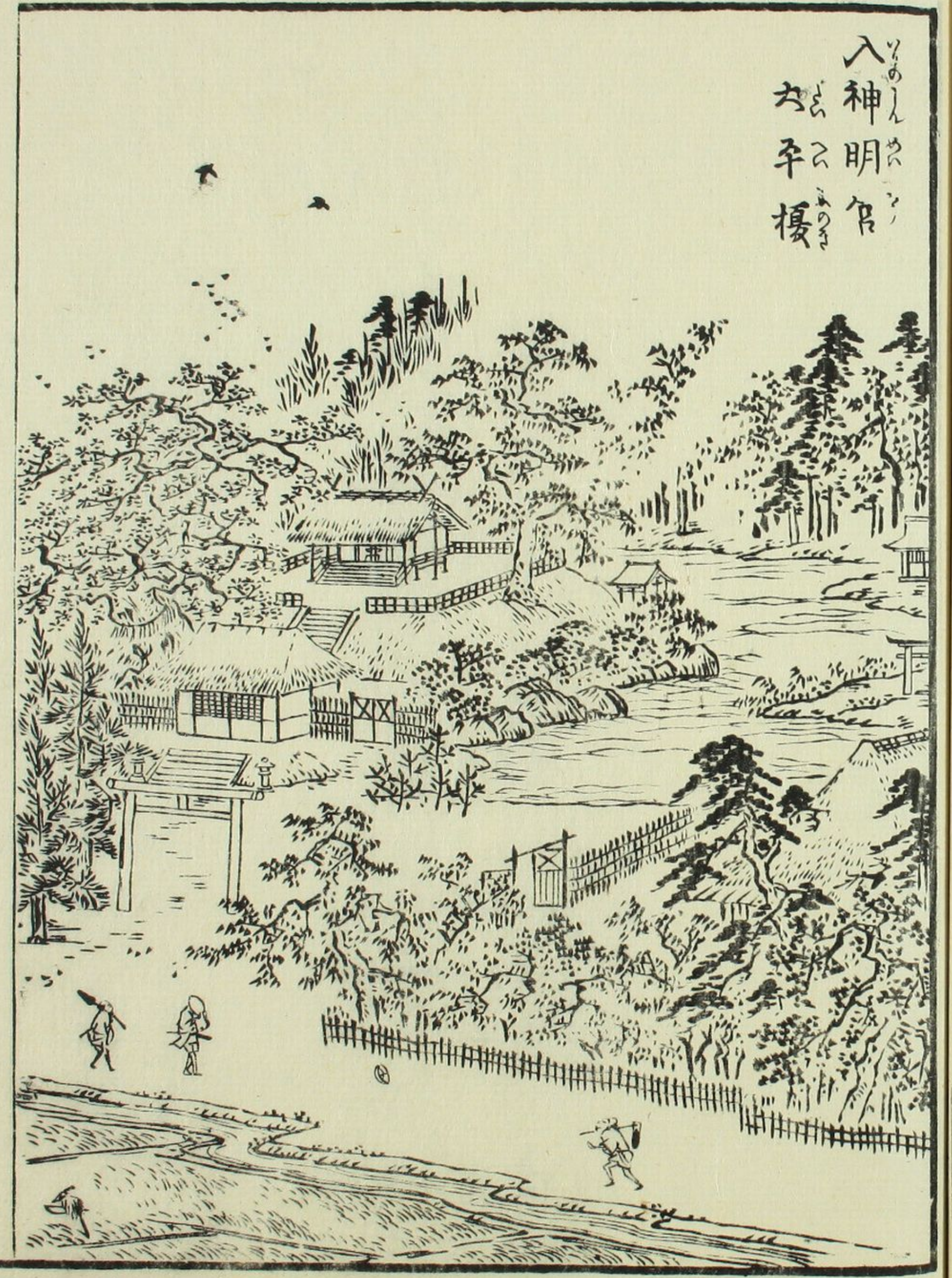
當社の龜戸村草創

一の勸請より此辺第一の古跡なり

或は當社の大職冠鎌足
 のの幼後なりといふ

例祭の毎年六月十四日十五日は旅
 行と旅所の吾書木林より二三十歩東の方田の中より往古

入神明宮
 太平擾





香取太神宮





亀戸邑の常光寺の江戸
 六阿弥陀回第六番目
 あり秋二夜の彼岸
 中都鄙の花養泰詣
 群集
 七五十八

祭礼を行ひてし頃此辺に於て海面ありし其春を流し
其止る地を以て後所と定へしと誓ひたりし其春の
一となり故に今昔の例より僅の間ありし由十間川より
て神輿を舁し移し後所へ神幸なりし由ありしと
東林山寶蓮寺 善藏院と号し其真言宗なりて寺嶋の蓮華

寺に属し其寺の虚空藏菩薩の行基大士の作あり
白山西福寺品川 當寺の吾孀権現の別當寺なり相傳嘉元元年
癸卯俊鍬法印草創し其所の精舎なりて始に相列小田原より
のりしとたり鎌倉北條家の時此比より移ししなり

西歸山常光寺 同所一丁あり其の方にあり曹洞宗の禪刹
よりて摺場（中古火災の時當寺の本寺火焼
六番目あり）の總泉寺に属し岡山の行基大士中興の勝庵最大
和尙と號す本尊所除陀如來の像に即行基大士の作あり
末迎松の佛殿の前より存じり

新燈松の同一左の方にあり（時として樹上へ
燈籠揚るなり）毎歳二月八月の彼岸
中森詣ま

龜命山慈光院 同所十間川を隔ち向ふあり當寺も洞家の

禪林よりて同一く總泉寺に属し永正十一年甲戌葛西出雲守
某の令室慈光院殿草創し其所の寺院なり岡山の嵐巖和尙
本尊觀世音菩薩の像に此地より東の方の土中より中興
ありしとあり又境内に安置せる辨財天の像に智證大師の作

吾孀権現社 同所十間川の傍より此地を吾孀森又浮洲邊

とも號し別當の宝蓮寺なり
本社 祭神 茅橋媛命 一坐

日本書紀神代卷曰日本武尊初至駿河其處賊
陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林
臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺
王之情放火烧其野王知被欺則以燧出火之向燒

而得免 一云王所佩 釵日藁雲 自抽之 薙攘王之 傍草因是

津亦曰 殆被欺則 悉焚其賊 衆而滅之 故号其處 曰燒

有從王 乃至于海 中暴風忽 起高言曰 是而不可 渡時

之身日 今風起浪 必入海言 訖乃披瀾 入之心也 暴風即止

相得者 岸故時人 荒其海言 馳乃披瀾 入之心也 暴風即止

相生樟 本社前右の 於より二 股より三 社記は往 古日本武 尊茅渟媛 の神靈と

と宣ひ所 自所肅の 東の地よ 二とあり

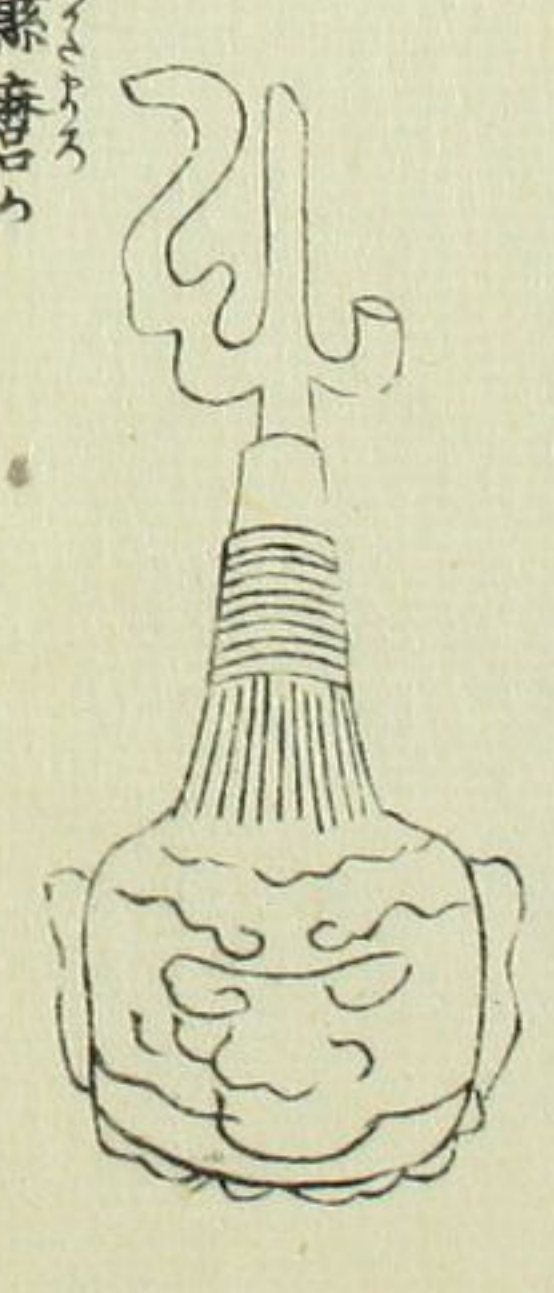
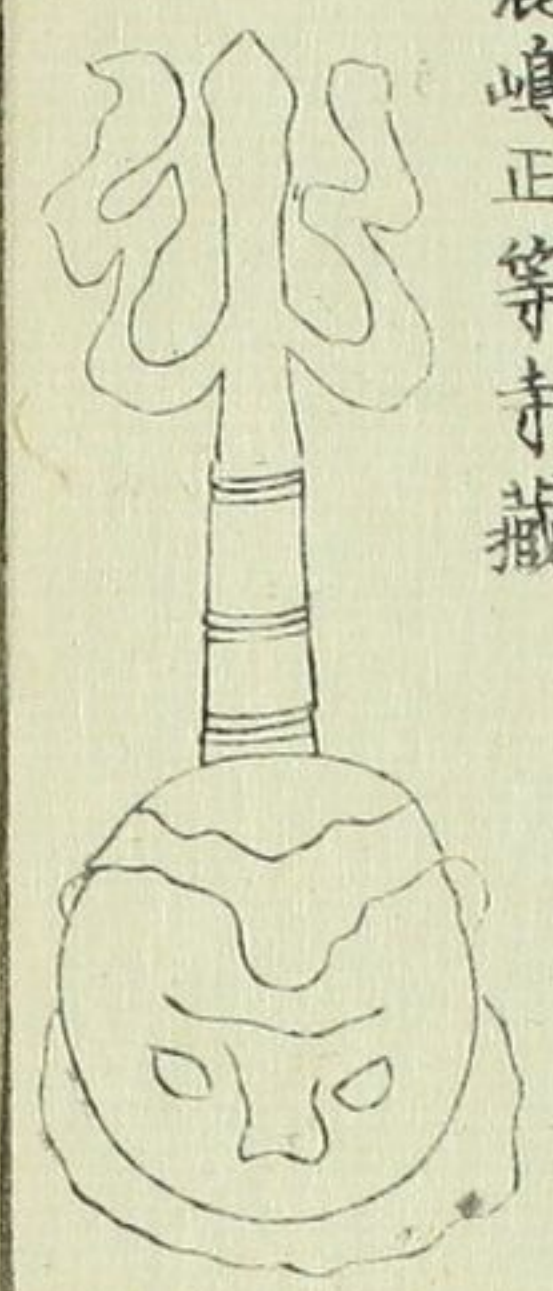
其傍は 樟の葉あり 是も二根 幹あり

神寶古 鈴一口 銅色愛 び

是より 鹿嶋正等寺 蔵

鹿嶋正等寺蔵

藤原縣磨蔵



社記曰人皇十二代景行天皇の御宇四十年皇子日本武尊東夷を

征伐しある時相摸國より上総國に往し王船に乗たり

海中にありある頃暴風忽起り王船漂蕩て渡るべからず時

妻茅渟媛曰今風起浪必して王船没むと欲して是必海神の

心なり願ひ妻り身を以て王の命を贖ひて海に入りと言訖て淵を

披て入るに收暴風即止る王船遂に着り得るある

其後茅渟媛の沖裳此邊の海上に浮ひたれり尊群臣よ

命して此所を収め壇を築くにめ端籬を巡して沖廟とせりある

又其沖廟の寄り多きを収揚て沖陵を造る今相列梅沢の女は妻明神なりと云

荒陵のみなりしを承久元年北条義時幕下鈴本軍人正神尾

采女井出大守等の諸士小祠を創營し神領三百石を附たり

しとあり其後永祿の頃由小田原北条家の臣幸山丹波守當社

を再興せしとあり

のろまのり
 吾孀森
 のろまのり
 吾孀權現
 連理樟

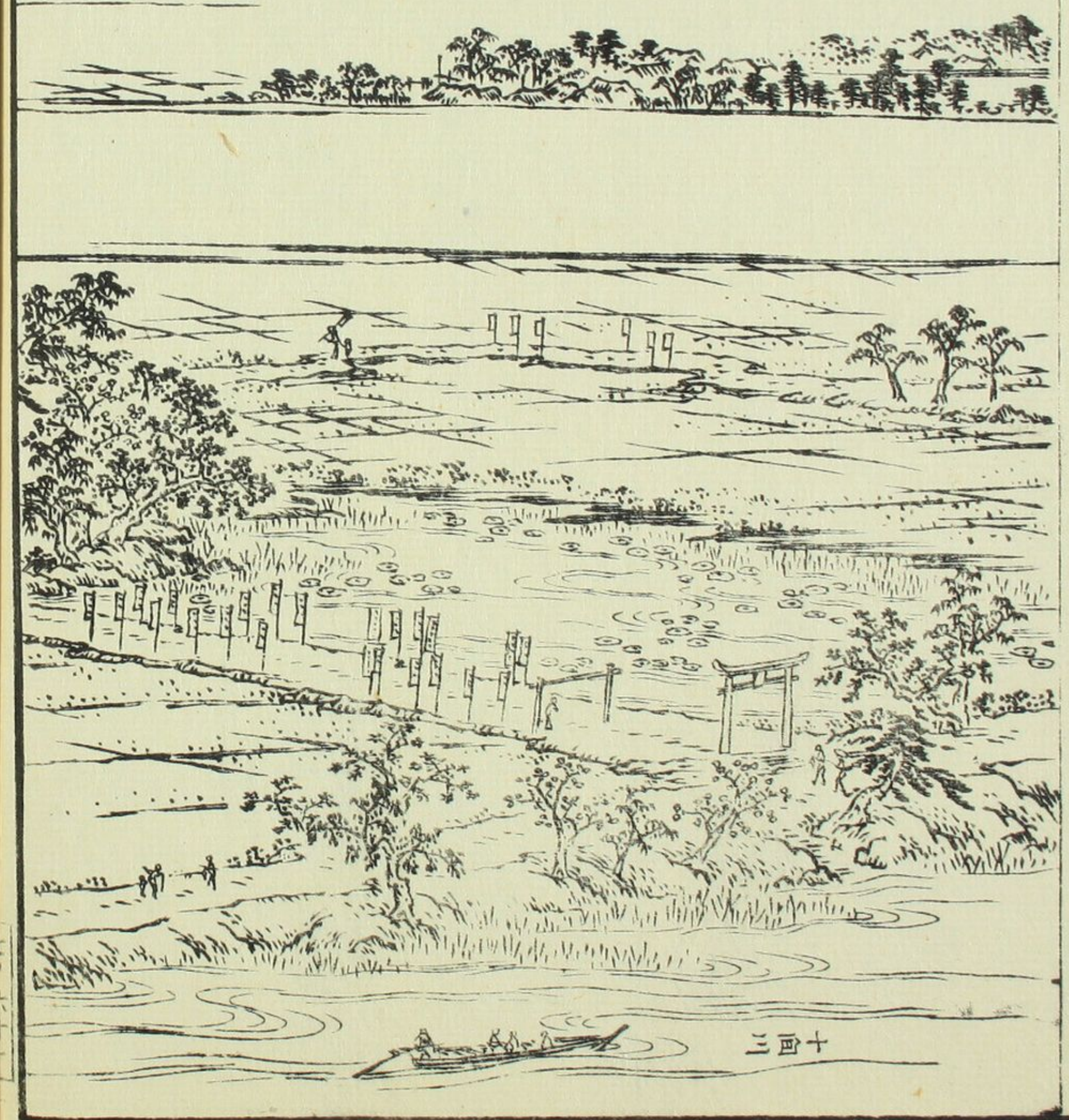
鳥のあけ

あけまの

あけまの

えんせ

月の



入江の

波を

あけ

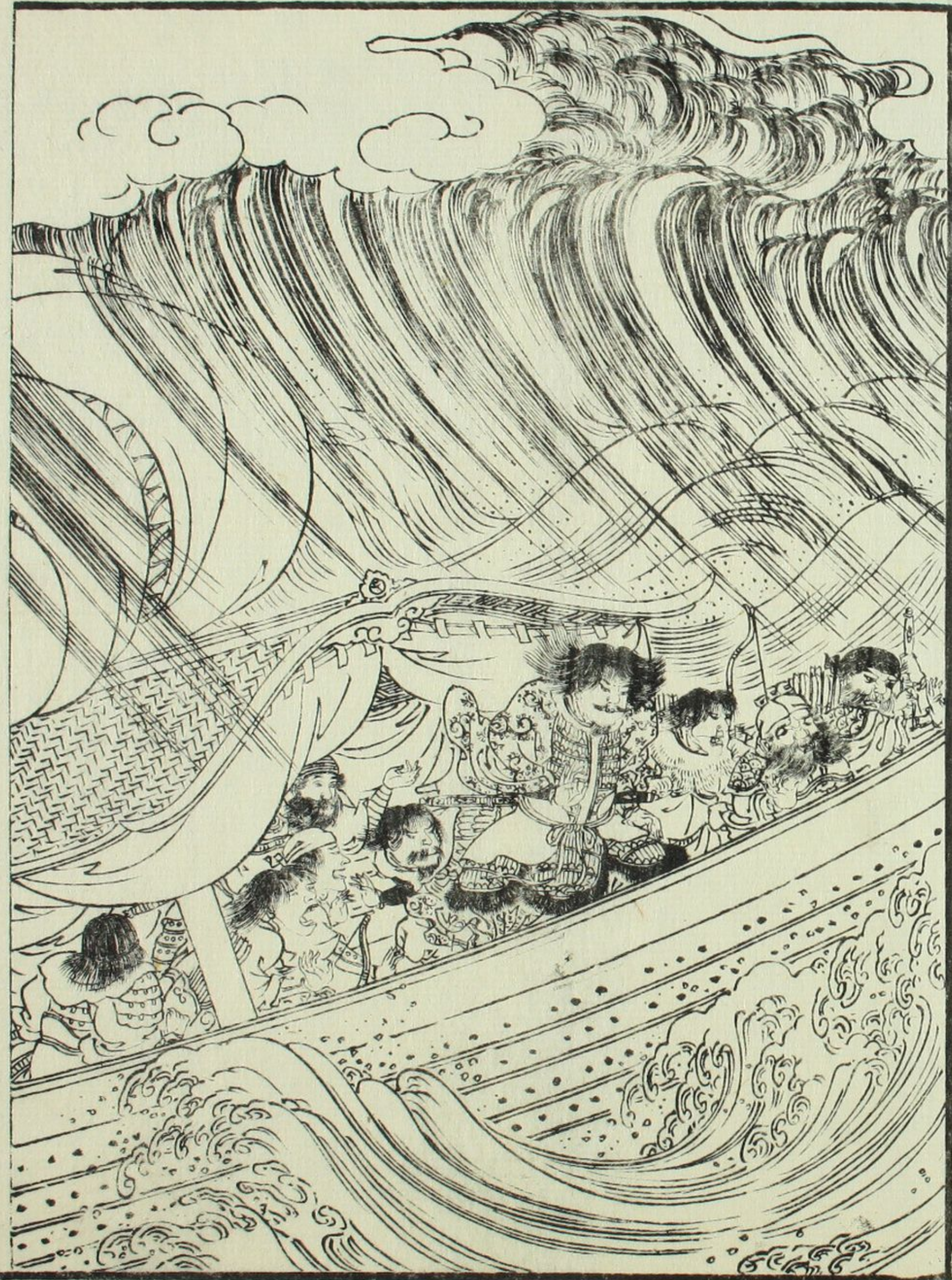
えん

藤原春元
入江

此の形は田舎
 入道のあらわし
 身のかたはるわ
 の身は載たり
 自の泳ありその
 ちのこの吾妻の
 裏の東人といふ
 住いあつとあり
 の東人のあつ
 人あやまら



考へ



日本武尊東夷征伐
 時相模國より上総
 國を往んこと多し
 其海上暴風忽ち起り
 王船漂蕩して危く
 其時舟楫媛自の御身
 をりて贖ひ尊
 の命をたすけ
 海神は誓ひ
 竟に淵を披
 て入たまひ
 此の事
 日本紀に
 記す

母は小田原北条家の河野景虎の末娘丹波守丹波元成の中子葛西村井の地を以て傳へて小田原に
井の龜戸村に傳へて則此社の北の人材と云ふ昔の社地の由丹波守の末娘と云ふなり故に當社を
傳へて云ふなり

殖髮聖德太子堂 同所龜戸天満宮の裏門の通り川端に傍

て慈雲山龍眼寺といふ天台宗の寺境に安置して聖德太子の

所影の太子自親彫造ありありと所長二尺五寸あり

其の鬘髮を殖髮と云ふなり

當寺藏太子縁起云推古天皇十一年癸亥

太子所齡二十二歳同年十月廿八日檜隈宮におひて靈本を得

る自親彫像を作り班鳩の夢殿に納りし事

其後代之帝王大寺をたり世々の君子堂に移し仍天智帝の

七年に百濟寺を嘗じて安置奉りしより慶長七年壬寅にあり

近の間南都大安寺及び花洛蓮花王院高雄の神護寺あり

豆別田方の般若王寺相列鎌倉の法善堂武列小菅の最明寺

江別滋賀菅原寺撰別金胎寺等へ移し奉り竟に宝曆十二年

壬午十月武列荏原郡の清谷寺より移し長らく當寺に安置

し奉りしなり

當寺の後園萩を多く栽て中秋の頃園花の時節に壯觀

たり故に世俗萩寺と字せり

妙見大菩薩 日川端橋を越て向ふ角にあり日蓮宗法

性寺に安じ本尊の末由詳かりく近世靈驗著しく諸人

常に絶え堂前に影向松と号する靈樹あり本尊初に此樹上

降臨ありしといふ故に星降松とも千年松とも呼ぶ元和の頃

大樹 此地に玉とせあり一頃更に境の松と号を賜ひしと云

傳へ

天松山最教寺 同所三丁とありを隔て西の方にあり日蓮宗

よりて本尊の釋伽如來の像を安じ寛永年間延山二十七世通

心院日境上人阿基に當寺に鎌倉將軍惟康親王蒙古鎮制

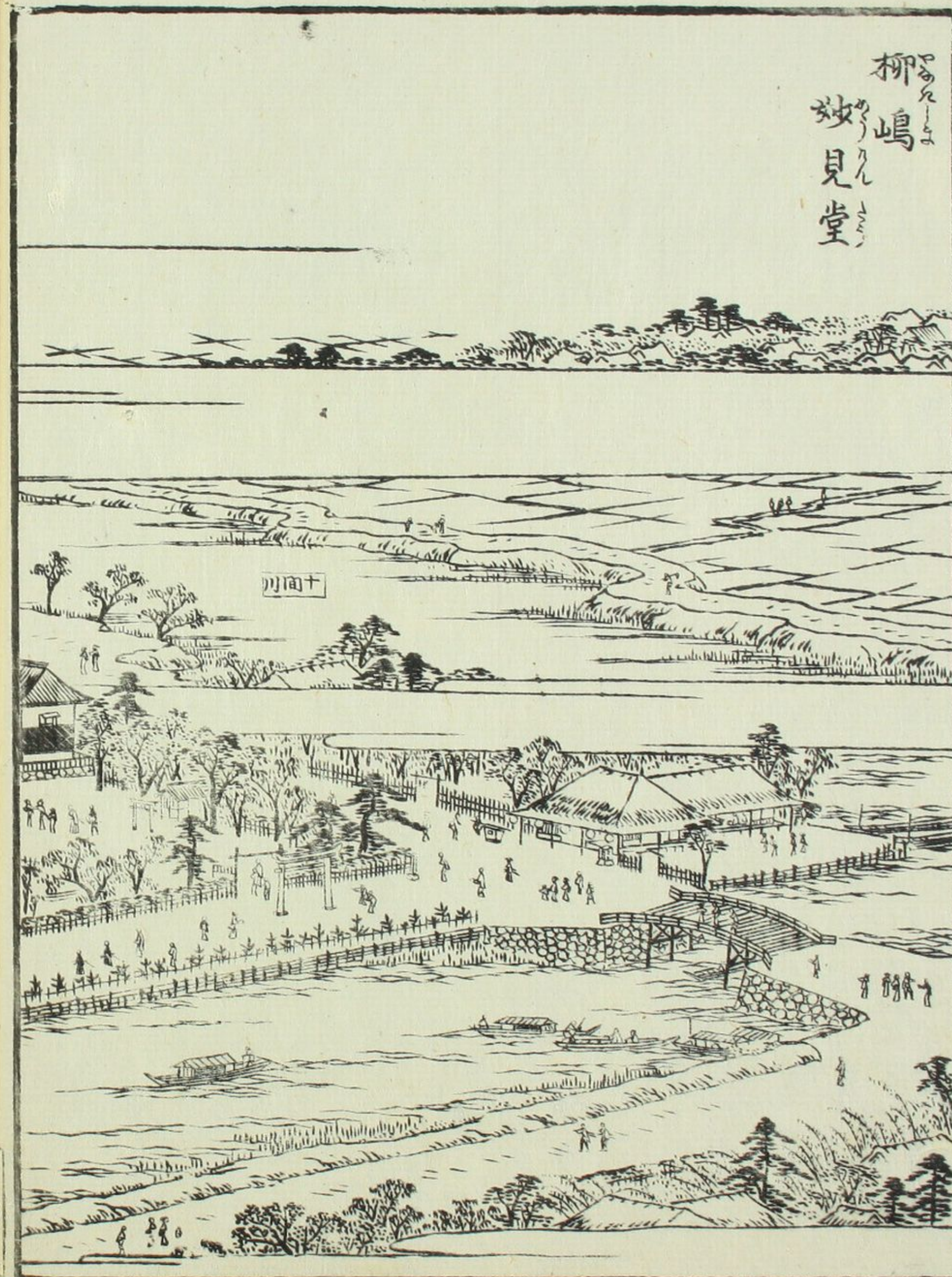
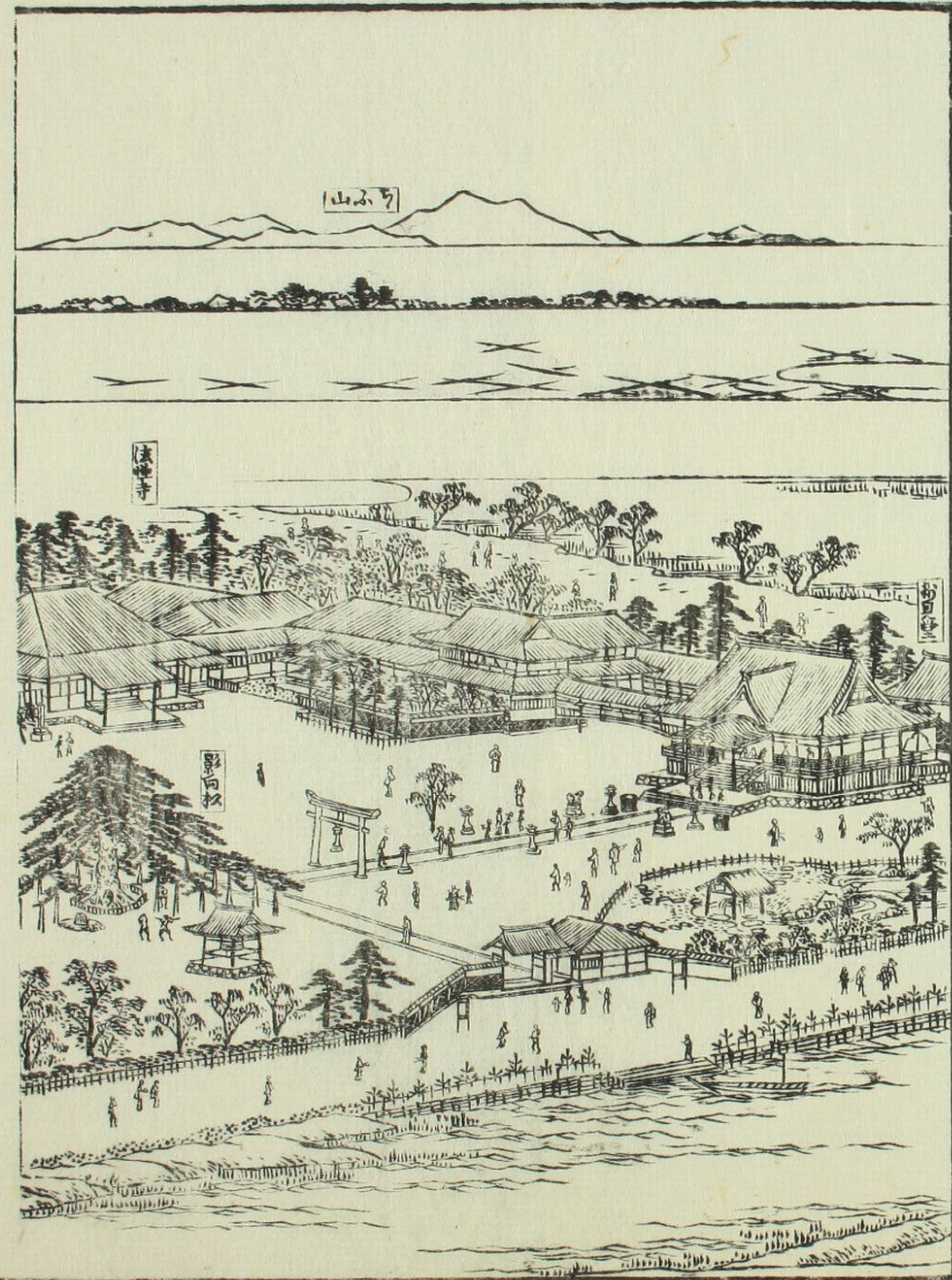
龍眼寺

庭中萩を多く
栽て中秋の一
奇観なり故に
俗呼て萩寺と
稱せり萬葉集
茅子よ作り初
物鹿鳴草よ作
續日わ後紀よ
仁明帝美和
元年八月清涼
殿に内宴と
是を芳賀華
の燕といふと
ありて皇朝
古より萩を



愛せられ
車やの
如し

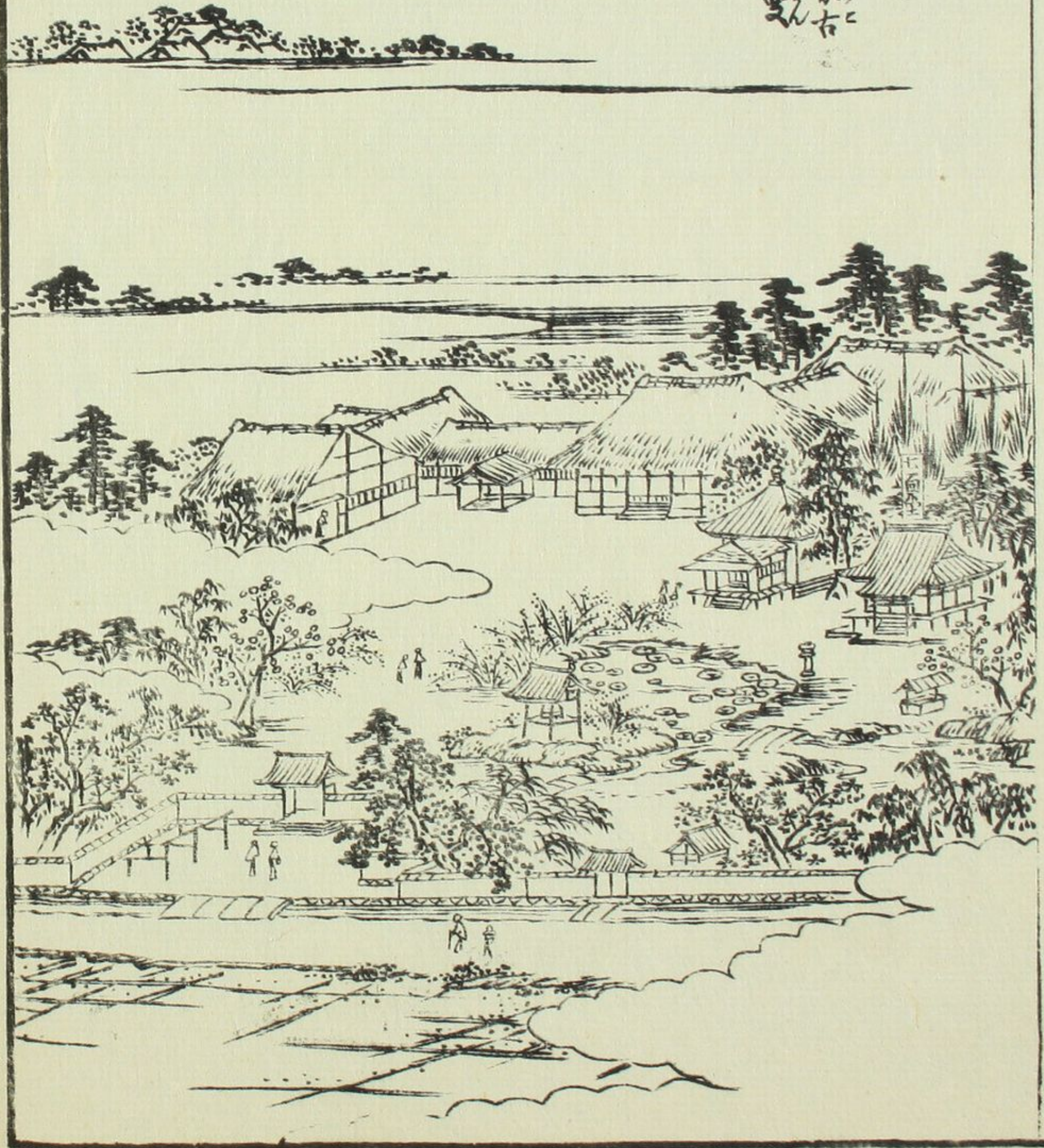




押上

最教寺

當寺は蒙古
退治の旗曼
茶羅あり



の旗曼茶羅あり

境内あり本山身延同社の靈像ありと云三澤流形精の本寺ありて當寺は第一の

日旗曼茶羅

一幅

竪六尺五寸

毎歳七月十六日
よりおれし二日
より虫佛とて諸
七面堂に揚て諸
人子孫に心
月の丸の曼陀
羅の身延山に
あり



竪六尺五寸

西面之大旗來由記
弘安四年辛巳五月十一日從大元國蒙古防賊船
四時八艘人龍數二萬四千餘人於九所禱之戰
其時這八龍王御旗先立向日親王九人給時禱為
大漫荼羅令書此則御旗先立向日親王九人給時禱為
武其人將至九別破異國江靈神擁護有神風吹彼賊
船其數等不殘異國江靈神擁護有神風吹彼賊
我家是預給畢破異國江靈神擁護有神風吹彼賊
這西面之大旗者惟康親王所持之御旗也弘安
四年五月二日旗一從親王國古來八龍王艘人
數二萬四千餘人也于時親王國古來八龍王艘人
角書是為持九州內十襲蒙古武列池上村是也
令正應元年十月十三日蒙古武列池上村是也

蒙古退治旗曼荼羅來由

二年庚辰春二月
傳之祖の至元二年日本高麗人趙孟頫日本國に通じて
者を擇み同二年八月兵部尚書弘吉剌等に命じて使を遣はし
蒙古手進元使回使一書を以て使を遣はし
平とては於て所遣海 元王憤て阿刺罕 阿刺罕途て病は傷
を以て是を代し 范文虎及竹都洪茶五等の四將は師十萬を率
廉倉よりかいて元使杜世忠を殺せしむ
人皇九代後宇多帝御宇弘安
右衛門大夫宗仲判

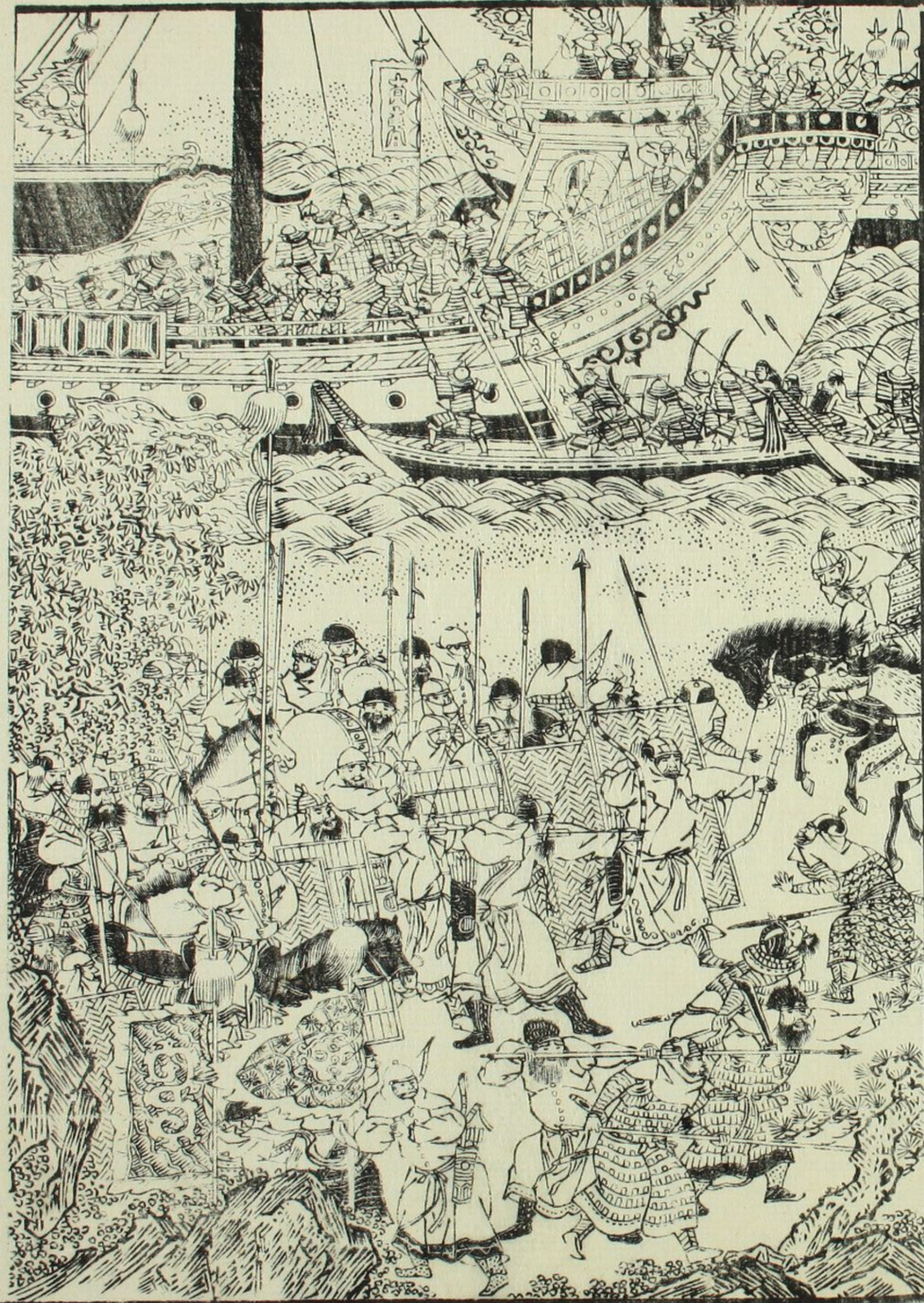
一めて日本を撃つこと

東國通鑑卷の三十八高麗記云茶五所都紫麗漢四萬の軍
と率て合浦を發し范文虎軍十萬を率て江南を
渡り俱一破鳴の會と太平記
同四年辛巳夏五月 元至元十八年
船 東國通鑑戰艦二千五百艘又太平記七萬 督一未て鎮西に冠一壹岐討馬
餘艘と縁起四十餘艘と一なり
の二鳴及び筑前肥前に入る 元史日本傳六月海入七月平壺傳は西九月
平壺より平戸より戸部通を平戸より比羅度と云三が會 天下の人民戰慄
お東鳥に作る五龍山の鷹鳴り此鳴は筑前の國にある所なり
せざるはすらすは於て鎌倉より征夷大将軍惟康親王蒙古退治
の爲自九列に向ひしより宇都宮貞綱をして先陣の大將た
らむとす日蓮上人に命じて日月の旗の山中に大漫荼羅を
書し其旗を貞綱と號し西海に發向せしむ其時同辛酉七月
一日より貞綱海濱に至り彼旗を押さるる颶風俄に起り逆
浪天を浸し賊船漂蕩し或は巖崖に觸て多く壞れ壹軍
溺死して魚腹に葬らるるの其數を知ると元師大に敗れ
と擲する者凡三萬人悉く是れ其首と其餘于間莫青吳



鎌倉將軍
惟康親王
蒙古夫賊
退治の因

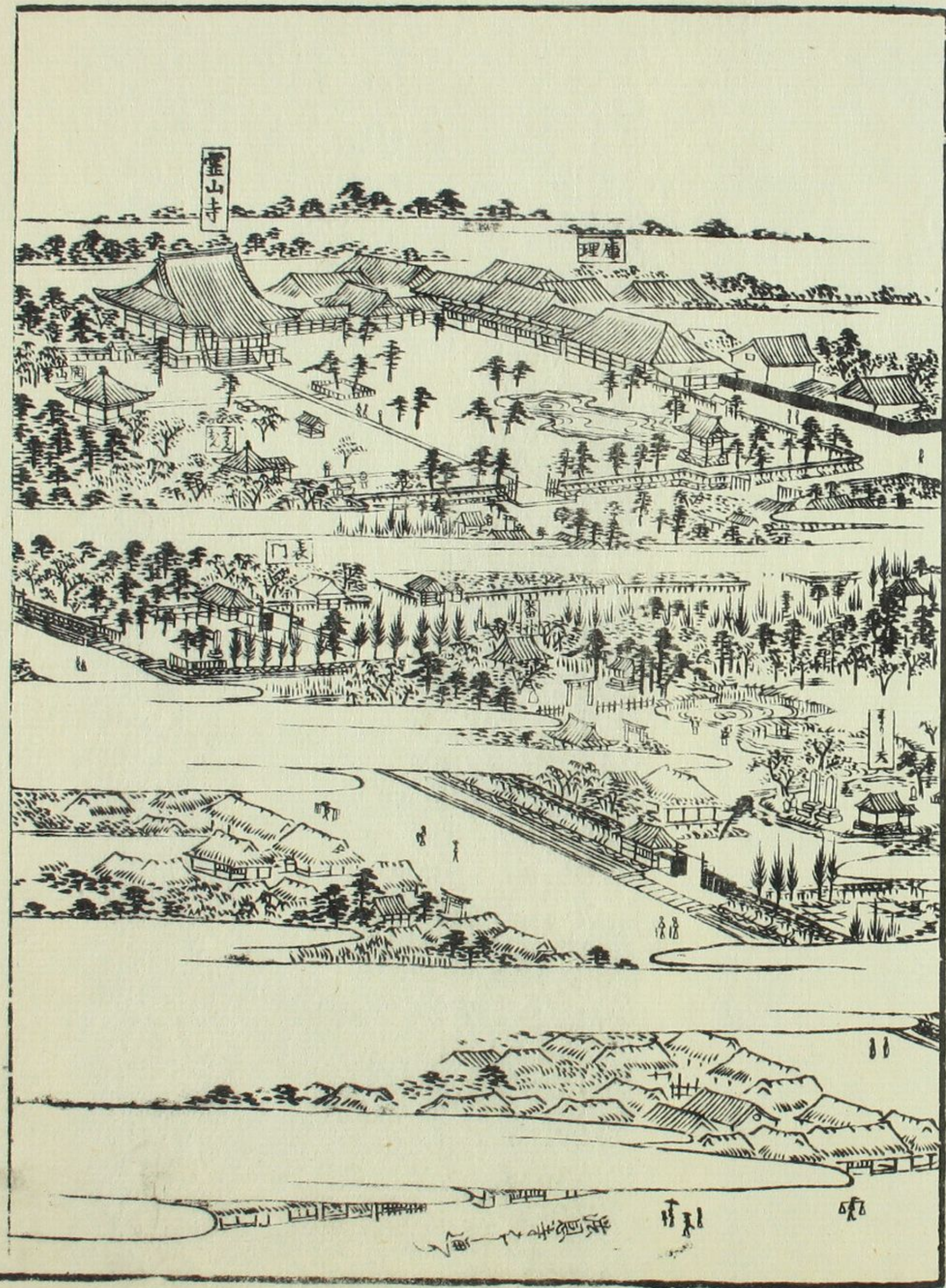




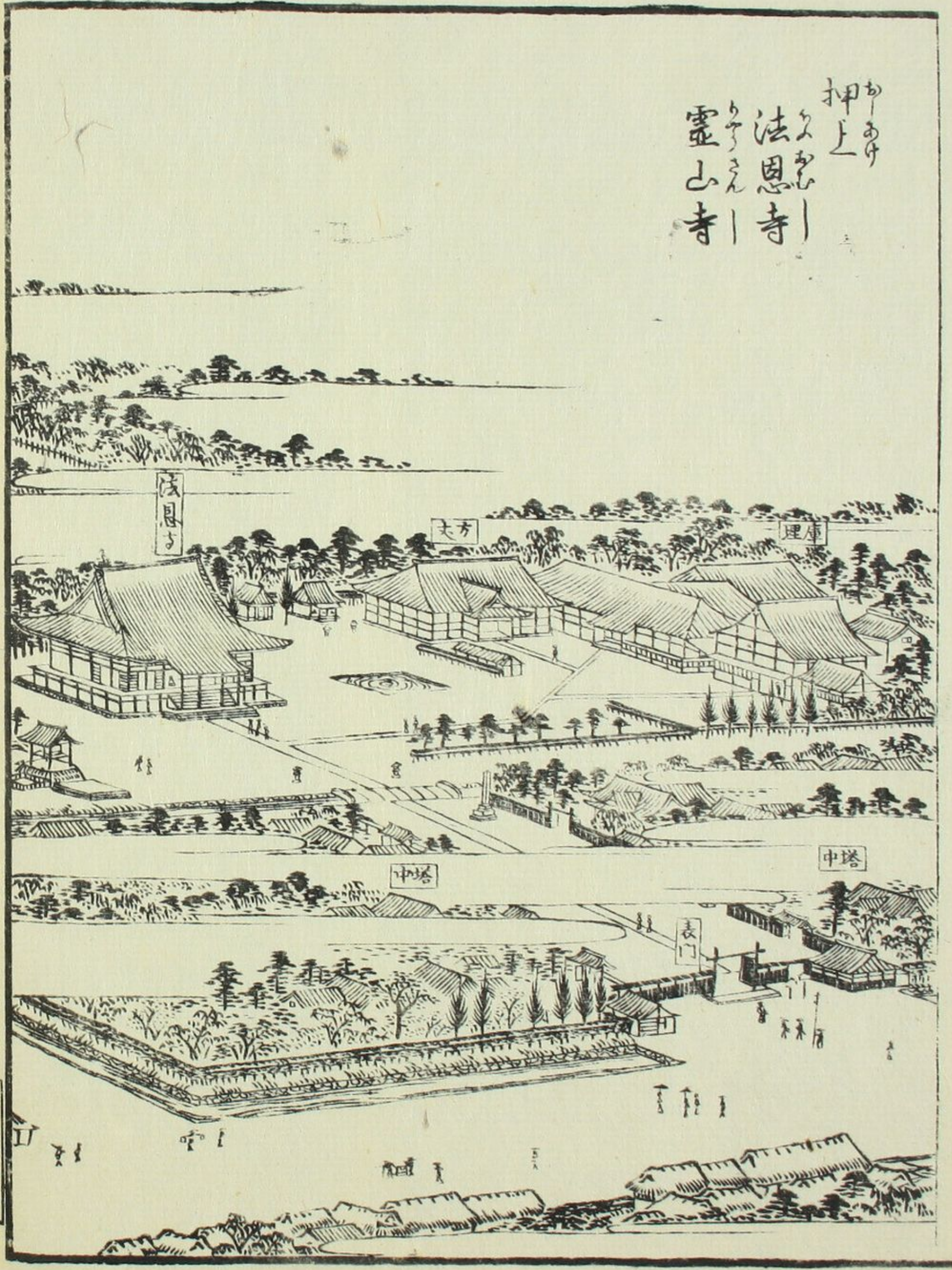
萬五等と赦して開き還し一は是此事に元主よりめん
るより蒙古の敗卒還るるを得る者僅に此三人の之大學衍義補
云えの世祖の至元十八年日本を撃兵十餘萬海島に死せ還るるを得る者僅に二十人とある
を異称日本傳に二十人の十の字は行ありと云え史に十萬の兵還るるを得る者三人のこと
ありて三人の名を考ふたり曰く千圓曰く莫青曰く吳萬五等なり以上元史日本傳東國
通鑑統志資治通鑑綱目大學衍義補五倫書帝王編年集成太平記北条九代記當寺
縁起等の
要と稱
綱末由を書して身延山に納む然を當寺岡山日鏡上人
延より携来すく永く當寺の什宝ならしむるとあり

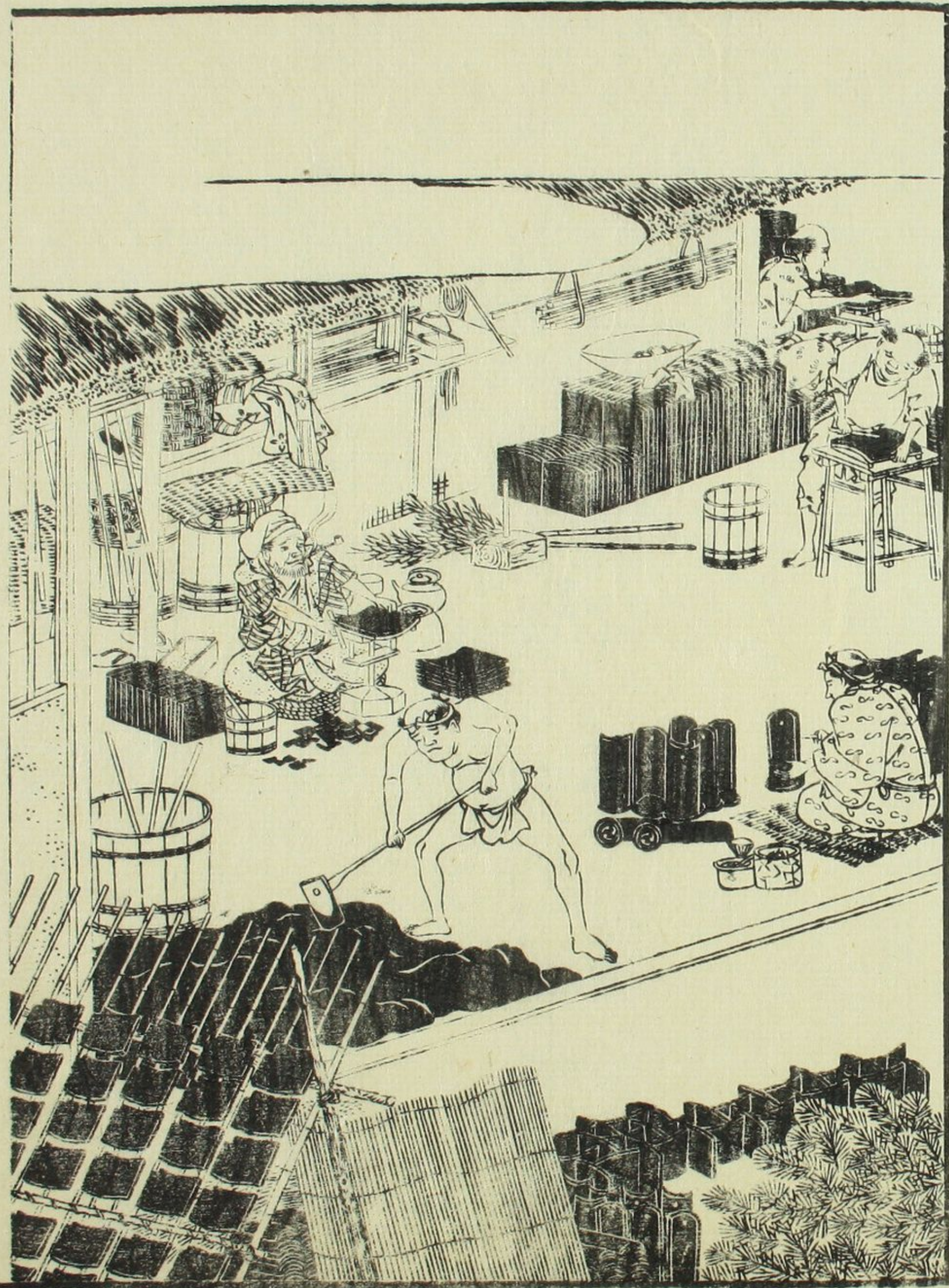
實聚山大法寺 同三丁より西より日蓮宗より同所法
恩寺に属と當寺は大永六年丙戌創立の梵宇よりて岡山の
法恩寺第八世大権院日巧上人なり其頃の法恩寺と共
今の御廓内平川の地よりと後谷中に移され又元禄年
同今の地より轉りしむるとあり
二十番神堂 本堂の左より番神の像は日巧上人の作り日巧上人の時癩瘡を病候し死せり又母也子はさる所に二十番神の靈ありより良事を得て

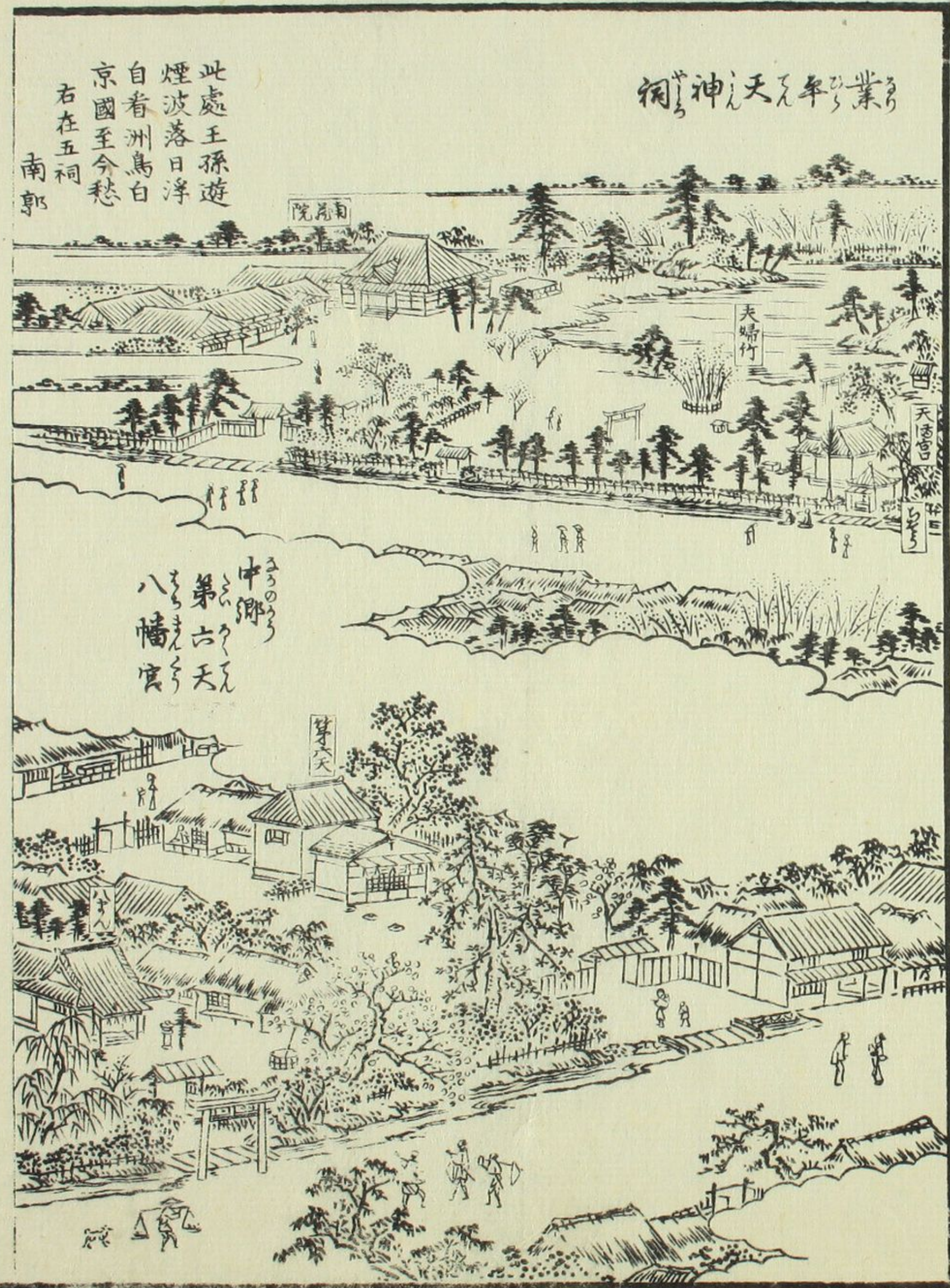
今我夢想の地廣布石を敬神の加護よりと後其をを刻し日巧上人
廣布石 當寺本堂に秘安に今卵塔の中に其模を畫たり真物の日蓮上人親筆の法海首題を鐫るる石塔なりはく云性在此靈石龜戸村の地より
龜戸村昔の鎌倉人の海道たり建長五年日蓮大行總綱より鎌倉よりありて
布石と号く其後千葉新田傳より千葉石とも移り然るに日巧上人の性性千
葉氏なり一命に生れ御深度の後當寺を創す一此靈石をももに安んずありて巧所も又
自此石面より二十番神の尊号をも
彫刻せられあるとあり
常在山靈山寺 二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
淨寂十八檀林の隨一あり本寺阿弥陀如來の像の慈覺大師
の作釋迦如來の像の唐佛なり 此像は二尊 教院といふ 岡山念蓮社專卷言
上人天起和尚と号す中古寺院既よ荒廢一檀林の統脈絶ん
とせしを最蓮社親卷俊應和尚深く此事を慨屢
官府に語して竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の淨
域に復せられし功を後住より讓て武別熊谷寺に隱る故よ
光蓮社明卷遊安廓榮和尚を中奥岡山とて廓榮和尚一宗



押上
 久忠
 法恩寺
 靈山寺







業平天元神祠

此處王孫遊
煙波落日浮
自看洲鳥白
京國至今愁
右在五祠
南郭

中郷
第六天
八幡宮

の高徳碩学として往生要集指麾抄を著し大いに修行する
 當寺昔の湯嶋妻恋坂より一羽曆火災の後浅草に
 移りしより元禄年間今の比より傳る
 知恩院尊空法親皇御廟 本堂の西よりあり尊空親皇は深川小名木川より
五本松より川原居あり其故を云くくくく
 浄土傳燈系圖曰 尊空天蓮社帝譽号照滿伏見
 守邦親王子入于靈巖室剝漆嗣法住洛知恩院元
 禄元年十一月七日寂
 觀音堂 本堂の南右の方にあり奉るの慈覺大師の作として
掛昌一住尼が沙念持佛なりしと云
 平河山法恩寺 柳嶋出村町にあり日蓮宗として花洛本國寺
 の觸頭江戸三箇寺の一負たり本堂より宗祖上人の像を安ん
 日法上人の作なり相傳ふ當寺の太田大和守資高 道権の孫なり
法要靈場記
 先考六郎左衛門尉資康入道法恩齋 日恩
と号
 十三回忌追悼の爲に田村の内を寄附し日住上人を同祖とせ
 則大永四年甲申武列江戸下平河に精舎を營建し一家の靈

牌を居ると云

二十番神堂

本堂の前左の方あり関東古戦塚と云る所の云傍に二十番神の堂に資高北条家と云る里見義弘の口をめぐりて又北条五代記小田原実記等の書に由りて番神堂の前より神を香ひて思ひ定ぬるに再々之を云ふと昔の書に記す其の内の内城内平川の地ありなり

當寺往古の今の御城内平河より本住院と号すなり

野原役帳に本住院寺より三田内島原分の地を法思まと改し後世の事と

と云たり遠く天正の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の地へ

轉せしれ元禄の初今の地へ移れたりと云り

是乃ら平河より法思坂へ移りたりと云り

葉平天神社 中の郷南藏院と云る天台宗の寺境あり傳りか

在原葉平朝臣の霊を鎮ると云

の舟のありの浦まで覆り溺死せり里民塚に築こめたり故に塚のうらと舟の

と云紫の一本舟も葉衝は作り武主と云る類ひ多しと云り

と云りたゞと求涼亭云く此祠昔の今小梅の水府公法中まきの地ありと云り横川

中郷の頃今の地より移ると云り又南向亭の説は中の郷の葉平假住の地あり

按に當社の後遷給くと云り南洋より南向亭の茶所は二吉所の里の

神の相殿に葉平の霊と菅村とを合せたりと云り此處も隅田川の流地

葉平天神とい稱しりるなりとあり此説の如く伊勢物語を傳りたりとの

中郷八幡宮 同河南の方荒井町あり南番湯町天台宗泉

龍寺奉祀と相傳り文明七年乙未の鎮坐なりと云り

大六天祠 同北の隅大川端普賢寺別當なり當社も文明五年

癸巳の勸請なりと云傳り

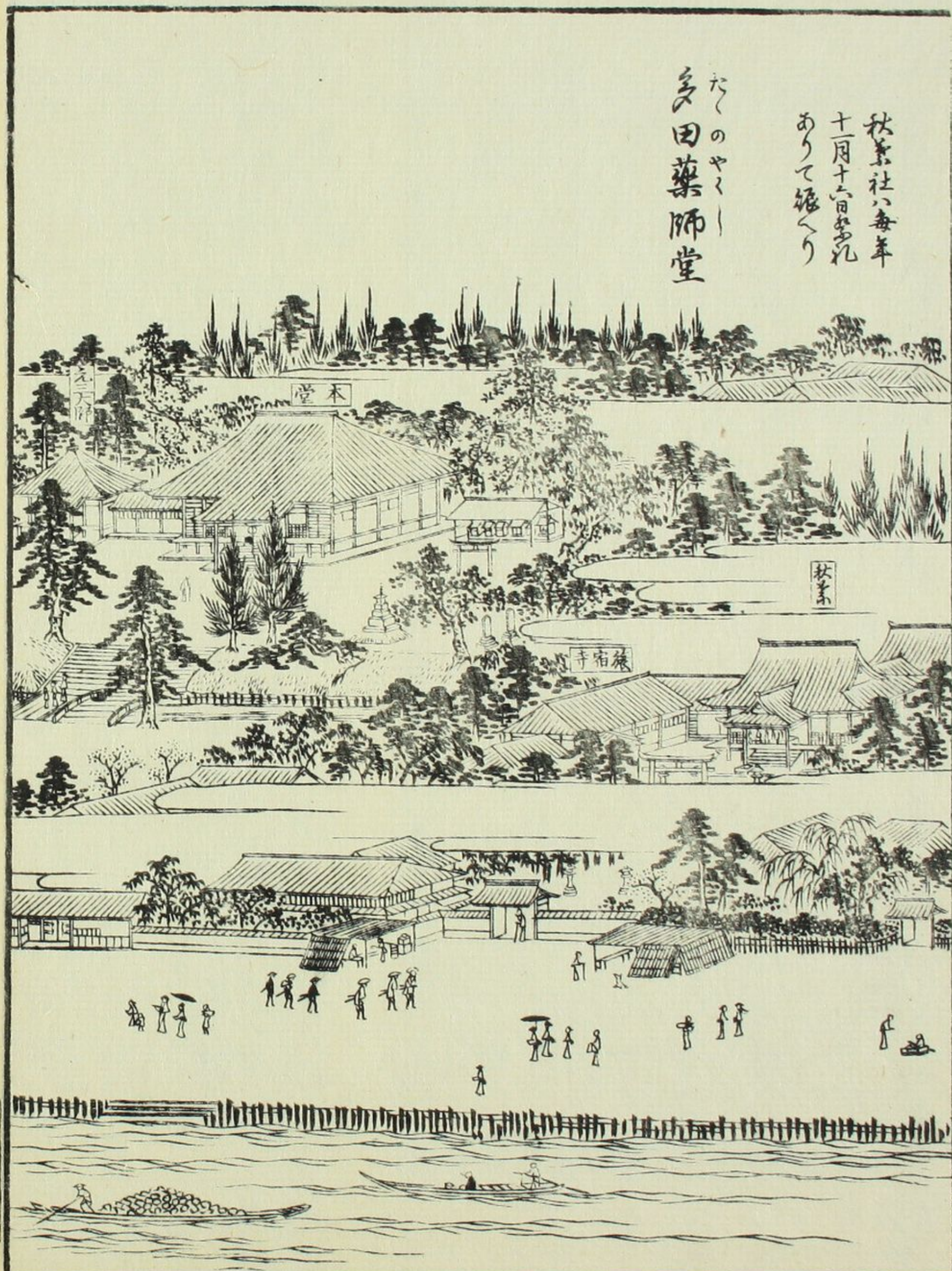
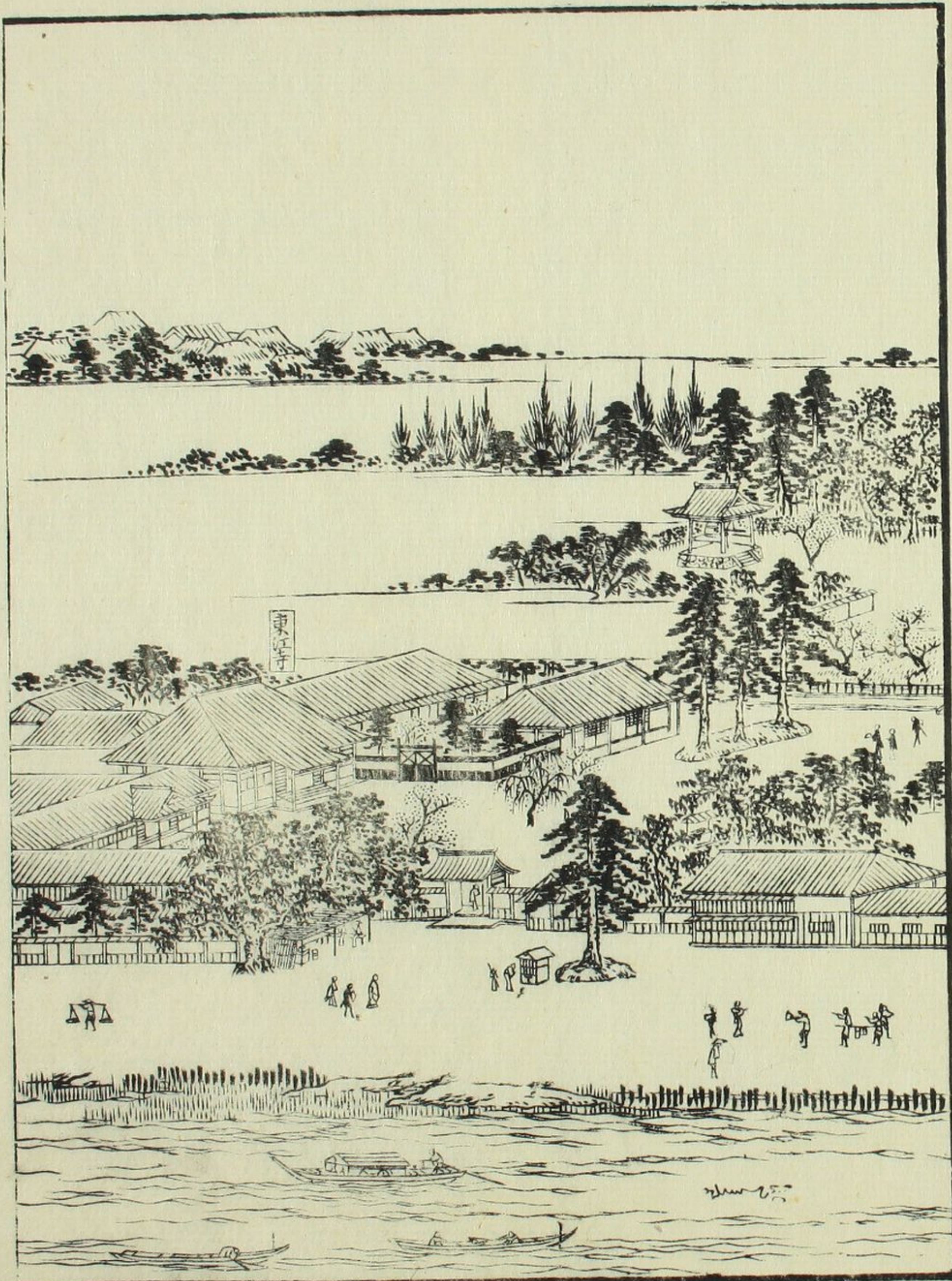
多田薬師堂 同河大川端にあり玉島山明星院東江寺と

号す

李三錫の筆なり奉る薬師佛の像の惠心僧都の作り

多田満仲公の念持佛なりとい

相傳り村上帝御宇天徳二年撰別多田郷に一字の伽藍を



中之郷
さくら井

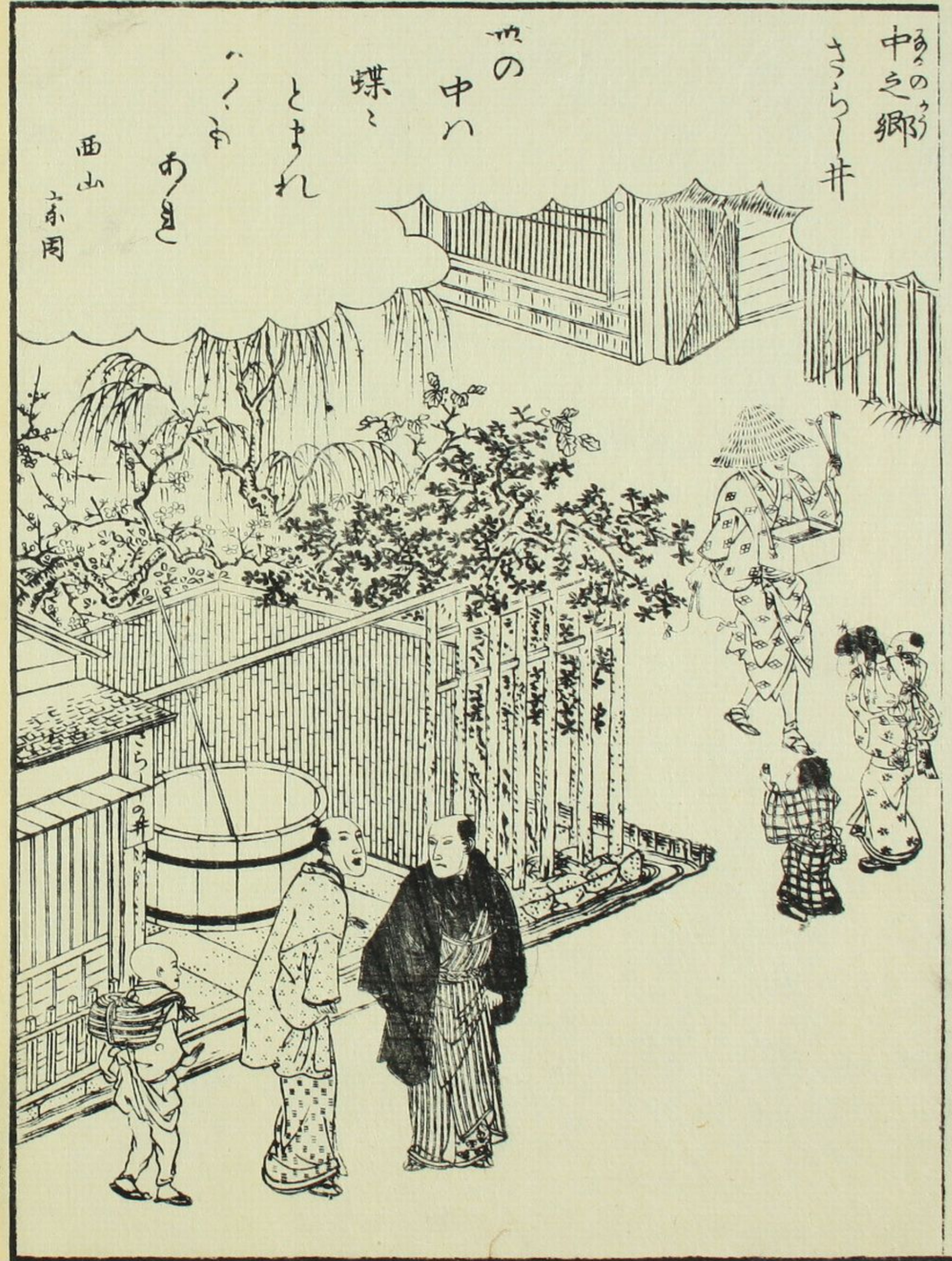
中の

蝶

とまれ

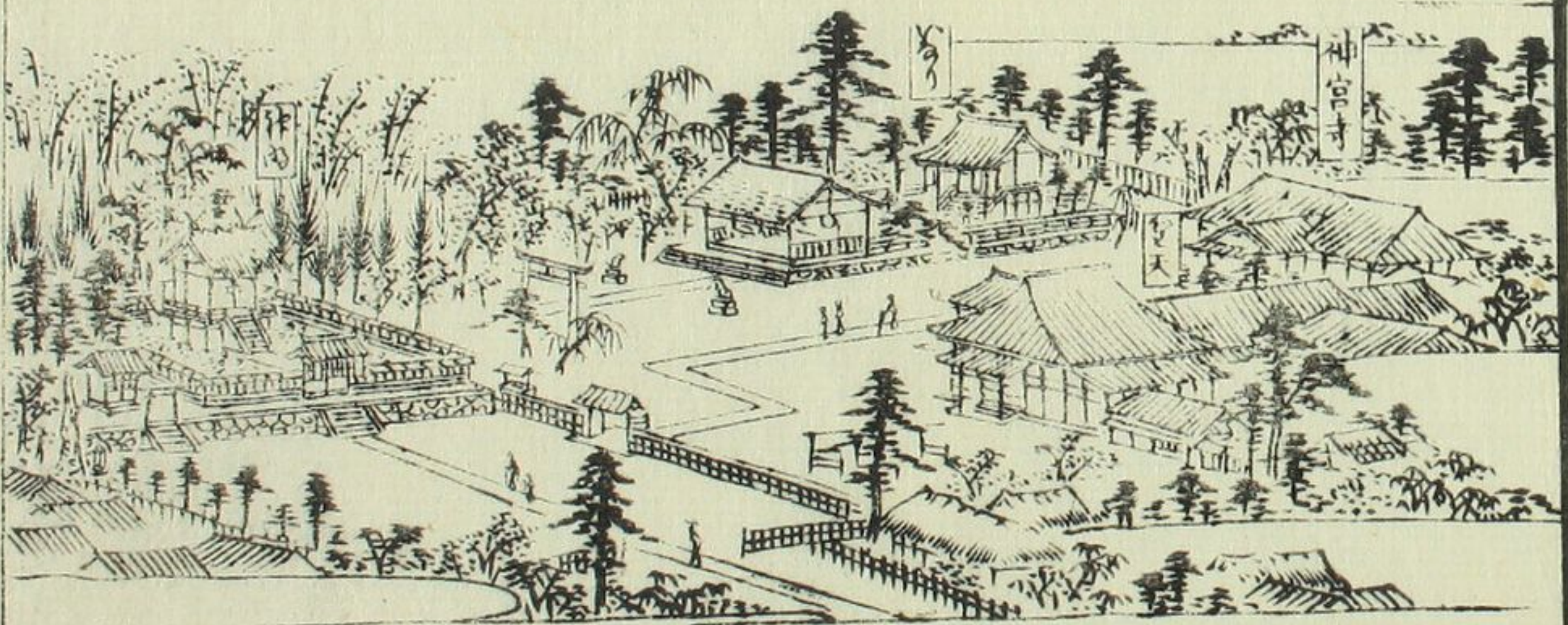
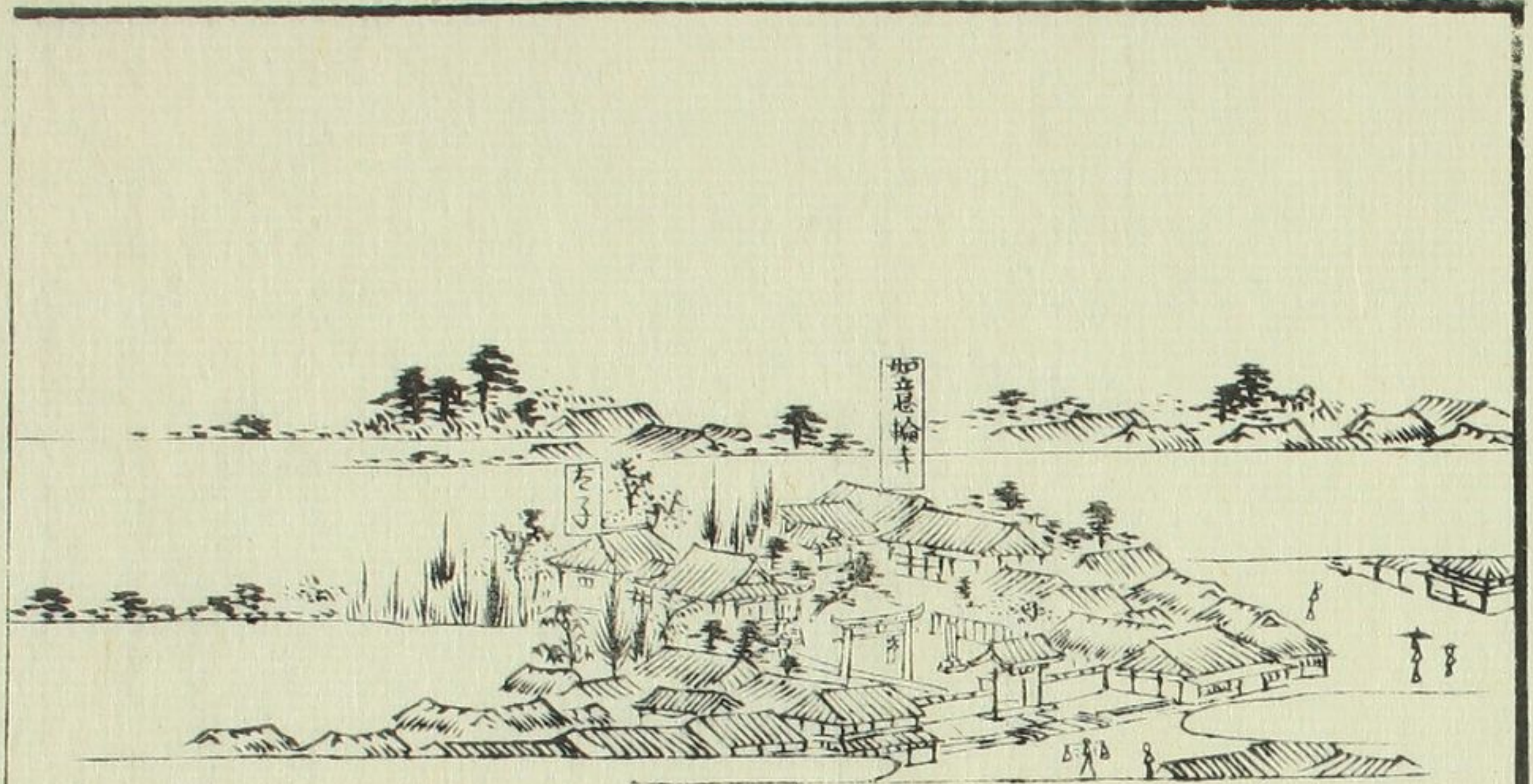
あま

西山
ふ東岡

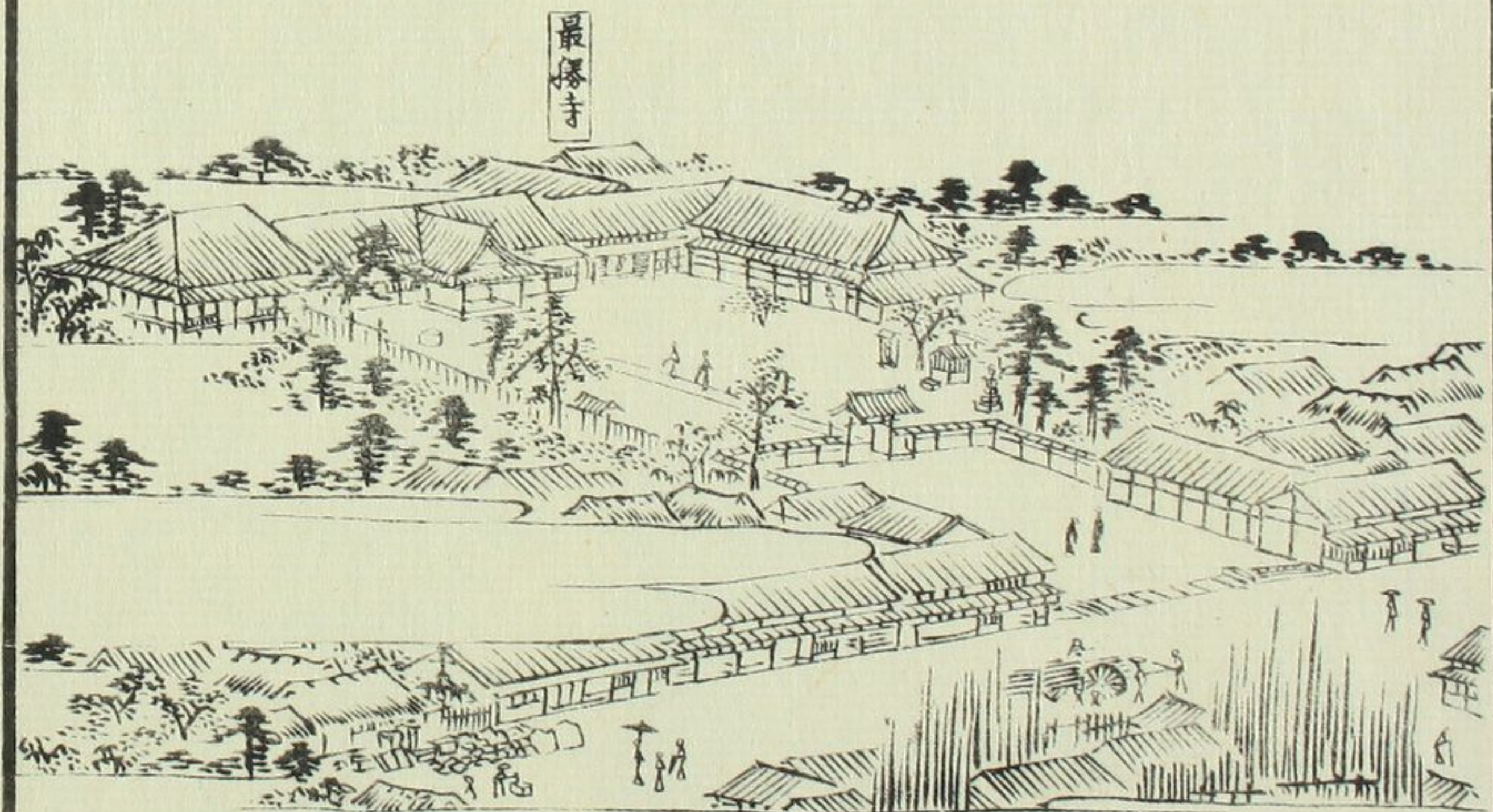
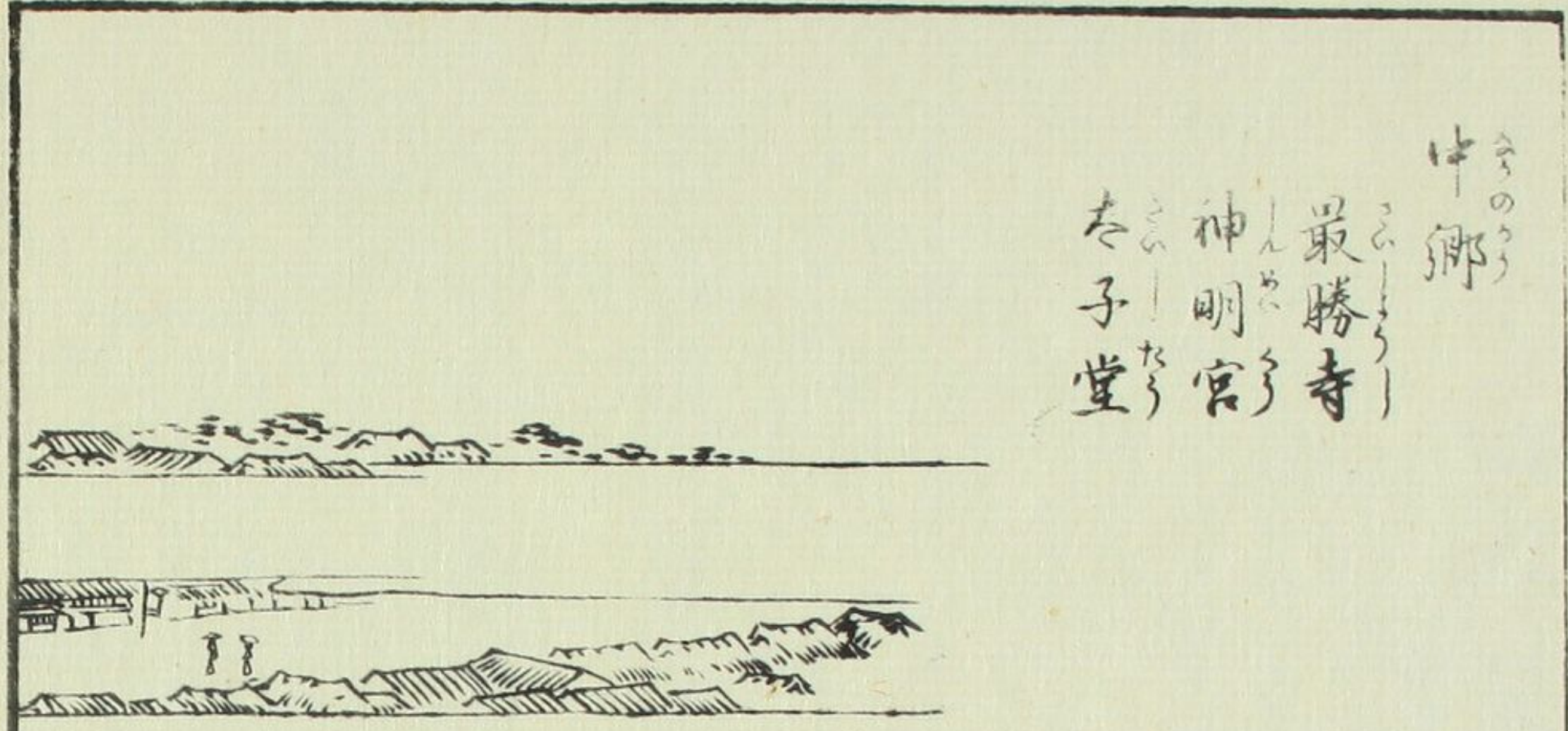


造管ありて沙羅連山石峰寺と號し此本寺を安置之其
 多文永の頂兵火に罹りて諸堂悉く回祿と依て一山の丈
 衆られを悲之此本寺を石函に収め之山中に埋め奉り忽
 夫より後星霜を移て慶長元年郷民等沙羅山中に於て
 此石函を穿出り蓋し沙羅連山石峰寺薬師の銘あり郷
 民等奇異の思ひを之れ一寺と一字を管と是を安置同八年
 其庵主宗玄と云者に本寺を告めありて京所五条の因幡
 堂に暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の邊
 に堂舎成建て石峯寺と号す寶永の頃彼寺に黄檗の子
 宗和尚深草に移て其時故ありて本寺薬師佛を當寺に
 安置せり

照法山本久寺 北本所表町あり日蓮宗ありて平賀本土寺
 に属して天正三年乙亥の創立ありて岡山清眼院日有上人と



中郷
最勝寺
神明宮
太子堂



宇を當寺に安置する所の宗祖大士の像ハ日朗所御首を彫刻
一 日法所全體を造り添られしとの體中三寸に六寸の首
題の札を収めたり日朗の一日法等の真跡なりとのり
此御影始谷中感應寺に安置と元禄四年彼寺改宗の時
檀家ハ八牧弥宗と云る有信の人ありし此影像あらひに
三光天子大黒天等と其表よりして宗殺ありしと後當
寺に安置しありたり境内安垂の七面大明神ハ花洛村雲の
尼御所隨龍寺殿仕女數馬女感得の靈像とて故ありて當寺
に安垂しありたり

正覺山妙源寺 同所北本所番場所にあり日蓮宗よりして下
野佐野妙頭寺ハ屬と建武年間草創よりして中老僧天目
上人用山たりとのり總門の額正覺山のニ大字ハ平林淳信の
筆跡よりして清日居と記してあり

牛寶山最勝寺 明王院と号と同所表町にあり天台宗よりして
東叡山ハ屬と本寺不勅明王の像ハ良辨僧都の作り當
寺ハ牛御前の別當寺よりして貞觀二年庚辰慈覺大師草創
良本阿闍梨阿山たり寛永年間 大樹 此辺津遊彌
の頃屢當寺ハ 入所ありとせられしより其頃の假の所殿杯
管構りしと並れたりとのり 今由那殿の條を記す
山王権現を觀清也

牛嶋神明宮 同所ハ並ハ相傳ハ貞觀年間の造座なりとのり
當を神宮寺と稱して最勝寺よりして兼帶と
是戸名所記云安徳帝の
壽永年間本所の郷民
夢をく伊勢大神宮虚字よりして大光月の内に微妙の所声とて我ハ土安徳天皇
元海と云法義經壽量師の文を唱へ我ハ伊勢大神宮なりとのり
伊勢の所神を勧誘しありたり

同所ハ牛嶋北条家の所限横よりして戸牛島四ヶ村とありて
壽永元年に郎の所の中
より今も本所中の所ありて横條とての所ありて戸の古木に回向院の所ハ牛島と記して
あり

太子堂 同所ハ町にあり天台宗如意輪寺に安置と本寺ハ聖徳太子

の像（まが）十六歳に（ま）あつた時（とき）自（みづか）親（ちか）造（ぞう）りあつたり當（あた）寺（てら）の傳（でん）和（わ）
 天皇（てんかう）の嘉祥（かしょう）年間（ねんかん）慈覺（じがく）大師（だいし）東園（とうえん）進（しん）化（け）の頃（ころ）の創（そう）建（けん）りて帝（てい）百（ひやく）
 畝（あし）の水（みづ）田（でん）を寄（よ）附（づ）りあつた天文（てんぶん）の頃（ころ）此（こゝ）地（ち）稅（ぜい）融（ゆう）氏（し）の災（わざ）に（あ）り
 とくも太子（たいし）の靈（れい）像（ざう）の自（みづか）火（か）燭（しやく）を遠（とほ）く出（で）るひて恙（や）なかりし
 江戸（えど）名（な）所（じよ）談（だん）よ（よ）き（き）なり

王子（おうじ）横山町
 成内（なるうち）頼一郎

